

Oracle® Enterprise Performance Management System

Lifecycle Management Guide

リリース 11.1.2.4

著作権情報

Lifecycle Management Guide, 11.1.2.4

Copyright © 2008, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

著者: EPM 情報開発チーム

OracleおよびJavaはOracle Corporationおよびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

Intel, Intel Xeonは、Intel Corporationの商標または登録商標です。すべてのSPARCの商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc.の商標または登録商標です。AMD、Opteron、AMDロゴ、AMD Opteronロゴは、Advanced Micro Devices, Inc.の商標または登録商標です。UNIXは、The Open Groupの登録商標です。

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT END USERS:

Oracle programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, delivered to U.S. Government end users are "commercial computer software" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, shall be subject to license terms and license restrictions applicable to the programs. No other rights are granted to the U.S. Government.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション(人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む)への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する場合、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性(redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したこと起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

目次

ドキュメントのアクセシビリティについて	11
ドキュメントのフィードバック	12
第1章. ライフサイクル管理について	13
ライフサイクル管理と移行	13
ライフサイクル管理の機能	13
ライフサイクル管理のコンポーネント	14
ライフサイクル管理をサポートするEPM System製品とコンポーネント	15
第2章. ライフサイクル管理の開始	17
ライフサイクル管理の要件	17
使用の前提条件	18
ソースと宛先に関する考慮事項	18
ファイル・システムの考慮事項	18
アップグレードの考慮事項	18
アプリケーションおよびアプリケーション・グループ	19
ライフサイクル管理での移行時のEPM System環境の可用性	19
その他の重要事項	19
ライフサイクル管理のインストール	20
Shared Services高可用性用のライフサイクル管理の構成	20
ライフサイクル管理のクイック・スタート	20
バックアップおよびリカバリ	22
セキュリティ	23
第3章. ライフサイクル管理の用途	25
Shared Servicesの用途	25
ネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)の移行と一括のセキュリティ更新	26
タスクフローの移行	26
Shared Servicesレジストリ・データの編集	26
特定のEPM Systemアプリケーションのプロビジョニング・アーティファクトの移行	26
LCMデザイナーの役割での移行	27
アーティファクト移行の用途	28
製品間でアーティファクトの依存関係があるアプリケーションの移行	29
編集目的でのアーティファクトのエクスポートとインポート	29
アーティファクトの単独編集	29
バージョン・コントロール・システムにおけるライフサイクル管理の使用	30
ライフサイクル管理と既存のワークフロー・システムとの統合	31
第4章. Shared Services Console	33
Shared Services Consoleの概要	33
Shared Services Consoleの起動	33
ライフサイクル管理およびShared Services Consoleの統合	34
第5章. アプリケーションおよびアプリケーション・グループでの作業	35

概要	35
アプリケーション・グループの使用	35
アプリケーション・グループの作成	36
アプリケーション・グループ・プロパティの変更	37
アプリケーション・グループの削除	37
アプリケーションの管理	38
アプリケーションの移動	39
複数のアプリケーションの削除	40
アプリケーションの削除	40

第6章. ライフサイクル管理およびShared Services Consoleでの作業 41

アーティファクトの表示	41
アーティファクトの検索	42
アーティファクトの移行	43
ファイル・システムへのエクスポート	44
アーティファクトのファイル・システムへの再エクスポート	46
ファイル・システムからのインポート	46
移行オプションの設定	47
編集する個々のアーティファクトのエクスポートとインポート	54
アプリケーション・アーティファクトのダウンロードおよびアップロード	56
ネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)の移行	60
Shared Servicesレジストリ・データの編集	60
Shared Servicesレジストリ・データの表示	62
Shared Servicesレジストリ・データのエクスポート	62
Shared Servicesレジストリ・データの編集	62
Shared Servicesレジストリ・データのインポート	63
移行プロパティの編集	63
移行データの削除	65
ライフサイクル管理のレポート	65
移行ステータス・レポート	66
アプリケーション監査レポート	67
アーティファクトの変更レポート	68

第7章. ライフサイクル管理ユーティリティの使用方法 71

ライフサイクル管理ユーティリティのプロセス	71
ライフサイクル管理ユーティリティの機能	72
ライフサイクル管理ユーティリティのインストール	73
移行定義の使用	73
移行定義の作成	74
移行定義ファイルのXMLスキーマ	74
移行定義ファイルの要素	74
サンプルの移行定義ファイル	79
ライフサイクル管理ユーティリティの使用法	79
概要	80
移行を開始する前に	80
ライフサイクル管理ユーティリティの実行	80
Foundation Services以外のマシンからライフサイクル管理ユーティリティを実行	81

コマンドライン引数	81
追加のコマンドライン・ユーティリティ	85
アクティビティの変更レポート	86
EPMExportAll	87
EPMImportAll	87
付録A. デプロイメント・メタデータとライフサイクル管理	89
デプロイメント・メタデータのアーティファクトについて	89
デプロイメント・メタデータの役割の要件	90
デプロイメント・メタデータのエクスポートおよびインポートの前提条件	90
デプロイメント・メタデータのアーティファクト・リスト	90
登録アーティファクト・リストについて	91
登録アーティファクト	91
Shared Servicesレジストリのアーティファクト	92
デプロイメント・メタデータの移行に関する考慮事項	92
デプロイメント・メタデータのエクスポートおよびインポートのオプション	92
ライフサイクル管理のログ・ファイル	92
付録B. Calculation Managerとライフサイクル管理	93
Calculation Managerのアーティファクトについて	93
Calculation Managerの役割の要件	93
Calculation Managerの移行の前提条件	94
Calculation Managerのアーティファクト・リスト	94
アーティファクト・リストについて	95
ルールのアーティファクト	95
ルール・セットのアーティファクト	96
式のアーティファクト	96
スクリプトのアーティファクト	96
テンプレートのアーティファクト	97
Calculation Managerアプリケーションの移行および製品間のアーティファクトの依存関係	97
移行におけるエクスポートとインポートのオプション	97
サンプルの移行定義ファイル	97
ライフサイクル管理のログ・ファイル	98
付録C. Essbaseとライフサイクル管理	99
Essbaseアーティファクトについて	99
Essbaseの役割の要件	100
Essbaseの移行の前提条件	100
Essbaseのアーティファクト・リスト	100
アーティファクト・リストについて	101
Essbase Serverアーティファクト	101
Essbaseアプリケーション・アーティファクト	102
Essbaseデータベース・アーティファクト	102
Essbaseの移行に関する考慮事項	105
Essbaseアプリケーションの移行と製品間アーティファクトの依存関係	106
移行におけるエクスポートとインポートのオプション	106
移行のエクスポート・オプション	107

移行のインポート・オプション	107
サンプルの移行定義ファイル	107
ライフサイクル管理のログ・ファイル	108
付録D. Essbase Studioとライフサイクル管理	109
Essbase Studioアーティファクトについて	109
Essbase Studioの役割の要件	109
Essbase Studioの移行の前提条件	109
Essbase Studioのアーティファクト・リスト	110
アーティファクト・リストについて	111
Essbase Studioアーティファクト	111
Essbase Studioの移行に関する考慮事項	111
Essbase Studioアプリケーションの移行と製品間アーティファクトの依存関係	112
移行におけるエクスポートとインポートのオプション	112
移行のエクスポート・オプション	113
移行のインポート・オプション	113
サンプルの移行定義ファイル	113
ライフサイクル管理のログ・ファイル	114
付録E. FDMEEおよびライフサイクル管理	115
FDMEEアーティファクトについて	115
FDMEEの役割の要件	116
FDMEEの移行の前提条件	116
FDMEEのアーティファクト・リスト	116
アーティファクト・リストについて	117
アプリケーション・データ・アーティファクト	117
グローバル設定アーティファクト	120
FDMEEの移行に関する考慮事項	121
FDMEEアプリケーションの移行と製品間アーティファクトの依存関係	122
移行におけるエクスポートとインポートのオプション	122
サンプルの移行定義ファイル	122
ライフサイクル管理のログ・ファイル	123
付録F. Financial Close Managementとライフサイクル管理	125
Financial Close Managementアーティファクト	125
Financial Close Management役割の要件	126
Financial Close Management移行の前提条件	126
Financial Close Managementのアーティファクト・リスト	127
アーティファクト・リストについて	128
Close Managerアーティファクト	128
Account Reconciliation Managerアーティファクト	130
Financial Close Management移行の考慮事項	133
Financial Close Managementアプリケーションの移行と製品間アーティファクトの依存関係	133
移行におけるエクスポートとインポートのオプション	133
移行のエクスポート・オプション	134
移行のインポート・オプション	134
サンプルの移行定義ファイル	134

ライフサイクル管理のログ・ファイル	135
付録G. Financial Managementとライフサイクル管理	137
Financial Managementアーティファクトについて	137
Financial Managementの役割の要件	138
Financial Management移行の前提条件	138
Financial Managementクラシック・アプリケーションの移行	139
Financial Management Performance Management Architectアプリケーションの移行	139
Financial Managementのアーティファクト・リスト	139
アーティファクト・リストについて	140
アプリケーションのベース・レベル・データ・アーティファクト	141
構成アーティファクト	141
ドキュメント・アーティファクト	141
ディメンション・アーティファクト	142
フォーム・アーティファクト	144
内部取引アーティファクト	144
仕訳アーティファクト	145
メンバー・リストのアーティファクト	146
フェーズ送信アーティファクト	146
ルール of アーティファクト	146
セキュリティのアーティファクト	146
Financial Managementの移行に関する考慮事項	147
Financial Managementアプリケーションの移行と製品間アーティファクトの依存関係	147
移行におけるエクスポートとインポートのオプション	147
移行のエクスポート・オプション	148
移行のインポート・オプション	148
サンプルの移行定義ファイル	149
ライフサイクル管理のログ・ファイル	150
付録H. Performance Management Architectとライフサイクル管理	151
Performance Management Architectのアーティファクトについて	151
Performance Management Architectの役割の要件	151
Performance Management Architectの移行の前提条件	152
Performance Management Architectのアーティファクト・リスト	152
アーティファクト・リストについて	153
アプリケーション・メタデータのアーティファクト	153
共有ライブラリ・ディメンションのアーティファクト	157
ディメンション・アクセスのアーティファクト	158
データ同期のアーティファクト	159
Performance Management Architectの移行に関する考慮事項	160
Performance Management Architectアプリケーションの移行および製品間のアーティファクトの依存関係	160
移行におけるエクスポートとインポートのオプション	161
移行のエクスポート・オプション	162
移行のインポート・オプション	162
サンプルの移行定義ファイル	162
ライフサイクル管理のログ・ファイル	163

付録I. Planningとライフサイクル管理	165
Planningアーティファクトについて	165
Planningの役割の要件	165
Planningの移行の前提条件	166
Planningのアーティファクト・リスト	167
アーティファクト・リストについて	168
構成アーティファクト	168
Essbaseデータ・アーティファクト	170
グローバル・アーティファクト	170
プラン・タイプのアーティファクト	174
リレーショナル・データのアーティファクト	176
セキュリティのアーティファクト	177
Planningの移行に関する考慮事項	178
Planningアプリケーションの移行と製品間アーティファクトの依存関係	178
移行におけるエクスポートとインポートのオプション	179
サンプルの移行定義ファイル	179
ライフサイクル管理のログ・ファイル	180
付録J. Profitability and Cost Managementとライフサイクル管理	181
Profitability and Cost Managementアーティファクトについて	181
Profitability and Cost Managementの役割の要件	182
Profitability and Cost Managementの移行の要件	183
Profitability and Cost Managementのアーティファクト・リスト	183
アーティファクト・リストについて	184
標準Profitability and Cost Managementモデル・アーティファクト	184
詳細Profitability and Cost Managementモデル・アーティファクト	186
計算制御アーティファクト	188
Profitability and Cost Managementの移行と製品間アーティファクトの依存関係	189
移行におけるエクスポートとインポートのオプション	189
移行のエクスポート・オプション	190
移行のインポート・オプション	190
サンプルの移行定義ファイル	190
ライフサイクル管理のログ・ファイル	191
付録K. Reporting and Analysisとライフサイクル管理	193
Reporting and Analysisのアーティファクトについて	193
Reporting and Analysisの役割の要件	193
Reporting and Analysisの移行の前提条件	194
宛先アプリケーションにおけるProduction Reportingジョブ・サービス・プロパティの構成	195
宛先アプリケーションでのInteractive Reportingデータ・アクセス・サービスのデータ・ソースの作成	195
Reporting and Analysisのアーティファクト・リスト	196
アーティファクト・リストについて	197
物理リソースのアーティファクト	197
セキュリティのアーティファクト	198
スケジュール・オブジェクトのアーティファクト	198
製品プリファレンスのアーティファクト	199

リポジトリ・オブジェクトのアーティファクト	200
管理オプションのアーティファクト	204
ファイル・システム上での個別のReporting and Analysisアーティファクトの編集	205
Reporting and Analysisのアーティファクト・タイプ	206
Reporting and Analysisの移行に関する考慮事項	208
Reporting and Analysisアプリケーションの移行および製品間のアーティファクトの依存関係	208
移行におけるエクスポートとインポートのオプション	208
移行のエクスポート・オプション	209
移行のインポート・オプション	209
サンプルの移行定義ファイル	209
ライフサイクル管理のログ・ファイル	210
付録L. Shared Servicesとライフサイクル管理	211
Shared Servicesのアーティファクトについて	211
Shared Servicesの役割の要件	211
Shared Servicesの移行の前提条件	212
Shared Servicesのアーティファクト・リスト	212
アーティファクト・リストについて	213
ネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)のアーティファクト	213
タスクフローのアーティファクト	214
Shared Servicesアプリケーションの移行と製品間アーティファクトの依存関係	215
Shared Servicesネイティブ・ディレクトリの移行オプション	215
ネイティブ・ディレクトリの移行インポート・オプション	216
ネイティブ・ディレクトリのCSVファイル	216
Shared Servicesタスク・フロー移行のエクスポート・オプションとインポート・オプション	223
サンプルの移行定義ファイル	223
ライフサイクル管理のログ・ファイル	224

ドキュメントのアクセシビリティについて

Oracleのアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility ProgramのWeb サイト <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=docacc> を参照してください。

Access to Oracle Support

Oracleサポート・サービスでは、My Oracle Supportを通して電子支援サービスを提供しています。詳細情報は <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=info> か、聴覚に障害のあるお客様は <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=trs> を参照してください。

ドキュメントのフィードバック

このドキュメントへのフィードバックをお送りください: epmdoc_ww@oracle.com

次のソーシャル・メディア・サイトでEPM情報開発をフォローできます:

LinkedIn - http://www.linkedin.com/groups?gid=3127051&goback=.gmp_3127051

Twitter - <http://twitter.com/hyperionepminfo>

Facebook - <http://www.facebook.com/pages/Hyperion-EPM-Info/102682103112642>

Google+ - <https://plus.google.com/106915048672979407731/#106915048672979407731/posts>

YouTube - <http://www.youtube.com/user/OracleEPMWebcasts>

1

ライフサイクル管理について

この項の内容:

ライフサイクル管理と移行	13
ライフサイクル管理の機能	13
ライフサイクル管理のコンポーネント	14
ライフサイクル管理をサポートするEPM System製品とコンポーネント	15



注:

この章では、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemライフサイクル管理製品の概要を示します。ライフサイクル管理の使用を始める前に、[17ページのライフサイクル管理の要件](#)を必ず確認してください。

ライフサイクル管理と移行

ライフサイクル管理では、製品環境およびオペレーティング・システム間で、Oracle Enterprise Performance Management System製品のアプリケーション、リポジトリまたは個別のアーティファクトを移行するための一貫性のある方法を提供します。

アーティファクトは、個別のアプリケーションまたはリポジトリ・アイテム(スクリプト、Webフォーム、データ・フォーム、ルール・ファイル、ドキュメント、財務レポートなど)です。アプリケーションおよびリポジトリのアーティファクトは、製品ごとのカテゴリ別に整理されます。

ライフサイクル管理のインタフェースは、Oracle Hyperion Shared Services Consoleと統合されています。

通常、Shared Services Consoleのライフサイクル管理のインタフェースは、ライフサイクル管理をサポートしているすべてのEPM System製品と一貫しています。ただし、EPM System製品では、ライフサイクル管理のインタフェースに、様々なアーティファクト・リストとエクスポートおよびインポート・オプションが表示されます。製品別のアーティファクト・リストとエクスポートおよびインポートのオプションについては、このガイドの巻末付録を参照してください。

ライフサイクル管理の機能

ライフサイクル管理では次の機能が提供されます:

- アプリケーションおよびディレクトリの表示

- アーティファクトの検索
- ファイル・システムからファイル・システムへの移行
- 選択済アーティファクトの表示
- 移行の監査
- 移行のステータスの表示
- ファイル・システム上でアーティファクトを個別にインポートまたはエクスポートすることによる迅速な変更
- ライフサイクル管理のファイル・システム・フォルダのダウンロードおよびアップロード
- 完全なアプリケーション・スイートの移行

関連するすべてのアーティファクトを一度に選択して移行することで、Oracle Hyperion Financial Close ManagementまたはOracle Hyperion Planningの完全なスイートを移行できます。

- 複数のアプリケーションの移行

ライフサイクル管理を使用すると、1つの移行定義で、複数のクラシックOracle Essbase、PlanningまたはOracle Hyperion Financial Managementのアプリケーションを移行できます。

ライフサイクル管理のコンポーネント

ライフサイクル管理は次のコンポーネントで構成されています:

- **LCM管理者の役割** - ライフサイクル管理タスクを実行するOracle Hyperion Shared Servicesのユーザー役割です。LCM管理者は、ライフサイクル管理を使用してFoundationアプリケーション・グループ内のShared Servicesのアーティファクトを表示したり、製品環境およびオペレーティング・システム内のアプリケーション、リポジットまたは個別のアーティファクトを移行したりできます。この役割をプロビジョニングされたユーザーは、アーティファクトを同じShared Servicesインスタンスで登録されているEPM System製品に展開しロードできます。



注:

EPM System製品の中には、ライフサイクル管理タスクを実行するのに、LCM管理者の役割の他に追加の製品の役割をプロビジョニングされたライフサイクル管理ユーザーを必要とするものがあります。追加の役割については、このガイドの巻末付録を参照してください。

- **LCMデザイナーの役割** - ライフサイクル管理タスクを実行するShared Servicesのユーザー役割です。LCMデザイナーの役割をプロビジョニングされたユーザーは、移行の定義やエクスポート操作の実行が可能ですが、インポート操作は実行できません。
- **移行定義ファイル** - 移行に関するすべての情報(ソース、宛先、移行するアーティファクト)が含まれています。移行するアーティファクトは、移行定義で定義されている必要があります。このガイドの巻末付録に掲載されているサンプル・ファイルを使用して移行定義を最初から作成するか、Shared Services Consoleのファイル・システム・フォルダにあるXMLファイルを移行定義ファイルとして使用することができます。ファイル・システム・フォルダのXMLファイルは、アーティファクトのエクスポート時に作成されます。移行定義ファイルは、ライフサイクル管理ユーティリティで移行を実行する場合に使用できます。
- **Shared Services Console** - ユーザーがプロビジョニングやライフサイクル管理などの管理タスクを実行できるようにするShared Servicesのユーザー・インタフェースです。

- **移行オプション** - 移行中に使用する移行エクスポートおよびインポート・オプションを入力するShared Services Consoleの機能の一部です。
- **ライフサイクル管理ユーティリティ** - アーティファクトをソースから宛先に移行する代替手段を提供するコマンドライン・ユーティリティ。ライフサイクル管理ユーティリティは、Windowsタスク スケジューラやOracle Enterprise Managerなどのサードパーティのスケジューリング・サービスで使用できます。
- **移行プロパティ・ファイル** - 移行に関するグローバル・パラメータ; たとえば、ファイル・システムやログ・ファイルの場所、バッチ処理による移行のサイズのグループ化、概算レポートの使用の可否などです。
- **移行ステータス・レポート** - ユーザー情報、ソースおよび宛先情報、「処理中」移行の進捗インディケータ、移行日付、時間、継続時間、および移行ステータス(処理中、完了、または失敗)を提供します。移行の詳細は、「失敗」のステータスが示される移行に対して提供されます。
- **ライフサイクル管理のログ・ファイル** - ライフサイクル管理による移行におけるすべてのアクティビティを取得します。

ライフサイクル管理をサポートするEPM System製品とコンポーネント

次のEPM System製品がライフサイクル管理をサポートしています:

- Shared Services
- Oracle Hyperion Calculation Manager
- Essbase
- Oracle Essbase Studio
- Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition
- Oracle Hyperion Financial Close Management
- Oracle Hyperion Financial Management
- Oracle Hyperion EPM Architect
- Planning
- Oracle Hyperion Profitability and Cost Management
- Oracle Hyperion Reporting and Analysis (Oracle Hyperion Financial Reporting, Oracle Hyperion Interactive Reporting, Oracle Hyperion SQR Production Reporting, Oracle Hyperion Web Analysis)
- Oracle Hyperion Reporting and Analysis (Oracle Hyperion Financial Reporting)
- デプロイメント・メタデータ

表1 EPM Systemの製品コード

製品コード	製品名
HUB	Shared Services
HREG	Oracle Hyperion Shared Servicesレジストリ
CALC	Calculation Manager
ESBAPP	Essbase

製品コード	製品名
BPM	Oracle Essbase Studio
AIF	FDMEET
FCC	Financial Close Management
HFM	Financial Management
BPMA	Oracle Hyperion EPM Architect
HP	Planning
HPM	Oracle Hyperion Profitability and Cost Management
HAVA	Oracle Hyperion Reporting and Analysis (Oracle Hyperion Financial Reporting, Oracle Hyperion Interactive Reporting, Oracle Hyperion SQR Production Reporting, Oracle Hyperion Web Analysis)

このガイドの巻末付録には、製品ごとの情報が記載されています。

2

ライフサイクル管理の開始

この項の内容:

ライフサイクル管理の要件	17
ライフサイクル管理のインストール	20
Shared Services高可用性用のライフサイクル管理の構成	20
ライフサイクル管理のクイック・スタート	20
バックアップおよびリカバリ	22
セキュリティ	23

ライフサイクル管理の要件

サブトピック

- 使用の前提条件
- ソースと宛先に関する考慮事項
- ファイル・システムの考慮事項
- アップグレードの考慮事項
- アプリケーションおよびアプリケーション・グループ
- ライフサイクル管理での移行時のEPM System環境の可用性
- その他の重要事項

使用の前提条件

- Shared ServicesおよびEPM System製品をインストールして構成し、これらが実行中であることを確認します。『Oracle Enterprise Performance Management Systemインストールおよび構成ガイド』を参照してください。
- ライフサイクル管理の操作を行っているユーザーにLCM管理者の役割が割り当てられていることを確認します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemユーザーおよび役割セキュリティガイド』を参照してください。
- 必要に応じて他の製品固有の役割を割り当てます。このガイドの終わりにある付録を参照してください。

ソースと宛先に関する考慮事項

- ソースと宛先の環境で、同じユーザー・ディレクトリを使用する必要があります。
- ライフサイクル管理のエクスポートおよびインポートの操作中は、製品サービスが稼働している必要があります。

ファイル・システムの考慮事項

- ファイル・システムから、およびファイル・システムに移行する場合、ファイル・システムはShared Services Consoleまたはネットワーク上のライフサイクル管理ユーティリティからアクセスできる必要があります。
- ファイル・システム移行のデフォルトの宛先は、Shared Services Java Webアプリケーション・サーバー・コンピュータ上にあります。この領域がShared Servicesコンピュータ上に割り当てられていることを確認してください。

Shared Servicesコンピュータのデフォルトのファイル・システムの宛先は、`MIDDLEWARE_HOME/user_projects/epmsystem1/import_export`です。ファイル・システムの場所は移行プロパティに定義されています。これは共有ディスクを使用するようカスタマイズすることもできます。[63ページの移行プロパティの編集](#)を参照してください。

アップグレードの考慮事項

リリース11.1.2.3からリリース11.1.2.4にアップグレードする場合、ライフサイクル管理からエクスポートされたコンテンツをimport_exportの場所で解凍する必要があります。

アプリケーションおよびアプリケーション・グループ

- インポート中のアプリケーションがターゲット環境にない場合、ライフサイクル管理によってアプリケーション・シェルが作成されます。
- 移行を実行するには、アプリケーションがアプリケーション・グループに割り当てられているか、デフォルト・アプリケーション・グループに属している必要があります。同じ名前の2つのアプリケーションが存在する場合は、デフォルト・アプリケーション・グループに属するアプリケーションを移行できません。



注:

名前が同じアプリケーションを複数保持できるのは、デフォルト・アプリケーション・グループのみです。ただし、別のアプリケーション・グループに割り当てられないかぎり、アーティファクトの移行は行われません。

- インポート中のアプリケーションがターゲット環境に存在しないアプリケーション・グループに属している場合、ライフサイクル管理にそのアプリケーション・グループが作成されます。

ライフサイクル管理での移行時のEPM System環境の可用性

ライフサイクル管理でのアーティファクトの増分移行操作は、次の場合以外、アプリケーションの通常使用時に行うことができます:

- ある環境から別の環境へのアプリケーションまたはリポジトリの完全移行の場合、システムをメンテナンス期間とすることをお勧めします。
- Financial Managementでディメンション・メタデータ・アーティファクトがインポートされる場合、アプリケーションの現在のユーザー・セッションが無効化され、ユーザーはアプリケーションを再度開く必要があります。



注:

EPMA、Planning、Calculation Manager、Essbase、Financial Reporting、Interactive Reporting、Production ReportingおよびWeb Analysisには制限がありません。

その他の重要事項

- ライフサイクル管理をバックアップとリカバリの唯一の方法にしないでください。[22ページのバックアップおよびリカバリ](#)を参照してください。
- デプロイメント・メタデータのアーティファクトには、デプロイメントの物理サーバー名と構成情報が含まれます。この情報は、ある環境から別の環境(たとえば、DevからTest)に移行しないでください。このデータを移行すると、宛先環境の構成情報が破損し、システムが使用できなくなります。[89ページの付録A「デプロイメント・メタデータとライフサイクル管理」](#)を参照してください。

- ・ ライフサイクル管理での移行は、Windowsの予約名(CON、PRN、AUX、NULなど)と同じ名前のアーティファクトおよびフォルダで失敗します。(予約名の詳細なリストは、オペレーティング・システムのベンダーのサイトを参照してください。)
- ・ シングル・アーティファクト・エクスポートは、ファイル・システムで変更可能なアーティファクトでのみ使用される必要があります。ファイル・システムで変更可能なアーティファクトに関する情報の製品の付録を参照してください。
- ・ Reporting and Analysisの移行を行う場合、ターゲット・マシンでProduction ReportingとInteractive Reportingのクライアント/データ・ソースを手動で再作成する必要があります。195ページの宛先アプリケーションにおけるProduction Reportingジョブ・サービス・プロパティの構成および 195ページの宛先アプリケーションでのInteractive Reportingデータ・アクセス・サービスのデータ・ソースの作成を参照してください。

ライフサイクル管理のインストール

ライフサイクル管理はShared Servicesと一緒にインストールされます。Shared Servicesのインストールとアプリケーション・サーバーへのデプロイについては、『Oracle Enterprise Performance Management Systemインストールおよび構成ガイド』を参照してください。

ライフサイクル管理のコンポーネントは、EPM_ORACLE_HOME/common/utilities/LCM/11.1.2.0にインストールされます。

Shared Services高可用性用のライフサイクル管理の構成

Shared Servicesを高可用性用に構成し、Windowsサービスとして起動する場合、ライフサイクル管理に対して構成手順を実行する必要があります。このシナリオには、移行時に共有ディスクを使用してアーティファクトを格納することも含まれます。共有ディスクの場所をOracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemコンフィグレータの「LCM共有ディスクの場所」フィールドに入力します。

EPM Systemコンフィグレータの「LCM共有ディスクの場所」フィールドの詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemインストールおよび構成ガイド』のFoundation固有の構成タスクに関する項を参照してください。高可用性の構成の詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System高可用性および障害リカバリガイド』のShared Services高可用性用のライフサイクル管理の構成に関する項を参照してください。

ライフサイクル管理のクイック・スタート

ライフサイクル管理の移行は、この高度なプロセスに従います。各部分のプロセスの説明は、次の表で説明されているガイドまたは項で説明されています。



注意

ライフサイクル管理のインポートを実行する前に、宛先環境をバックアップしておくことをお勧めします。ライフサイクル管理を使用したエクスポートおよびインポートでは、元に戻せません。

表2 ライフサイクル管理のプロセス

タスク	追加情報
<p>1.Shared ServicesおよびEPM System製品をインストールして構成します。</p>	<p>『Oracle Enterprise Performance Management Systemインストールおよび構成ガイド』</p>
<p>2.LCM管理者の役割をライフサイクル管理のユーザーに割り当てます。</p> <p>注:</p> <p>ほとんどの製品では、ライフサイクル管理タスクを実行するための追加の役割をユーザーにプロビジョニングする必要があります。追加の役割については、このガイドの巻末付録を参照してください。</p>	<p>『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemユーザーおよび役割セキュリティガイド』</p>
<p>3.移行のインポートおよびエクスポートのオプションを定義します。</p>	<p>Shared Services Consoleの場合は、41ページの第6章「ライフサイクル管理およびShared Services Consoleでの作業」を参照してください。</p> <p>ライフサイクル管理ユーティリティの場合は、71ページの第7章「ライフサイクル管理ユーティリティの使用法」を参照してください。</p>
<p>4.Shared Services Consoleまたはライフサイクル管理ユーティリティで、ファイル・システムにアーティファクトをエクスポートします。クラシック・アプリケーションの場合:</p> <ol style="list-style-type: none"> 必要に応じて、Shared Servicesのアーティファクトをすべて選択します。 必要に応じて、製品固有のアーティファクトをすべて選択します。 <p>関連するすべてのアーティファクトを選択することもできます; Calculation Managerのルール、Financial Reportingのレポート、Essbaseのグローバル代替変数などがあります。</p> <ol style="list-style-type: none"> 選択したアーティファクトを単一のファイル・システム・フォルダにエクスポートします。 <p>EPMAアプリケーションの場合:</p> <ol style="list-style-type: none"> 必要に応じて、Shared Servicesのアーティファクトをすべて選択します。 必要に応じて、EPMAのアーティファクトをすべて選択します。 選択したShared ServicesおよびEPMAのアーティファクトを単一のファイル・システム・フォルダにエクスポートします。 	<p>44ページのファイル・システムへのエクスポートを参照してください。</p>

タスク	追加情報
<p>4. 必要に応じて、製品固有のアーティファクトをすべて選択します。</p> <p>関連するすべてのアーティファクトを選択することもできます; Calculation Managerのルール、Financial Reportingのレポート、Essbaseのグローバル代替変数などがあります。</p> <p>5. 選択した製品固有のアーティファクトを2番目のファイル・システム・フォルダにエクスポートします。</p>	
<p>5.製品固有の移行の前提条件を実行します。</p>	<p>このガイドの巻末にある付録の各製品の「移行の前提条件」を参照してください。</p>
<p>6.宛先環境をバックアップします。</p>	<p><i>Oracle Enterprise Performance Management System</i> バックアップおよびリカバリ・ガイド</p>
<p>7.Shared Services Consoleまたはライフサイクル管理ユーティリティで、ファイル・システムからアーティファクトをインポートします。クラシック・アプリケーションの場合: エクスポートされたファイル・システム・フォルダを右クリックして、「インポート」を選択します。EPMAアプリケーションの場合:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. EPMAアプリケーションのアーティファクトが含まれるファイル・システム・フォルダを右クリックして、「インポート」を選択します。 2. EPMAアプリケーション・ライブラリからEPMAアプリケーションを手動でデプロイします。 3. 製品固有のアーティファクトが含まれるファイル・システム・フォルダを右クリックして、「インポート」を選択します。 	<p>46ページのファイル・システムからのインポートを参照してください。</p>
<p>8.移行ステータス・レポートを表示して、すべて正常に移行されたことを確認します。</p>	<p>66ページの移行ステータス・レポート</p>

バックアップおよびリカバリ

ライフサイクル管理は、サーバーおよびコンテンツの物理的バックアップへのニーズを満たすものではありません。ライフサイクル管理はほとんどのアプリケーション・アーティファクトをエクスポートできるため、アプリケーション・コンテンツのアーカイブに適しています。次のような場合にライフサイクル管理を使用できます:

- ビジネス・ユーザーがアプリケーション・コンテンツを編集する際の、アーティファクトの一時バックアップの作成。たとえば、EssbaseまたはPlanningのディメンションに対して変更を行う場合、何か問題が発生したらその変更を元に戻せるようにするため、編集を行う前にこのディメンションのライフサイクル管理によるエクスポートを実行できます。このエクスポートされたディメンションは一時バックアップとして機能します。この後で製品のディメンションを編集できます。

- インポートを実行する前のアーティファクトのアーカイブ。テスト・システムから本番システムにコンテンツを移行する場合、本番アーティファクトをエクスポートして任意のバージョン・コントロール・システムにチェックインすることで、本番アーティファクトをアーカイブする場合があります。



注:

ライフサイクル管理は、論理的なバックアップとリカバリのソリューションとしてのみ使用できます。データのバックアップとリカバリのソリューションとしては推奨されません。多くの製品では、独自のバックアップとリカバリのソリューションが提供されています。これらのソリューションについては、『Oracle Enterprise Performance Management Systemバックアップおよびリカバリガイド』に記載されています。

セキュリティ

ライフサイクル管理を使用するには、プロビジョニングを介して、ユーザーおよびグループに対し、セキュリティを設定する必要があります。ライフサイクル管理を実行するユーザーにはLCM管理者の役割を割り当てる必要があります。LCM管理者はShared Servicesに登録されたすべてのアプリケーションに対し、移行を実行できます。つまりLCM管理者は同じShared Servicesインスタンスを使用して、すべてのアプリケーションを抽出およびロードできます。



注:

デプロイメント・メタデータ、Essbase、Essbase Studio、Reporting and Analysis、Financial Management、PlanningおよびProfitability and Cost Managementでは、ライフサイクル管理タスクを実行するには、ライフサイクル管理ユーザーに(LCM管理者役割に加え)追加の製品の役割をプロビジョニングする必要があります。追加の役割については、このガイドの巻末付録を参照してください。

LCM管理者役割の割当てについては、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemユーザーおよび役割セキュリティガイド』を参照してください。

3

ライフサイクル管理の用途

この項の内容:

Shared Servicesの用途	25
アーティファクト移行の用途	28
バージョン・コントロール・システムにおけるライフサイクル管理の使用	30
ライフサイクル管理と既存のワークフロー・システムとの統合	31

Shared Servicesの用途

サブトピック

- [ネイティブ・ディレクトリ\(セキュリティ\)の移行と一括のセキュリティ更新](#)
- [タスクフローの移行](#)
- [Shared Servicesレジストリ・データの編集](#)
- [特定のEPM Systemアプリケーションのプロビジョニング・アーティファクトの移行](#)
- [LCMデザイナの役割での移行](#)

ネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)の移行と一括のセキュリティ更新

ライフサイクル管理ではネイティブ・ディレクトリ・アーティファクト(割り当てられた役割、委任リスト、グループ、役割およびユーザー)が、あるシステムから別のシステムに移行されます。ライフサイクル管理によって、移行対象のネイティブ・ディレクトリ・アーティファクトを定義できます。さらに、ライフサイクル管理では、ある環境内でセキュリティの更新を一括で実行できます。たとえば、あるユーザーまたはユーザー群に対するセキュリティ割当てをすべて変更できます。

[60ページのネイティブ・ディレクトリ\(セキュリティ\)の移行](#)を参照してください。

タスクフローの移行

ライフサイクル管理を使用すると、次のEPM System製品に対するShared Servicesタスクフロー・アーティファクトを移行できます:

- Financial Management
- Performance Management Architect
- Profitability and Cost Management

タスク・フローのアーティファクトを使用して、任意の環境から別の環境へタスク・フローの定義を移行したり、ファイル・システムでタスク・フローを編集したりできます。詳細は、[211ページの付録L「Shared Servicesとライフサイクル管理」](#)を参照してください。

Shared Servicesレジストリ・データの編集

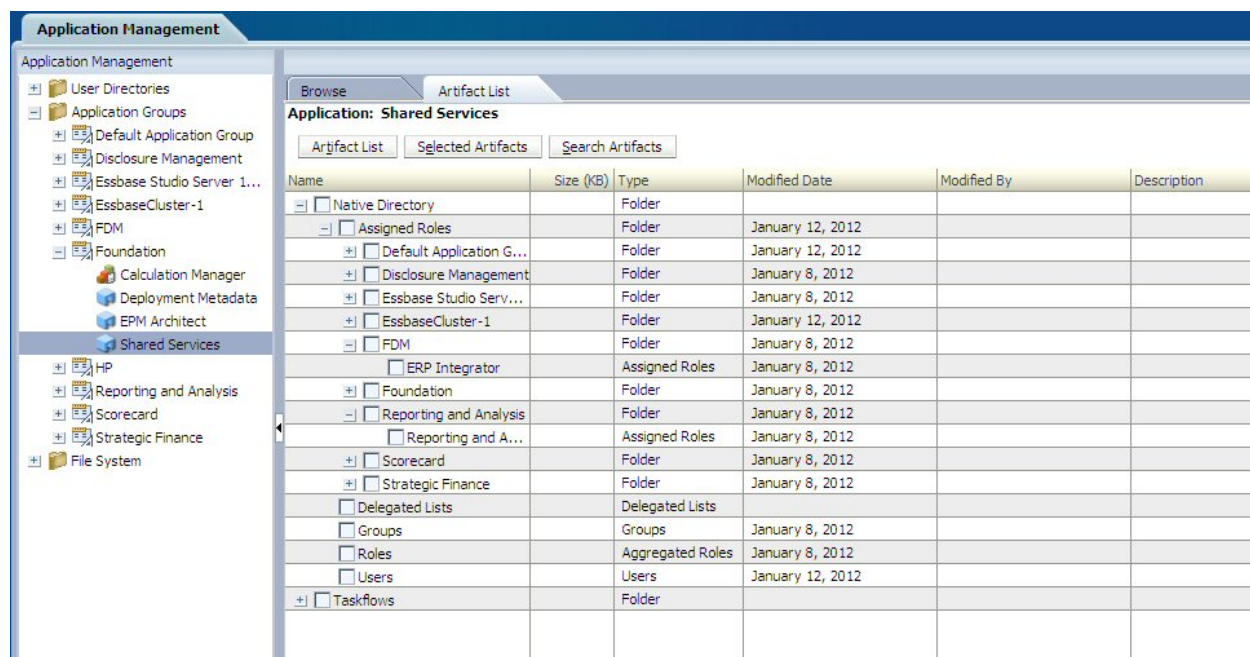
ライフサイクル管理を使用すると、Shared Servicesレジストリ・データを編集して、Secure Socket Layer(SSL)接続の有効/無効を切り替えたり、その他の構成変更を手動で実行することができます。[60ページのShared Servicesレジストリ・データの編集](#)を参照してください。

特定のEPM Systemアプリケーションのプロビジョニング・アーティファクトの移行

ライフサイクル管理では、すべてのアプリケーションのプロビジョニングを移行しなくても、ある特定のアプリケーションのプロビジョニング・アーティファクトを移行できます。プロビジョニング・アーティファクトは、Shared Services Consoleのネイティブ・ディレクトリ(割り当てられた役割)のノードの下に表示されます。

次の図は、Shared Services Console内のプロビジョニング・アーティファクトの場所を示しています。

図1 Shared Services Consoleのプロビジョニング・アーティファクト



手順の詳細は、[60ページのネイティブ・ディレクトリ\(セキュリティ\)の移行](#)を参照してください。

LCMデザイナの役割での移行

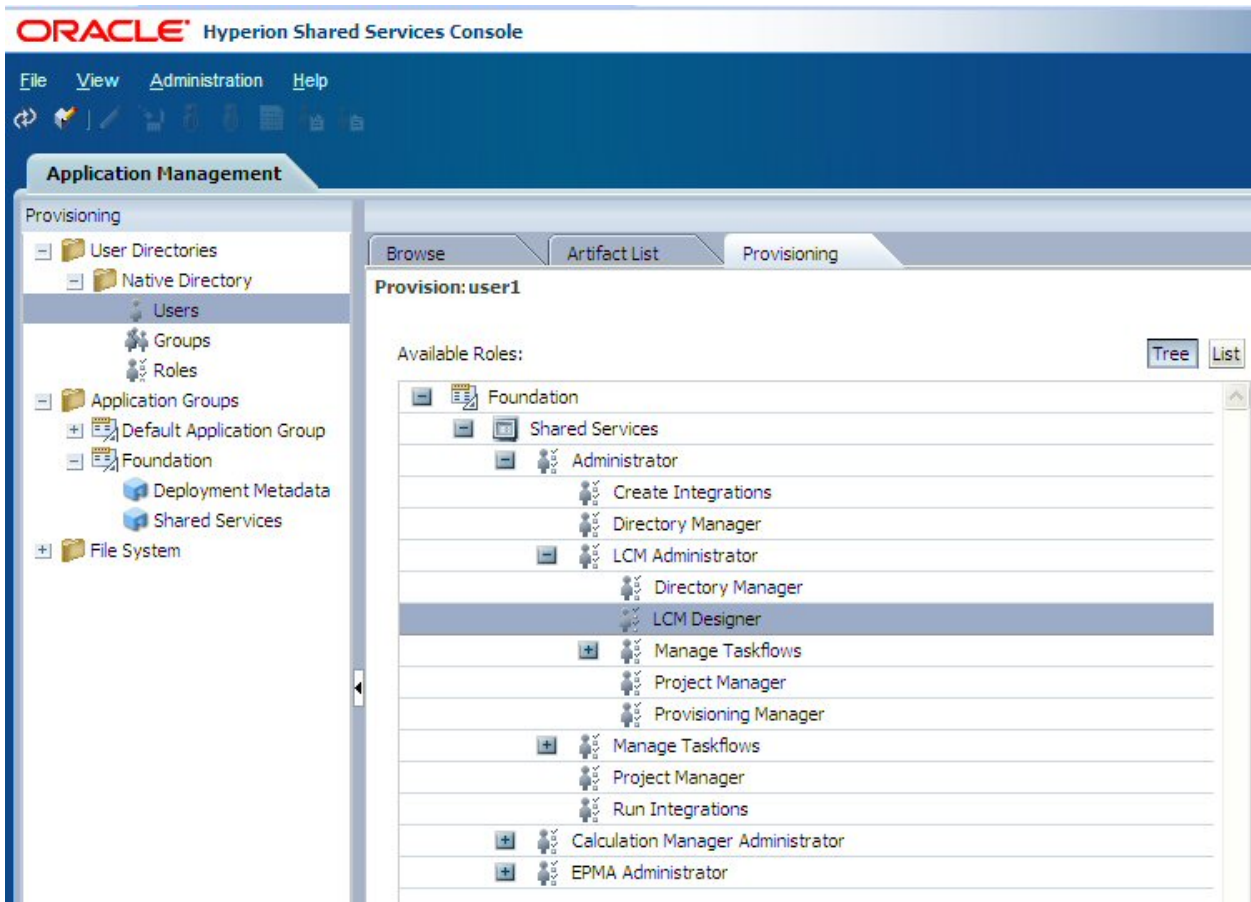
ライフサイクル管理でのインポート操作は、ターゲット環境の分析を必要とし、通常は管理者によって実行されます。ただし、アプリケーションのビジネス・ユーザーはシステムにおける変更を認識するため、通常、移行するコンテンツはアプリケーションのビジネス・ユーザーによって定義されます。LCMデザイナの役割では、ユーザーは移行を定義し、エクスポート操作を実行できますが、インポート操作の実行は制限されます。

たとえば、次のシナリオを考えてください：

支出予算の管理を担当するプランニング管理者は、テスト環境の支出勘定科目に関連するデータ・フォームを変更します。プランニング管理者にLCMデザイナの役割を割り当てると、管理者はデータ・フォームを本番環境に移動する移行を定義できます。管理者は、アーティファクトがエクスポートされたことをITマネージャに通知します。ITマネージャは、エクスポートされたフォルダを本番環境にコピーし、インポート操作を実行します。(エクスポートされたフォルダには、Import.xmlファイルでのインポート実行の定義が含まれています。)

LCMデザイナの役割は、Shared Services Consoleで割り当てます。(ユーザー役割とセキュリティのガイドのEPM Systemの役割に関する項を参照。)

図2 Shared Services ConsoleのLCMデザイナーの役割



ユーザーにLCMデザイナーの役割が割り当てられると、Shared Services Consoleは次のように変更されます:

- 編集後に、単一のアーティファクトをインポートする機能が無効になります。
- ファイル・システム・フォルダを右クリックした場合に表示されるインポート・オプションが無効になります。
- Shared Services Consoleの下部にある「インポート」ボタンが無効になります。

アーティファクト移行の用途

サブトピック

- 製品間でアーティファクトの依存関係があるアプリケーションの移行
- 編集目的でのアーティファクトのエクスポートとインポート
- アーティファクトの単独編集

製品間でアーティファクトの依存関係があるアプリケーションの移行

移行を確実に行うため、ライフサイクル管理ではアーティファクトのインポート時に特定の指示が遂行されますが、これは製品レベルのみに適用されます。ライフサイクル管理では、(アーティファクト・レベルの)複数の製品に対しては、アーティファクトのインポートが自動的に指示されません。たとえば、Financial Managementアプリケーションは、Performance Management Architectのディメンションおよびビジネス・ルール、Shared Servicesのユーザー・プロビジョニング、Financial Reportingのレポートなどで構成される場合があります。

ライフサイクル管理を使用して複数の製品からアーティファクトを移行する場合は、製品アーティファクトをインポートする前に、製品間に依存するアーティファクトが宛先に存在することを確認する必要があります。これは、ライフサイクル管理の移行を初めて実行する場合に、特に重要です。

次のドキュメントには、ライフサイクル管理の移行を初めて実行する場合の手順が示されています。

- *Oracle Enterprise Performance Management SystemのOracle Hyperion Planningアプリケーションの移行*
- *Oracle Enterprise Performance Management SystemのOracle Hyperion Profitability and Cost Managementアプリケーションの移行*
- *Oracle Enterprise Performance Management SystemのOracle Hyperion Performance Management Architectアプリケーションの移行*
- *Oracle Enterprise Performance Management SystemのOracle Hyperion Financial Managementアプリケーションの移行*

http://docs.oracle.com/cd/E17236_01/nav/portal_2.htmのドキュメント・ライブラリを参照してください。

編集目的でのアーティファクトのエクスポートとインポート

ライフサイクル管理を使用すると、アーティファクトをファイル・システムにエクスポートし、これを編集した後でインポートできます。詳細な手順は、[54ページの編集する個々のアーティファクトのエクスポートとインポート](#)を参照してください。

アーティファクトの単独編集

Shared Services Consoleを使用して、個々のアーティファクトをファイル・システムにエクスポートして編集し、編集後に移行定義ファイルが必要とせずにインポートできます。詳細な手順は、[54ページの編集する個々のアーティファクトのエクスポートとインポート](#)を参照してください。



注:

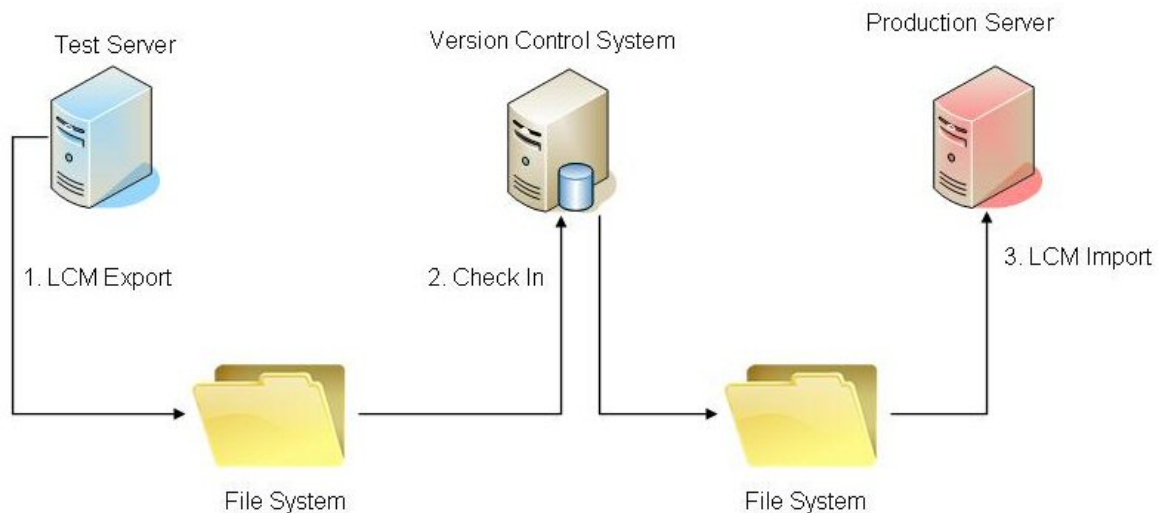
アーティファクトにはファイル・システムで編集できないものもあります。[55ページの個々のアーティファクトの編集](#)を参照してください。

アーティファクトは、エクスポート元と同一のアプリケーションにインポートする必要があります。

バージョン・コントロール・システムにおけるライフサイクル管理の使用

ライフサイクル管理では、Oracle(R) Universal Content Managementなどの既存のドキュメントまたはソース・コードのコントロール・システムを使用して、EPM Systemのアーティファクトをバージョン管理できます。最も効果的なアプローチは、アーティファクトをファイル・システムにエクスポートしてから、それを本番サーバーにインポートする前にバージョン・コントロール・システムにインポートすることです。

図3 ライフサイクル管理を使用したバージョン管理



このアプローチは、使用されている本番コントロール・ツールに応じていくつかの方法で自動化できます。たとえば、エクスポートされたアーティファクトを最初にバージョン・コントロール・システムにインポートしてから、本番システムにインポートするスクリプトを記述することで、自動化を実現できます。この変更をプロセスに組み込むことで、本番システムのアーティファクトが、該当する日付メタデータを備えて常に企業のバージョン・コントロール・システムに存在するようになります。したがって顧客は、「先週は正常に動作していたシステムが、現在は動作していない場合、アーティファクトに対するどの変更が先週、本番システムに移行されたのでしょうか」などの質問に回答できます。バージョン・コントロール・システムが比較機能をサポートしている場合は、テキストベースまたはXMLベースでEPM Systemアーティファクトに対する差異を提供できます。

ファイル・システムへの移行やファイル・システムからの移行の詳細は、[43ページのアーティファクトの移行](#)を参照してください。

ライフサイクル管理と既存のワークフロー・システムとの統合

Java APIまたはコマンドライン・ユーティリティを使用すると、ライフサイクル管理を既存のワークフロー・システムに統合できます。移行のロジックは移行定義ファイルで取得されるため、コマンドライン・ユーティリティがほとんどのケースで効率的です。移行定義ファイル(XMLファイル)は、ライフサイクル管理機能を使用してShared Services Consoleで作成するか、ワークフロー・システムによってプログラマ的に作成することができます。

Shared Services Consoleで作成された移行定義ファイルを使用する場合は、プログラム上で変更してユーザーの資格証明を追加する必要があります。この資格証明は、XMLファイルへの挿入時はプレーン・テキストの状態ですが、最初に移行が実行される際は自動的に暗号化されます。移行定義ファイルを一度作成すると、コマンドライン・ユーティリティまたはJava APIを使用して本番管理システムから起動できるようになります。

4

Shared Services Console

この項の内容:

Shared Services Consoleの概要	33
Shared Services Consoleの起動	33
ライフサイクル管理およびShared Services Consoleの統合	34

Shared Services Consoleの概要

Shared Services Consoleは、ビュー・ペインとタスク・タブで構成されています。初めにログインすると、Shared Services Consoleにはビュー・ペインと「参照」タブが表示されます。

ビュー・ペインは、ユーザー・ディレクトリ、ユーザー、グループ、役割、アプリケーション・グループおよびアプリケーションなどのオブジェクトを選択できるナビゲーション・フレームです。通常は、ビュー・ペインで現在選択されている項目の詳細が「参照」タブに表示されます。その他のタスク・タブは、実行するタスクに応じて開きます。たとえば、「レポート」タブはレポートを生成するとき、「構成」タブはユーザー・ディレクトリを構成するときに開きます。

現在の構成に応じて、Shared Services Consoleのビュー・ペインには既存のオブジェクトが一覧表示されます。これらのオブジェクトを展開すると、詳細を表示できます。たとえば、「ユーザー・ディレクトリ」オブジェクトを展開すると、構成済のすべてのユーザー・ディレクトリが一覧表示されます。構成済のユーザー・ディレクトリでユーザーとグループを検索することもできます。

オブジェクトを右クリックすると表示されるショートカット・メニューは、ビュー・ペイン上のオブジェクトに関連付けられています。

ビュー・ペインのオブジェクトに関連付けられたショートカット・メニューは、オブジェクトに対する操作を実行する最も早い方法です。ショートカット・メニューのオプションは、選択した対象に従って動的に変更されます。ショートカット・メニューのコマンドは、メニュー・バーのメニューでも使用可能です。使用可能なメニュー・オプションを表すボタンがツールバーに表示されます。

Shared Services Consoleの起動

Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspaceのメニュー・オプションを使用して、Shared Services Consoleにアクセスします。



注:

EPM Workspaceは、その他のEPM System製品にアクセスできるポータルです; たとえば、Performance Management Architect、およびInteractive ReportingやWeb AnalysisなどのReporting and Analysisコンポーネントにアクセスできます。現在のEPM Workspaceユーザーに割り当てられたShared Servicesの役割によって、Shared Services Consoleでユーザーが使用できるリソースが決まります。

▶ Shared Services Consoleを起動するには:

1. 次に移動します:

`http://web_server_name:port_number/workspace`

URLの中で、web_server_nameはOracle Hyperion Foundation Servicesが使用するWebサーバーが実行されているコンピュータの名前を示し、port_numberは、Webサーバー・ポートを示します。たとえば、`https://myWebserver:19000/workspace`のようになります。



注:

セキュアな環境のEPM Workspaceにアクセスする場合、プロトコルとしてhttps (httpではなく)を使用し、セキュアなWebサーバー・ポート番号を使用します。たとえば、`https://myWebserver:19043/workspace`のようなURLを使用します。

2. 「アプリケーションの起動」をクリックします。

ポップアップ・ブロックが原因でEPM Workspaceが開かない場合があることに注意してください。

3. ログオン・ウィンドウで、ユーザー名とパスワードを入力します。

最初は、Shared Services Consoleへアクセスできる唯一のユーザーは、ユーザー名とパスワードがデプロイメント・プロセス中に指定されたEPM System管理者です。

4. 「ログオン」をクリックします。

5. EPM Workspaceから、「ナビゲート」、「管理」、「**Shared Services Console**」の順に選択します。

ライフサイクル管理およびShared Services Consoleの統合

ライフサイクル管理はShared Services Consoleと統合され、アプリケーション・グループとアプリケーションの下にアーティファクトがリストされています。たとえば、Shared Services ConsoleにはDevelopmentというアプリケーション・グループが表示されます。Developmentアプリケーション・グループの下には、HFM Management Reportingアプリケーションが表示されます。HFM Management Reportingアプリケーションの下には、ディメンショナル・モデルまたは非ディメンショナル・モデルが表示されます(Accounts、Entities、Security、Member Listsなど)。

5

アプリケーションおよびアプリケーション・グループでの作業

この項の内容:

概要	35
アプリケーション・グループの使用	35
アプリケーションの管理	38

概要

アプリケーション・グループおよびアプリケーションは、重要なEPM Systemの概念です。アプリケーションは、Shared Servicesに登録されているEPM System製品の1つのインスタンスへの参照です。プロビジョニングおよびライフサイクル管理アクティビティは、アプリケーションに対して実行されます。通常、アプリケーションはアプリケーション・グループにグループ分けされます。

アプリケーション・グループの使用

サブトピック

- [アプリケーション・グループの作成](#)
- [アプリケーション・グループ・プロパティの変更](#)
- [アプリケーション・グループの削除](#)

通常、アプリケーションは、EPM Systemによって、デプロイ時に選択した既存のアプリケーション・グループか、デフォルト・アプリケーション・グループ内に置かれます。

アプリケーション・グループはEPM Systemアプリケーションのコンテナです。たとえば、アプリケーション・グループに、PlanningアプリケーションとReporting and Analysisアプリケーションが含まれるとします。アプリケーションが属することのできるアプリケーション・グループの数は1つですが、アプリケーション・グループには複数のアプリケーションを含められます。

EPM System製品では、アプリケーションは独自のアプリケーション・グループ内に置かれます。EPM System製品によって独自のアプリケーション・グループが作成されない場合、アプリケーション・グループ(たとえば、デフォルト・アプリケーション・グループ)を選択し、アプリケーションを整理します。

Shared Servicesに登録されているが、アプリケーション・グループに追加されていないアプリケーションは、ビュー・ペインの「デフォルト・アプリケーション・グループ」ノードの下に一覧表示されます。「デフォルト・アプリケーション・グループ」ノードに一覧表示されているアプリケーションの役割にユーザーおよびグループをプロビジョニングし、プロビジョニング情報を失うことなくアプリケーションをアプリケーション・グループに移動できます。必要に応じて、カスタムのアプリケーション・グループを作成できます。



注:

アプリケーション・グループを作成および管理するには、Shared Services管理者またはプロジェクト・マネージャである必要があります。Shared Services管理者はすべての登録済アプリケーションを使用できます。プロジェクト・マネージャは自分がプロビジョニング・マネージャであるアプリケーションのみ使用できます。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティガイド』を参照してください。

アプリケーション・グループの作成

アプリケーション・グループの作成中、新規アプリケーション・グループにアプリケーションを割り当てることもできます。

▶ アプリケーション・グループを作成するには:

1. Shared Services Consoleを起動します。

[33ページのShared Services Consoleの起動](#)を参照してください。

2. ビュー・ペインで、「アプリケーション・グループ」を右クリックし、「新規」を選択します。

「新規アプリケーション・グループ」画面が表示されます。

3. 「名前」に一意のアプリケーション・グループ名を入力し、「説明」にはオプションの説明を入力します。
4. このアプリケーション・グループにアプリケーションを割り当てるには:

- a. 「アプリケーション・グループのアプリケーションのリスト」から、割り当てるアプリケーションを含むアプリケーション・グループを選択します。
 - b. 「リストの更新」をクリックします。

「使用可能なアプリケーション」リストにアプリケーション・グループに割り当てることができるアプリケーションが表示されます。
 - c. 「使用可能なアプリケーション」でアプリケーション・グループに割り当てるアプリケーションを選択し、「追加」をクリックします。
 - d. 割り当てられたアプリケーションを除去するには、「割り当てられたアプリケーション」から除去するアプリケーションを選択し「削除」をクリックします。現在のセッションで割り当てたアプリケーションをすべて除去するには、「リセット」をクリックします。
5. 「終了」をクリックします。
 6. 「追加作成」をクリックし、別のアプリケーション・グループを作成するか、「OK」をクリックしてステータス画面を閉じます。

アプリケーション・グループ・プロパティの変更

プロパティおよびアプリケーションの割当てなどアプリケーション・グループの設定はすべて変更できます。



注:

また、別のアプリケーション・グループからアプリケーションを移動することで、アプリケーション・グループにアプリケーションを追加することもできます。[39ページ](#)の[アプリケーションの移動](#)を参照してください。

▶ アプリケーション・グループを変更するには:

1. Shared Services Consoleを起動します。

[33ページ](#)の[Shared Services Consoleの起動](#)を参照してください。

2. ビュー・ペインで「アプリケーション・グループ」を選択します。
3. 「参照」タブでアプリケーション・グループを右クリックし、「開く」を選択します。
4. 必要に応じてアプリケーション・グループ・プロパティを変更します。

アプリケーションの割当てと除去の詳細は、[36ページのステップ 4](#)を参照してください。

5. 「保存」をクリックします。

アプリケーション・グループの削除

アプリケーション・グループを除去すると、アプリケーションとアプリケーション・グループとの関連付けが除去され、アプリケーションからプロビジョニング割当てが削除されて、アプリケーション・グループも削除されます。

▶ アプリケーション・グループを削除するには:

1. Shared Services Consoleを起動します。

[33ページ](#)の[Shared Services Consoleの起動](#)を参照してください。

2. ビュー・ペインでアプリケーション・グループを右クリックし、「削除」を選択します。

3. 「はい」をクリックします。



注:

デフォルト・アプリケーション・グループまたは基本アプリケーション・グループは削除できません。Shared Services Consoleのファイル・システム・ノードを削除することもできません。

アプリケーションの管理

サブトピック

- [アプリケーションの移動](#)
- [複数のアプリケーションの削除](#)
- [アプリケーションの削除](#)

Shared Servicesは、登録されたEPM Systemアプリケーションを追跡します。通常、EPM System製品は、EPM Systemコンフィグレータを使用してデプロイする際にShared Servicesに登録されます。EPM Systemアプリケーション・インスタンスは、デプロイする際にShared Servicesに登録されます。

一部のアプリケーションを登録すると、アプリケーション・グループが作成され、アプリケーションが割り当てられます。登録によりアプリケーション・グループが作成されない場合は、アプリケーションがデフォルト・アプリケーション・グループの下にリストされます。これらのアプリケーションをプロビジョニングできます。デフォルト・アプリケーション・グループから別のアプリケーション・グループにアプリケーションを移動すると、Shared Servicesにプロビジョニング情報が保存されます。アプリケーションがアプリケーション・グループに割り当てられていなくても、アプリケーションをデフォルト・アプリケーション・グループに移行できます。



注:

名前が同じアプリケーションを複数保持できるのは、デフォルト・アプリケーション・グループのみです。ただし、アプリケーションが別のアプリケーション・グループに割り当てられないかぎり、アーティファクトの移行は行われません。

アプリケーションの移動

アプリケーション・グループからアプリケーションを移動すると、アプリケーションとアプリケーション・グループ間の関連付けが除去されます。

▶ アプリケーションを移動するには:

1. Shared Services Consoleを起動します。

[33ページのShared Services Consoleの起動](#)を参照してください。

2. 移動するアプリケーションを含むアプリケーション・グループのノードを展開します。
3. アプリケーションを右クリックし、「移動」を選択します。
4. 「移動」タブでアプリケーションの移動先のアプリケーション・グループを選択します。
5. 「保存」をクリックします。



注:

Shared Servicesとデプロイメント・メタデータのアプリケーションは、Foundationアプリケーション・グループから移動できません。

複数のアプリケーションの削除

Shared Servicesの管理者がアプリケーションを削除すると、プロビジョニング情報も削除されます。

▶ 複数のアプリケーションを削除するには:

1. Shared Services Consoleを起動します。
[33ページのShared Services Consoleの起動](#)を参照してください。
2. ビュー・ペインで、「アプリケーション・グループ」を右クリックし、「アプリケーションの削除」を選択します。
3. 削除するアプリケーションを選択します。

アプリケーション・グループ内のすべてのアプリケーションを削除するには、そのアプリケーション・グループを選択します。



注:

この画面でアプリケーション・グループを削除できません。[37ページのアプリケーション・グループの削除](#)を参照してください。

4. 「削除」をクリックします。
5. 「OK」をクリックします。

アプリケーションの削除

Shared Servicesの管理者はアプリケーション・グループからアプリケーションを削除できます。アプリケーション・グループからアプリケーションを削除する場合、そのアプリケーションのプロビジョニング情報はすべて除去されます。

▶ アプリケーションを削除するには:

1. Shared Services Consoleを起動します。
[33ページのShared Services Consoleの起動](#)を参照してください。
2. ビュー・ペインで、削除するアプリケーションを含むアプリケーション・グループのノードを展開します。
3. アプリケーションを右クリックし、「削除」を選択します。
4. 「OK」をクリックします。

6

ライフサイクル管理およびShared Services Consoleでの作業

この項の内容:

アーティファクトの表示	41
アーティファクトの検索	42
アーティファクトの移行	43
Shared Servicesレジストリ・データの編集	60
移行プロパティの編集	63
移行データの削除	65
ライフサイクル管理のレポート	65

アーティファクトの表示

Shared Services Consoleのライフサイクル管理インターフェースにより、アーティファクトの表示、検索、エクスポート、およびインポートが可能です。アーティファクトは各種カテゴリにソートされているため、整然と表示されます。

表形式のライフサイクル管理インターフェースにより、複数のアプリケーションを表示できます。



注:

アーティファクトは製品ごとに異なります。

製品のアーティファクトおよびカテゴリの詳細は、このガイドの終わりにある付録を参照してください。

▶ Shared Services Consoleでアーティファクトを表示するには:

1. Shared Services Consoleを起動します。

[33ページのShared Services Consoleの起動](#)を参照してください。

2. ビュー・ペインで「アプリケーション・グループ」ノードを展開し、アプリケーション・グループを表示します。

3. アプリケーションを表示するために、アプリケーション・グループを展開します。



注:

Foundationアプリケーション・グループには、Calculation Manager、デプロイメント・メタデータ、Shared Services、Performance Management ArchitectなどのFoundationアプリケーションが含まれます。「ファイル・システム」ノードはデフォルトのShared Servicesファイル・システムの場所(Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemコンフィグuratorで定義されている)を読み取ります。

4. アプリケーションを選択して(またはアプリケーションを右クリックし、「エクスプローラ」を選択して)、アーティファクトのリストを表示します。

「アーティファクト・リスト」タブにはアーティファクト・リストが表示されます。

アーティファクト・リストの上に、次のビュー・オプションが表示されます。

- ・ 「アーティファクト・リスト」: アプリケーションとリポジトリのアーティファクトを表示

各アプリケーション・グループに新しいタブが表示されます。移行が完了すると、タブは閉じます。

- ・ 「選択済アーティファクト」: タブであらかじめ選択済のアーティファクトを表示

ライフサイクル管理インタフェースでは、アプリケーションとアプリケーション・グループ間で移動した際に選択したアーティファクトを記憶しています。この機能は複数の製品間でアプリケーションの移行を定義するとき役に立ちます。

- ・ 「アーティファクトの検索」: アーティファクトの検索オプションを表示します。

アーティファクトの検索

アーティファクト・リストの上にあるアーティファクトの検索オプションを使用して、アーティファクトの検索オプションを表示できます。

▶ Shared Services Consoleでアーティファクトを検索するには:

1. Shared Services Consoleを起動します。

[33ページのShared Services Consoleの起動](#)を参照してください。

2. アーティファクトを表示します。[41ページのアーティファクトの表示](#)を参照してください。
3. 「アーティファクト・リスト」タブで、「アーティファクトの検索」をクリックします。
4. 検索オプションを入力します:

- ・ **アーティファクト名** - アーティファクトの名前。アスタリスク(*)をパターン検索でワイルドカードとして使用するか、フィルタの条件に一致するアーティファクトを検索します。たとえば、A*と指定すると、A(検索は大文字と小文字を区別しないため、小文字のaも含む)で始まるすべてのアーティファクトが戻ります。*AではA(または小文字のa)で終わるすべてのアーティファクトが戻ります。
- ・ **変更日** - 次のオプションから選択します。
 - 今日 - 今日変更されたアーティファクト
 - 昨日 - 昨日変更されたアーティファクト

- 過去7日間 - 最近7日間に変更されたアーティファクト
- 過去1か月間 - 最近1か月間に変更されたアーティファクト
- 日付範囲 - 指定した日付範囲内(指定した日付を含む)に変更されたアーティファクト



注:

変更日をサポートしないアーティファクトは常に表示されます。

変更日または時間をサポートしないアーティファクトのリストは、このガイドの終わりにある付録を参照してください。

- 開始日 - 日付範囲の開始の日(たとえば、01/01/2008)
- 終了日 - 日付範囲の終了の日(たとえば、01/31/2008)
- 変更者 - ユーザーの名前。アスタリスク(*)をパターン検索でワイルドカードとして使用するか、フィルタの条件に一致するアーティファクトを検索します。検索では大文字/小文字は区別されません。



注:

検索条件が指定されないと、アプリケーションのすべてのアーティファクトが表示されます。

5. 「検索」をクリックします。

アーティファクトの移行

サブトピック

- ファイル・システムへのエクスポート
- アーティファクトのファイル・システムへの再エクスポート
- ファイル・システムからのインポート
- 移行オプションの設定
- 編集する個々のアーティファクトのエクスポートとインポート
- アプリケーション・アーティファクトのダウンロードおよびアップロード
- ネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)の移行

アーティファクトを次のインスタンスのファイル・システムとの間で移行することができます:

- ソースと宛先が同じShared Servicesインスタンスに登録されている場合
- ソースと宛先が異なるShared Servicesインスタンスに登録されているが、共有ファイル・システムが使用されている場合

ソースと宛先が同じShared Servicesインスタンスに登録されておらず、同じネットワーク内にもない場合は、中間のファイル・システムにアーティファクトをエクスポートし、FTP、DVD、または他の転送メソッドを使用して、中間のファイル・システムを宛先システムに転送できます。



注:

転送のシナリオでは、ファイル・システム・フォルダがMIDDLEWARE_HOME/user_projects/epmsystem1のimport_exportフォルダに直接コピーされることを確認します。

ファイル・システムへのエクスポート

ファイル・システムの場所は、Shared ServicesのJava Webアプリケーション・サーバー・コンピュータです。Shared Servicesコンピュータのデフォルトの宛先は、MIDDLEWARE_HOME/user_projects/epmsystem1/import_exportです。ファイル・システムの場所にエクスポート(コピー)されたアプリケーションまたはアーティファクトは、ビュー・ペインの「ファイル・システム」ノードの下に表示されます。アーティファクトがファイル・システムにエクスポートされると、ネイティブ製品でアーティファクトが更新された最後の変更日時が保持されます。



注:

Windows 2003の場合、Shared ServicesがWindowsのサービスの1つとして開始され、ファイル・システム・パスはマップされたドライブに定義されることから、Shared Services Consoleを使用してファイル・システムのコンテンツを表示できません。ファイル・システム・パスがネットワーク・アクセスの可能な場所である場合は、Shared ServicesがWindowsサービスとして実行していないことを確認してください。

- ▶ Shared Services Consoleを使用してファイル・システムにアーティファクトとアプリケーションをエクスポートするには:

1. Shared Services Consoleを起動します。

[33ページのShared Services Consoleの起動](#)を参照してください。

2. 「管理」、移行オプションを選択します。
3. 移行オプション・タブで、移行用のエクスポート・オプションを確認します。

インストールされた製品に対するオプションのみが表示されます。製品によってオプションは異なり、すべての製品にエクスポート・オプションがあるわけではありません。必要に応じて何も変更せずにデフォルトのオプションを受け入れることができます。

製品別のオプションのリストは、[47ページの移行オプションの設定](#)を参照するか、このガイドの終わりにある付録を参照してください。

4. 移行オプションを変更した場合は、「保存」をクリックします。
5. 「アプリケーション・グループ」ノードを展開し、エクスポートするアプリケーションを選択します。

アプリケーションを選択すると、「アーティファクト・リスト」タブにアプリケーションとそのアプリケーショントリボジトリ・アーティファクトが表示されます。

6. 各アプリケーションの「アーティファクト・リスト」タブで、エクスポートするアーティファクトを選択します。

個々のアーティファクトを選択するには、アーティファクトの横にあるチェックボックスをクリックします。すべてのアーティファクトを選択するには、「すべて選択」をクリックします。

7. Shared Services Consoleの右下にある「エクスポート」ボタンをクリックします。
8. 「エクスポート」ダイアログ・ボックスで、アーティファクトがエクスポートされるファイル・システム・フォルダを入力し、「エクスポート」をクリックします。

デフォルトのファイル・システム・フォルダ名は、username DD-MM-YY Hour_Min形式で表示されます。たとえば、admin 03-01-12 09_32です。デフォルトを受け入れるか、または異なるファイル・システム・フォルダ名を入力します。

ライフサイクル管理では、フォルダ名にネイティブ・オペレーティング・システムでサポートされない文字は許可されないことに注意してください。たとえば、Windowsではフォルダ名にコロンは許可されませんが、ライフサイクル管理でも同様です。

選択されているすべてのアプリケーションおよびアーティファクトは、指定されたファイル・システム・フォルダにエクスポートされます。(複数のアプリケーションがある場合、異なるファイル・システム・フォルダを指定する必要はありません。)

ファイル・システムにすでに存在するファイル・システム・フォルダ名を指定した場合は、新しいファイル・システム・フォルダ名を指定することが求められます。

9. 「移行ステータス・レポート」タブで移行ステータスを表示します。

[66ページの移行ステータス・レポート](#)を参照してください。

アーティファクトが正常に移行された後で、新しいファイル・システムフォルダがShared Services Consoleの「ファイル・システム」ノードの下に作成されます。ファイル・システム・フォルダを展開すると、アプリケーションが製品名とそれに続くアプリケーション名で表示されます。



ヒント:

ファイル・システムに移行されるアーティファクトのセキュリティを保護できます。第1レベルのセキュリティは、ファイル・システム・セキュリティです。ファイル・システム上のアーティファクトへのアクセスを制限するには、Shared Servicesを開始したユーザーにimport_exportフォルダへのすべての権限を許可し、その他のユーザーには許可しないように、import_exportフォルダの権限を変更します。追加のセキュリティ・レベルが必要な場合は、import_exportフォルダのコンテンツを、パスワードで保護されたコンテナ(Winzipなど)に移動するか、PGPまたはその他のデータ暗号化メソッドを使用して、ファイル・システム上で暗号化します。アーティファクトをファイル・システムからインポートする前に、権限のあるユーザーがアーティファクトの暗号化を解除するようにしてください。

アーティファクトのファイル・システムへの再エクスポート

必要に応じてアーティファクトをファイル・システムに再エクスポートできます。アーティファクトを再エクスポートするには、「ファイル・システム」ノードの下のフォルダを右クリックし、エクスポートの**繰返し**を選択します。

エクスポートを繰り返すと、アーティファクトは、新しいファイル・システム・フォルダにエクスポートされます。アーティファクトを再インポートするには、「ファイル・システム」ノードの下のフォルダを右クリックし、「インポート」を選択します。(インポートする前に製品に設定された移行オプションをチェックする必要があります。)

ファイル・システムからのインポート

ファイル・システムの場所は、Shared ServicesのJava Webアプリケーション・サーバー・コンピュータです。Shared Servicesコンピュータのデフォルトの宛先は、MIDDLEWARE_HOME/user_projects/epmsystem1/import_exportです。ファイル・システムの場所にエクスポート(コピー)されたアプリケーションまたはアーティファクトは、ビュー・ペインの「ファイル・システム」ノードの下に表示されます。アーティファクトがファイル・システムにエクスポートされると、ネイティブ製品でアーティファクトが更新された最後の変更日時が保持されます。

▶ Shared Services Consoleを使用して、ファイル・システムからアーティファクトおよびアプリケーションをインポートするには、次の手順を行います:

1. 宛先環境をバックアップします。

『Oracle Enterprise Performance Management Systemバックアップおよびリカバリ・ガイド』を参照してください。

2. Shared Services Consoleを起動します。

[33ページのShared Services Consoleの起動](#)を参照してください。

3. 「管理」、**移行オプション**を選択します。
4. **移行オプション**・タブで、移行用のインポート・オプションを定義します。

インストールされた製品に対するオプションのみが表示されます。製品によってオプションは異なり、すべての製品にインポート・オプションがあるわけではありません。必要に応じて何も変更せずにデフォルトのオプションを受け入れることができます。

製品別のオプションのリストは、[47ページの移行オプションの設定](#)を参照するか、このガイドの終わりにある付録を参照してください。

5. 「ファイル・システム」ノードを展開し、インポートするアプリケーションを選択します。

アプリケーションを選択すると、「アーティファクト・リスト」タブにアプリケーションとそのアプリケーションとリポジトリ・アーティファクトが表示されます。

6. 次のいずれかの方法でアーティファクトをインポートします。

- 「ファイル・システム」フォルダを右クリックして、「インポート」を選択します。

そのフォルダ内のすべてのアプリケーションをインポートします。インポートする「ファイル・システム」フォルダを選択すると、ダイアログ・ボックスが表示され、インポートを続行するかどうかの確認が求められます。

- 「ファイル・システム」フォルダの下の個々のアプリケーションを右クリックして、「インポート」を選択します。
- それぞれのアプリケーションの「アーティファクト・リスト」タブで、インポートするアーティファクトを選択し、Shared Services Consoleの右下にある「インポート」ボタンをクリックします。

デザイナー・ロールが割り当てられたユーザーでは「インポート」ボタンは使用できません。

7. 「インポート」ダイアログ・ボックスで、インポートするアプリケーションを選択し、「インポート」をクリックします。

デフォルトでは、ファイル・システム(移行定義ファイル)からのアプリケーション名が表示されます。存在しない場合は、アプリケーションが作成されます。

8. 「移行ステータス・レポート」タブで移行ステータスを表示します。

[66ページの移行ステータス・レポート](#)を参照してください。

移行オプションの設定

サブトピック

- [移行のインポート・オプション](#)
- [移行のエクスポート・オプション](#)
- [移行オプションのあるサンプルの移行定義ファイル](#)

ライフサイクル管理の移行用のインポートおよびエクスポート・オプションを設定できます。インストールされた製品に対するオプションのみが表示されます。製品によってオプションは異なり、すべての製品にオプションがあるわけではありません。必要に応じて何も変更せずにデフォルトのオプションを受け入れることができます。

移行オプションはすべてのライフサイクル管理の移行にグローバルに適用できます。これらは移行定義ファイルで明示的にオプションを指定することで上書きできます。

▶ 移行オプションを設定するには:

1. Shared Services Consoleを起動します。
[33ページのShared Services Consoleの起動](#)を参照してください。
2. 「管理」、移行オプションを選択します。
3. 「移行オプション」タブで、移行に必要なオプションを入力します。

移行のインポート・オプション

表3 インポート・オプション

インポート・オプション	説明
Essbase Studio - インポート・モード	<p>インポート・オプションを選択します:</p> <ul style="list-style-type: none">• 置換: 要素がカタログ・データベースにすでに存在する場合は、カタログ・ファイルの新しい要素で上書きされます。• マージ: 要素がカタログ・データベースにすでに存在する場合は、その要素が保持され、XMLファイルの重複する要素は使用されません。XMLファイルを使用して、カタログ・データベースが作成されます。少なくとも1つのインポートされたオブジェクトがカタログに存在する場合、インポート・プロセスは終了します。• 要素が存在する場合は中止: XMLファイルを使用してカタログ・データベースが作成されます。少なくとも1つのインポートされたオブジェクトがカタログに存在する場合、インポート・プロセスは終了します。 <p>注:</p> <p>「移行オプション」ダイアログボックスで指定された値を上書きするには、移行定義ファイルに次を直接入力します。</p> <pre><Options option="OverwriteCatalogObjects" Value="value"/></pre> <p>例:</p> <pre><Options option="OverwriteCatalogObjects" Value="SKIP"/></pre>

インポート・オプション	説明
	移行定義ファイルに直接入力する場合の有効な値はReplace/Merge/Abort (要素が存在する場合)です。
EPM Architect - デイメンションのインポート・モード	<p>次のいずれかのインポート操作を選択します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 置換: 宛先のデイメンションとプロパティをソース・インスタンスから抽出されたメタデータに置換します。 ・ マージ: 宛先のデイメンションとプロパティをソース・インスタンスから抽出されたメタデータにマージします。 <p>注:</p> <p>「移行オプション」ダイアログボックスで指定された値を上書きするには、移行定義ファイルに次を直接入力します。</p> <pre><Options option="replaceDimension" Value="value"/></pre> <p>例:</p> <pre><Options option="replaceDimension" Value="Merge"/></pre> <p>移行定義ファイルに直接入力する場合の有効な値はReplace/Mergeです。</p>
Essbaseアプリケーション - アーティファクトを上書き	<p>「はい」の場合、宛先の場所にあるすべてのアーティファクトを上書きします。デフォルト値は「いいえ」です。</p> <p>注:</p> <p>「移行オプション」ダイアログボックスで指定された値を上書きするには、移行定義ファイルに次を直接入力します。</p> <pre><Options option="overWriteArtifact" Value="value"/></pre> <p>例:</p> <pre><Options option="overWriteArtifact" Value="false"/></pre> <p>移行定義ファイルに直接入力する場合の有効な値はTrue/falseです。</p>
Essbaseアプリケーション - キューブの再構築	<p>次のいずれかのオプションを選択します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「キューブ・データを保持」 - キューブのアウトラインを再構築するときにキューブのデータを保持します。 ・ 「キューブ・データを破棄」 - キューブのアウトラインを再構築するときにキューブのデータを破棄します。 ・ 「入力データのみ保持」 - キューブのアウトラインを再構築するときに入力データのみを保持します。 ・ 「レベル0データのみ保持」 - キューブのアウトラインを再構築するときにレベル0のデータのみを保持します。

インポート・オプション	説明
	<p>注:</p> <p>「移行オプション」ダイアログボックスで指定された値を上書きするには、移行定義ファイルに次を直接入力します。</p> <pre><Options option="restructureCube" Value="value"/></pre> <p>例:</p> <pre><Options option="restructureCube" Value="Retain cube data"/></pre> <p>移行定義ファイルに直接入力する場合の有効な値はRetain cube data/Discard cube data/Keep only input data/Keep only 0 level dataです。</p>
FDMEE - 検証のスキップ	<p><guilabel moreinfo="none">インポート中に宛先の場所でのターゲット・ディメンション・メンバーの検証をスキップします。</p> <p>注:</p> <p>「移行オプション」ダイアログボックスで指定された値を上書きするには、移行定義ファイルに次を直接入力します。</p> <pre><Options option="skipValidation" Value="value"/></pre> <p>例:</p> <pre><Options option="skipValidation" Value="true"/></pre> <p>移行定義ファイルに直接入力する場合の有効な値はTrue/falseです。</p>
Financial Close Management - インポート・モード	<p>次のいずれかのオプションを選択します:</p> <ul style="list-style-type: none"> • 置換 - インポートしたアーティファクトで選択したアーティファクトを上書きします • すべて置換 - インポートしたアーティファクトで既存のアーティファクトをすべて上書きします <p>注:</p> <p>「移行オプション」ダイアログボックスで指定された値を上書きするには、移行定義ファイルに次を直接入力します。</p> <pre><Options option="replaceOption" Value="value"/></pre> <p>例:</p> <pre><Options option="replaceOption" Value="Replace"/></pre> <p>移行定義ファイルに直接入力する場合の有効な値はReplace/Replace Allです。</p>
Reporting and Analysis - インポートでジョブ出力を除外	<p>「はい」の場合は、インポート時にすべてのジョブ出力がインポート・フィルタと一致した場合でもスキップされます。デフォルト値は「いいえ」です。</p>

インポート・オプション	説明
	<p>注:</p> <p>「移行オプション」ダイアログボックスで指定された値を上書きするには、移行定義ファイルに次を直接入力します。</p> <pre data-bbox="555 421 1366 450"><Options option="excludeJobOutputOnImport" Value="value"/></pre> <p>例:</p> <pre data-bbox="555 546 1366 575"><Options option="excludeJobOutputOnImport" Value="false"/></pre> <p>移行定義ファイルに直接入力する場合の有効な値はTrue/falseです。</p>
<p>Reporting and Analysis - より新しいアーティファクトのみ置換</p>	<p>「はい」の場合は、リポジトリ内のアーティファクトと比較してファイル・システムの最終変更のタイム・スタンプがより新しいアーティファクトのみがインポートおよび置換されます。デフォルト値は「いいえ」で、最終変更のタイムスタンプに関係なく、宛先環境の既存のアーティファクトが置換されます。</p> <p>注:</p> <p>「移行オプション」ダイアログボックスで指定された値を上書きするには、移行定義ファイルに次を直接入力します。</p> <pre data-bbox="555 1003 1238 1070"><Options option="replaceNewerArtifactsOnlyImport" Value="value"/></pre> <p>例:</p> <pre data-bbox="555 1167 1437 1234"><Options option="replaceNewerArtifactsOnlyImport" Value="true"/></pre> <p>移行定義ファイルに直接入力する場合の有効な値はTrue/falseです。</p>
<p>HFM - デイメンションのインポート・モード</p>	<p>次のいずれかのインポート操作を選択します:</p> <ul data-bbox="555 1384 1326 1458" style="list-style-type: none"> • 置換 - アーティファクトをインポートしたアーティファクトで上書きします。 • マージ - アーティファクトをインポートしたアーティファクトとマージします。 <p>注:</p> <p>このオプションは、移行で定義されたすべてのデイメンションに適用できます。</p> <p>注:</p> <p>「移行オプション」ダイアログボックスで指定された値を上書きするには、移行定義ファイルに次を直接入力します。</p> <pre data-bbox="555 1787 1294 1816"><Options option="ImportDimensionMode" Value="value"/></pre> <p>例:</p> <pre data-bbox="555 1912 1294 1942"><Options option="ImportDimensionMode" Value="Merge"/></pre>

インポート・オプション	説明
	移行定義ファイルに直接入力する場合の有効な値はReplace/Mergeです。
HFM - フェーズ送信割当てインポート・モード	<p>次のいずれかのインポート操作を選択します:</p> <ul style="list-style-type: none"> • 置換 - アーティファクトをインポートしたアーティファクトで上書きします。 • マージ - アーティファクトをインポートしたアーティファクトとマージします。 <p>注:</p> <p>「移行オプション」ダイアログボックスで指定された値を上書きするには、移行定義ファイルに次を直接入力します。</p> <pre><Options option="ImportPhaseSubmissionAssignmentMode" Value="value"/></pre> <p>例:</p> <pre><Options option="ImportPhaseSubmissionAssignmentMode" Value="Replace"/></pre> <p>移行定義ファイルに直接入力する場合の有効な値はReplace/Mergeです。</p>
Shared Services - 最大エラーしきい値	<p>インポート・プロセスが停止されるまでに許容されるエラーの数。</p> <p>注:</p> <p>「移行オプション」ダイアログボックスで指定された値を上書きするには、移行定義ファイルに次を直接入力します。</p> <pre><Options option="maxerrors" Value="value"/></pre> <p>例:</p> <pre><Options option="maxerrors" Value="100"/></pre> <p>移行定義ファイルに直接入力する場合の有効な値は10/50/100/500/1000/5000/>5000です。</p>
Shared Services - インポート・モード	<p>次のいずれかのインポート操作を選択します:</p> <ul style="list-style-type: none"> • 作成または更新 • 作成 • 更新 • 削除 <p>注:</p> <p>非アクティブ化されたネイティブ・ディレクトリのユーザーを削除するには、ユーザーを最初にアクティブ化してから削除する必要があります。</p>

インポート・オプション	説明
	<p>注:</p> <p>「移行オプション」ダイアログボックスで指定された値を上書きするには、移行定義ファイルに次を直接入力します。</p> <pre><Options option="operation" Value="value"/></pre> <p>例:</p> <pre><Options option="operation" Value="Delete"/></pre> <p>移行定義ファイルに直接入力する場合の有効な値はCreate or Update/ Create/Update/Deleteです。</p>

移行のエクスポート・オプション

表4 エクスポート・オプション

エクスポート・オプション	説明
Reporting and Analysis - ジョブ出力付きのエクスポート	<p>「はい」の場合は、ジョブはその出力がエクスポート・フィルタと一致しない場合でも、出力とともにエクスポートされます。デフォルト値は「はい」です。</p> <p>注:</p> <p>「移行オプション」ダイアログボックスで指定された値を上書きするには、移行定義ファイルに次を直接入力します。</p> <pre><Options option="exportJobOutput" Value="value"/></pre> <p>例:</p> <pre><Options option="exportJobOutput" Value="true"/></pre> <p>移行定義ファイルに直接入力する場合の有効な値はTrue/falseです。</p>

移行オプションのあるサンプルの移行定義ファイル

次に、移行オプションの行を太字で示したサンプルの移行定義ファイルを示します。

```

    <Package>
    <LOCALE>en_US</LOCALE>
    <User name="admin" password="" />
    <Task>
      <Source type="Application" product="HUB" project="Foundation"
application="Shared Services" />
      <Target type="FileSystem" filePath="/exp1/HUB.Shared Services" />

      <Options option="operation" Value="delete" />

      <Artifact recursive="true" parentPath="/Native Directory" pattern="*" />

```

```
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Taskflows" pattern="*" />
  </Task>
  <Task>
    <Source type="FileSystem" filePath="/exp22/HUB.Shared Services" />
    <Target type="Application" product="HUB" project="Foundation"
application="Shared Services" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Native Directory" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Taskflows" pattern="*" />
  </Task>
</Package>
```

編集する個々のアーティファクトのエクスポートとインポート

サブトピック

- [編集する個々のアーティファクトのエクスポートとインポート](#)
- [個々のアーティファクトの編集](#)
- [編集後の個々のアーティファクトのインポート](#)

Shared Services Consoleを使用して、個々のアーティファクトをファイル・システムにエクスポートして編集し、編集後に再度インポートできます。アーティファクトは、エクスポート元と同一のアプリケーションにインポートする必要があります。



注:

アーティファクトにはファイル・システムで編集できないものもあります。[55ページの個々のアーティファクトの編集](#)を参照してください。

編集する個々のアーティファクトのエクスポートとインポート

▶ Shared Services Consoleを使用して個々のアーティファクトをエクスポートするには:

1. Shared Services Consoleを起動します。

[33ページのShared Services Consoleの起動](#)を参照してください。

2. ビュー・ペインで「アプリケーション・グループ」ノードを展開し、アプリケーション・グループを表示します。
3. アプリケーションを表示するために、アプリケーション・グループを展開します。
4. アプリケーションを選択して(またはアプリケーションを右クリックし、「エクスプローラ」を選択して)、アーティファクトのリストを表示します。
5. エクスポートするアーティファクトを右クリックし、「編集用にエクスポート」を選択します。
6. 「ファイルのダウンロード」で「保存」をクリックします。
7. ローカル・ファイル・システムの保存場所を入力し、「保存」をクリックします。



注:

Reporting and Analysisにかぎり、アーティファクトがローカル・ファイル・システムのZIPファイルに保存されます。編集するには、アーティファクトを解凍する必要があります。その他の製品では、アーティファクトはZIPファイルではなく、ファイル・システムに直接保存されます。

個々のアーティファクトの編集

アーティファクトは、個別のアプリケーションまたはリポジトリ・アイテム(スクリプト、Webフォーム、データ・フォーム、ルール・ファイル、ドキュメント、財務レポートなど)であるため、その編集方法はアーティファクトのタイプによって異なります。一部のアーティファクトはテキスト・エディタで編集可能ですが、中には編集時に製品が必要なものもあります。たとえば、Calculation ManagerアーティファクトはXMLベースであるため、テキスト・エディタで編集できます。

アーティファクトがファイル・システム上で編集可能かどうかを判別するには、このガイドの巻末付録のアーティファクト・リストを確認してください。



注意

編集用にエクスポートしたファイルは名前変更しないでください。インポートが失敗します。

編集後の個々のアーティファクトのインポート

アーティファクトは、エクスポート元と同一のアプリケーションにインポートする必要があります。また、アーティファクトのエクスポート中に使用された同じファイル名を使用する必要があります。

▶ Shared Services Consoleを使用して個別アーティファクトをインポートするには:

1. Shared Services Consoleを起動します。

[33ページのShared Services Consoleの起動](#)を参照してください。

2. ビュー・ペインで「アプリケーション・グループ」ノードを展開し、アプリケーション・グループを表示します。
3. アプリケーションを表示するために、アプリケーション・グループを展開します。
4. アプリケーションを選択して(またはアプリケーションを右クリックし、「エクスプローラ」を選択して)、アーティファクトのリストを表示します。
5. アプリケーション内の任意のアーティファクトを右クリックし、「編集後にインポート」を選択します。
6. 「アーティファクトのロード」で、アーティファクトを保存するローカルのファイル・システムの場所を入力し、「終了」をクリックします。

アプリケーション・アーティファクトのダウンロードおよびアップロード

サブトピック

- [アプリケーション・アーティファクトをダウンロードおよびアップロードする手順](#)
- [ZIPファイルおよびアーカイブに関する重要事項](#)

Shared Services Consoleのファイル・システム・ノードからアーティファクトをダウンロードすることで、アプリケーション・アーティファクトをある環境から別の環境に移動できます。ライフサイクル管理アーティファクトをダウンロードする場合は、ZIPファイルに保存します。さらにアーティファクトを含むZIPファイルを別の環境にアップロードできます。

アプリケーション・アーティファクトをダウンロードおよびアップロードする手順

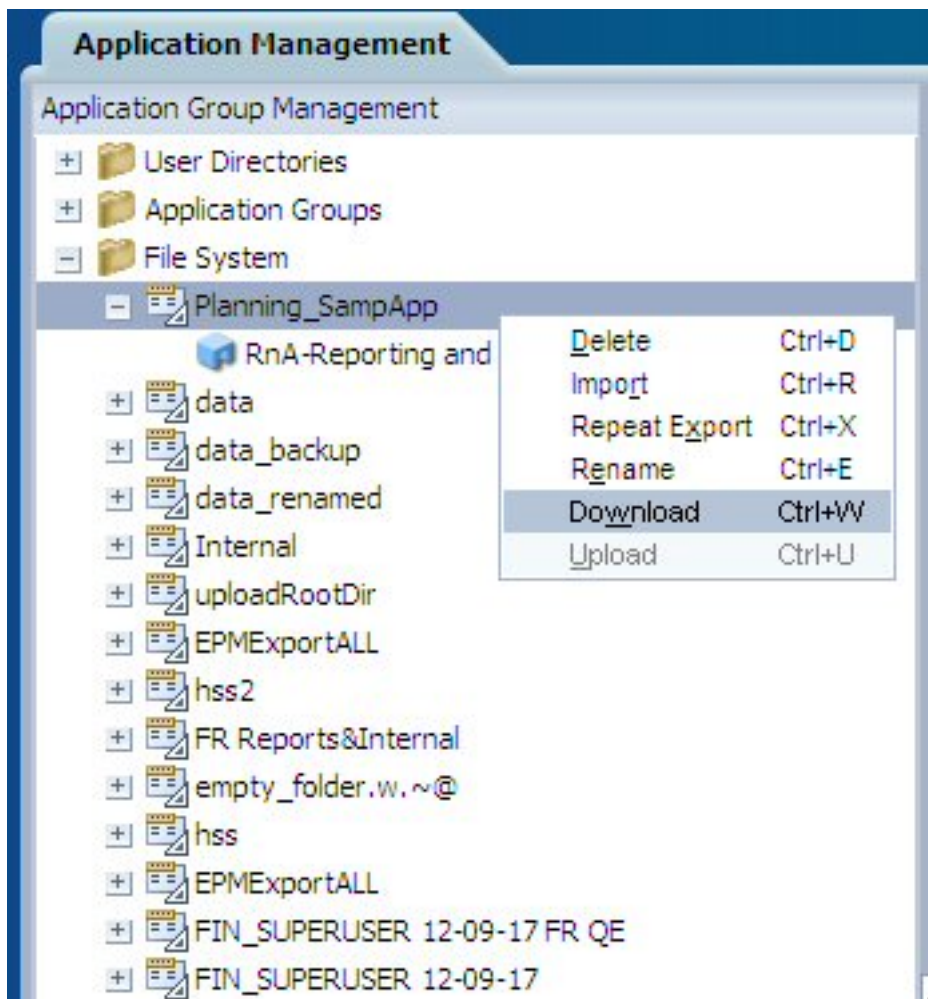
▶ アプリケーション・アーティファクトをダウンロードおよびアップロードするには:

1. 既存の環境で、Shared Services Consoleを起動します。

[33ページのShared Services Consoleの起動](#)を参照してください。

2. ビュー・ペインで「ファイル・システム」ノードを展開します。
3. 「ファイル・システム」フォルダを右クリックして、「ダウンロード」を選択します。

「ダウンロード」オプションは、ファイル・システム・フォルダがサーバー上のZIPファイルの場合にのみ使用できます。エクスポート操作中、フォルダ・サイズが2GB以下の場合のみ、ファイル・システム・フォルダはライフサイクル管理によって圧縮されます。2GBより大きいコンテンツの場合、ある環境から他の環境に移動するには、FTPなどのメカニズムを使用する必要があります。

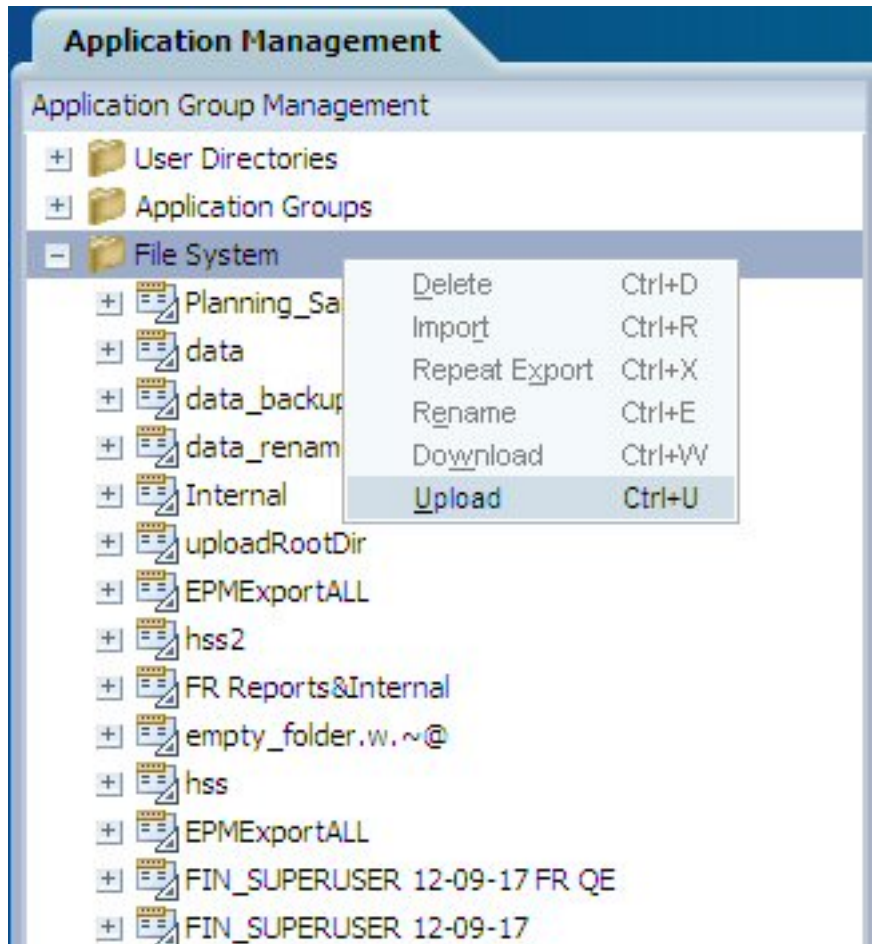


4. 「ファイルのダウンロード」ダイアログ・ボックスで、「保存」をクリックして、アプリケーション・アーティファクトをZIPファイルとして保存します。

ZIPファイルのコンテンツ全体を1つのファイルとしてダウンロードします。

5. 新しい環境で、Shared Services Consoleを起動し、「ファイル・システム」ノードを展開します。
6. 「ファイル・システム」ノードを右クリックし、「アップロード」を選択して、アップロードするZIPファイルを選択します。

ZIPファイルがすでに存在する場合、アップロードは中止されます。必要に応じてアップロードする前にZIPファイルの名前を変更できます。



ZIPファイルおよびアーカイブに関する重要事項

- ダウンロードしたコンテンツを解凍する場合や、圧縮したLCMフォルダをサーバーにアップロードする場合、7-Zipなどの圧縮ソフトウェアを使用する必要があります。
- 2GBより大きいZIPファイルのアップロードはサポートされません。
- データ・セットをアーカイブする場合、Unicodeのパスおよびファイル名を維持する必要があります。

7-Zipを使用してこれを行うには:

1. 「ファイル・システム」フォルダを右クリックして「7-zip」を選択し、次に「Add to Archive」を選択します。
2. 「Add to Archive」ダイアログ・ボックスで、次の情報を設定します:
 - 「Archive Format」フィールドで、「Zip」を選択します。
 - 「Parameters」フィールドに、**cu=on**を入力します。
3. 「OK」をクリックします。



注:

UTFエンコードが維持されない場合に、データ・セットにそれらのエンコードを必要とする文字が含まれていると、移行はエラーになります。

ネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)の移行

アプリケーション・アーティファクトを移行する方法と同じ方法でネイティブ・ディレクトリのアーティファクト(割り当てられた役割、グループ、役割、およびユーザー)を移行できます。

Shared Servicesネイティブ・ディレクトリのアーティファクトは、Foundationアプリケーション・グループの下のShared Servicesノードにリストされています。



注:

製品アプリケーションのセキュリティ・アーティファクト(たとえば、Financial Managementセキュリティ・クラシックやEssbaseフィルタなど)は、製品アプリケーション・グループの下に個別にリストされています。

製品別のアプリケーションのセキュリティ・アーティファクト・リストについては、このガイドの巻末にある付録を参照してください。

▶ Shared Services Consoleを使用してShared Servicesネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)のアーティファクトを移行するには:

1. 宛先環境をバックアップします。

『Oracle Enterprise Performance Management Systemバックアップおよびリカバリ・ガイド』を参照してください。

2. Shared Services Consoleを起動します。

[33ページのShared Services Consoleの起動](#)を参照してください。

3. ビュー・ペインで「アプリケーション・グループ」ノードから、「**Foundation**」アプリケーション・グループを展開します。
4. 「**Shared Services**」を選択します(または、「**Shared Services**」を右クリックして、「**エクスプローラ**」を選択します)。
5. 「ネイティブ・ディレクトリ」を展開して、次のネイティブ・ディレクトリのアーティファクトを選択します。

- 割り当てられている役割

割り当てられた役割を展開し、移行するアーティファクトを選択します。アーティファクトには通常、アプリケーション名にちなんだ名前が付けられます。

- 委任リスト
- グループ
- 役割
- ユーザー

6. 「割り当てられた役割」を展開して、移行するアプリケーションに割り当てられた役割を選択します。
7. 「エクスポート」を選択します。
8. 「エクスポート」ダイアログ・ボックスで、アーティファクトがエクスポートされるファイル・システム・フォルダを入力し、「エクスポート」をクリックします。
9. 「移行ステータス・レポート」タブで移行ステータスを表示します。

Shared Servicesレジストリ・データの編集

サブトピック

- [Shared Servicesレジストリ・データの表示](#)
- [Shared Servicesレジストリ・データのエクスポート](#)
- [Shared Servicesレジストリ・データの編集](#)
- [Shared Servicesレジストリ・データのインポート](#)

Shared ServicesレジストリとはShared Services用に構成するデータベースの一部です(Shared Servicesのデータベースとテーブルスペースを共有しています。)



注:

前のリリースでは、Shared ServicesレジストリはEPM Systemレジストリとも呼ばれていました。

Shared ServicesレジストリはEPM System製品の初回構成時に作成され、インストールする主なEPM System製品の次の情報を保管および再使用することで、構成を簡略化します。

- インストール・ディレクトリ、データベース設定、デプロイメント設定などの初期構成値
- 複数の統合されたEPM System製品およびコンポーネントを実装するために使用するコンピュータ名、ポート、サーバー、URL
- 依存するサービス・データ

ライフサイクル管理に備わったユーザー・インタフェースにより、ユーザーはレジストリのコンテンツを表示し、レジストリ・データを編集や再インポートが可能なファイル・システムにエクスポートできます。

デプロイメント・メタデータのライフサイクル管理操作を行うユーザーには、LCM管理者とShared Services管理者の両方の役割が割り当てられている必要があります。



注意

Shared Servicesレジストリ・アーティファクトは指定された環境にかぎり、ライフサイクル管理の一部として構成情報の編集などに使用可能です。Shared Servicesレジストリ・データを1つの環境から別の環境に移行するためにライフサイクル管理を使用しないでください。

ライフサイクル管理を使用すると、エクスポートするShared Servicesレジストリのアーティファクトを定義できます。Shared Services Consoleを使用して、個々のレジストリ・アーティファクトをファイル・システムにエクスポートして編集し、編集後に再度インポートできます。

Foundationアプリケーション・グループのDeployment Metadataノードの下で、Shared Services Consoleに属すShared Servicesレジストリ・アーティファクトをすべて表示できます。

- ノード(レジストリの分類ごと)はすべてライフサイクル管理のディレクトリです。
- ノードの属性はすべてライフサイクル管理のアーティファクトです。
- ファイル(XMLファイルなど)の属性には、対応するファイル・タイプのアーティファクトが存在します。

- ・ ノード(コンポーネントまたは製品)の名前付き値ペアの属性はいずれも、1つのアーティファクトにグループ分けされます。このアーティファクトはこうした属性のすべてを含むファイルで、ライフサイクル管理のエクスポートが実施されるときにコピーされます。

Shared Servicesレジストリ・アーティファクトおよびShared Servicesレジストリの移行オプションのリストについては、[89ページの付録A「デプロイメント・メタデータとライフサイクル管理」](#)を参照してください。

Shared Servicesレジストリ・データの表示

▶ Shared Services Consoleを使用して、Shared Servicesレジストリ・データを表示するには:

1. Shared Services Consoleを起動します。
[33ページのShared Services Consoleの起動](#)を参照してください。
2. ビュー・ペインのアプリケーション・グループノードで、**Foundation**アプリケーション・グループを展開します。
3. 「デプロイメント・メタデータ」を選択します(または「デプロイメント・メタデータ」を右クリックして、「エクスプローラ」を選択します)。
4. 「**Shared Services**レジストリ」を選択します。

Shared Servicesレジストリ・データのエクスポート



注意

Shared Servicesレジストリ・アーティファクトは指定された環境にかぎり、ライフサイクル管理の一部として構成情報の編集などに使用可能です。Shared Servicesレジストリ・データを1つの環境から別の環境に移行するためにライフサイクル管理を使用しないでください。

▶ Shared Services Consoleを使用してShared Services レジストリをエクスポートするには:

1. Shared Services Consoleを起動します。
[33ページのShared Services Consoleの起動](#)を参照してください。
2. ビュー・ペインのアプリケーション・グループノードで、**Foundation**アプリケーション・グループを展開します。
3. 「デプロイメント・メタデータ」を選択します(または「デプロイメント・メタデータ」を右クリックして、「エクスプローラ」を選択します)。
4. 「**Shared Services**レジストリ」を展開します。
5. エクスポートするShared Servicesレジストリのアーティファクトを選択します。

個々のアーティファクトを選択するには、アーティファクトの横にあるチェックボックスをクリックします。すべてのアーティファクトを選択するには、「すべて選択」をクリックします。

6. 「エクスポート」を選択します。
7. 「エクスポート」ダイアログボックスで、アーティファクトがエクスポートされるファイル・システム・フォルダを入力し、「エクスポート」をクリックします。
8. 「移行ステータス・レポート」タブで移行ステータスを表示します。

Shared Servicesレジストリ・データの編集

▶ ファイル・システムでShared Servicesレジストリ・データを編集するには:

1. Shared Servicesレジストリ・データがコピーされている、またはエクスポートされているファイル・システムの場合に移動します。
2. データを編集します。
3. 変更を保存します。

Shared Servicesレジストリ・データのインポート

▶ Shared Services Consoleを使用して、Shared Servicesレジストリ・データをインポートするには:

1. Shared Services Consoleを起動します。

33ページのShared Services Consoleの起動を参照してください。

2. ビュー・ペインの「ファイル・システム」ノードで、エクスポートするときに指定したファイル・システム・フォルダを右クリックし、「インポート」を選択します。

移行プロパティの編集

ライフサイクル管理では、移行プロパティを使用して移行に関するグローバル・パラメータを設定します。

▶ 移行プロパティを変更するには:

1. Shared Services Consoleを起動します。

33ページのShared Services Consoleの起動を参照してください。

2. 「表示ペインで「アプリケーション・グループ」ノードを展開します。
3. 「アプリケーション・グループ」下で「Foundation」、「デプロイメント・メタデータ」の順に展開します。
4. 「アーティファクト・リスト」タブで、Shared Servicesレジストリ、「Foundation Services」、「Shared Services」の順に展開します。
5. 「プロパティ」アーティファクトを選択して右クリックし、「編集用にエクスポート」を選択します。
6. 「ファイルのダウンロード」ダイアログ・ボックスで、希望の場所に「プロパティ」アーティファクトを保存します。
7. 必要に応じて移行プロパティを編集します。
8. ライフサイクル管理に戻り、手順5で使用した「プロパティ」アーティファクトを右クリックして「編集後にインポート」を選択します。
9. 「編集後にインポート」ダイアログ・ボックスで、編集されたプロパティ・アーティファクトが使用可能なファイル・システムを指定します。
10. Shared Servicesを再起動します。

表5 移行プロパティとその説明

プロパティ	説明
double-encoding	<p>Financial Managementアプリケーションの移行でUTF-8エンコードに加えてBase64エンコードを使用できます。</p> <p>このプロパティは、混在リリース環境で(Financial Managementの前のリリースと、Shared Servicesのこのリリースを使用する場合など)Financial Managementの移行を実行する場合にはサポートされません。混在リリース環境でFinancial Managementアプリケーションの移行を実行する場合は、このプロパティをFALSEに設定します。</p> <p>デフォルト値: TRUE</p>

プロパティ	説明
filesystem.artifact.path	<p>エクスポートされたアプリケーションが保管されるディレクトリの場所。これは、Shared Servicesが高可用性に構成されている場合の共有ディスクの場所です。このパラメータをカスタマイズするには、この行のコメントを解除し、パスの場所を追加します。デフォルト値: このパラメータはコメント化され、ライフサイクル管理エンジンでは Shared Services コンピュータのデフォルト・ファイル・システムの場所が使用されます (MIDDLEWARE_HOME/user_projects/epmsystem1/import_exportなど)。</p> <p>注:</p> <p>Windows 2003では、ファイル・システム・パスがネットワーク・アクセスが可能な場所である場合は、UNCパスを使用するか、または共有ファイル・システムを同時アクセスに対する読取り/書込みの権限で使用する必要があります。</p> <p>注:</p> <p>分散環境間でデータ移行を可能にするには、filesystem.artifact.pathが共有パスである必要があります。</p>
fileSystem.friendlyName	<p>アーティファクトのファイル名、拡張名(アーティファクトIDと名前の組合せなど)で保管するかどうかを指定します。デフォルト値: TRUE</p> <p>注:</p> <p>fileSystem.friendlyNamesは、Reporting and Analysisおよびデプロイメント・メタデータにのみ適用可能です。他の製品のアーティファクトは、常にアーティファクト名を使用して保管されます。</p>
groupcount	<p>グループでの移行されるアーティファクトの数。</p> <p>このオプションは、グループでの移行をサポートしている製品(Planning, Financial Management, Financial Close Management, Performance Management Architect, Reporting and AnalysisおよびFDME)で使用可能です。Performance Management ArchitectおよびFinancial Close Managementのアーティファクトは、アーティファクトのサイズや数に関係なく常に1つのグループとして移行されます。</p> <p>デフォルトのグループ数は30です。これは30のグループでアーティファクトが移行されるということです。アーティファクトのタイプ、アーティファクトのサイズ、アーティファクトの数に関するデータに基づいて、移行のパフォーマンスを改善するため、この値を変更できます。</p> <p>デフォルト値: -1</p>
MSR.PURGE.EARLIERTODAYS	<p>ライフサイクル管理の移行に関連する管理設定。</p> <p>この値より以前の移行は、24時間ごとに実行されるチェックに基づいて、Foundation Servicesシステムの起動時に定期的に削除されます。</p> <p>デフォルト値: 30 days</p>
report.folder_path	<p>移行ステータスのレポートとアーティファクトの概算レポートが保管されるディレクトリ。</p>

プロパティ	説明
	デフォルト値: ../reports (MIDDLEWARE_HOME/user_projects/epmsystem1/diagnostics/logs/migration/reports)
zip.threshold	<p>最大ZIPファイル・サイズのしきい値。</p> <p>エクスポート・コンテンツのサイズがこのしきい値を超えると、エクスポート・コンテンツはフォルダとして保管されます。このサイズは1.8GBを超えることはできません。これより大きいサイズの圧縮およびダウンロードには、ブラウザとJDKの制限があります。</p> <p>デフォルト値: 1.8GB</p>

移行データの削除

削除アクティビティは、Shared Services Webアプリケーションの起動時に開始されるバックグラウンド・プロセスです。削除は、移行プロパティMSR.PURGE.EARLIERTO.DAYSで指定された期間に実行されます。デフォルト値は30日です。[63ページの移行プロパティの編集](#)を参照してください。

ライフサイクル管理のレポート

サブトピック

- [移行ステータス・レポート](#)
- [アプリケーション監査レポート](#)
- [アーティファクトの変更レポート](#)



注:

この項で説明するレポートに加えて、Shared Servicesではプロビジョニング・レポート、セキュリティ・レポート、および構成レポートも生成されます。これらのレポートについては、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemユーザーおよび役割セキュリティガイド』に説明されています。

移行ステータス・レポート

LCM管理者は、移行ステータス・レポートを表示してすべての移行のステータスを確認できます。

- **処理中** - 移行の処理中です。
- **完了** - すべてのアーティファクトが正常に移行されました。
- **警告付きで完了** - すべてのアーティファクトが正常に移行されましたが、調査が必要となる可能性がある問題があります。
- **失敗** - 一部のアーティファクトが移行されませんでした。



注:

移行のステータスが「警告付きで完了」または「失敗」の場合は、ハイパーリンクをクリックして移行の詳細を確認します。移行の詳細は、「処理中」または「完了」の移行では表示できません。

▶ 移行ステータスを表示するには:

1. Shared Services Consoleを起動します。

[33ページのShared Services Consoleの起動](#)を参照してください。

2. 「管理」から、「移行ステータス・レポート」を選択します。

各移行に関する次の情報を表示できます。

- ユーザー
- ソース
- 宛先
- 開始時間
- 完了時刻
- 期間
- ステータス - 「処理中」、「完了」、「警告付きで完了」または「失敗」



注:

ソース - 宛先列の進捗インディケータには、「処理中」の移行で処理されるアーティファクト数が示されます。

3. 移行のステータスが「警告付きで完了」または「失敗」の場合は、「ステータス」列のハイパーリンクをクリックすると、次の移行の詳細を確認できます:
 - ソースと宛先のアプリケーション
 - アーティファクトのパス
 - アーティファクト名
 - メッセージ・タイプ(エラーまたは警告)
 - メッセージ
4. 移行ステータス・レポートを再生成するには、「リフレッシュ」をクリックします。
5. 移行ステータス・レポートを閉じるには、「取消し」をクリックします。

アプリケーション監査レポート

アプリケーション監査レポートはライフサイクル管理機能を使用してインポートまたはエクスポートされたアーティファクトの情報を表示します。Shared Services管理者のみが、監査レポートを生成および表示できます。LCM管理者は監査タスクを実行できません。

監査は、監査レポートを生成する前に使用可能にする必要があります。監査を使用可能にするには、Shared Services Consoleを起動し、「管理」、「監査の構成」の順に選択し、「監査の使用可能」チェック・ボックスを選択します。詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemユーザーおよび役割セキュリティガイド』を参照してください。

監査を使用可能にすると、アプリケーション・レベルまたはアプリケーション・グループ・レベルで監査レポートを生成できるようになります。ライフサイクル管理で実行されたすべてのアクションは、アプリケーション監査レポートに記録され、どのアーティファクトが移行され、いつ移行されたかが追跡されます。レポートは外部ファイルにエクスポートできます。

▶ アプリケーション監査レポートを生成するには:

1. Shared Services Consoleを起動します。

[33ページのShared Services Consoleの起動](#)を参照してください。

2. 「管理」で「監査レポート」を選択してから、「アプリケーション監査レポート」を選択します。

アプリケーション監査レポートが表示されます。

3. レポート・パラメータを入力します:

- 実行者-レポートを生成するユーザーを選択するか、すべてのユーザーを選択します。
- 実行された期間 - レポートを実行する期間を選択します。
 - 5日 - 過去5日間のイベント
 - 10日 - 過去10日間のイベント

- 15日 - 過去15日間のイベント
- 20日 - 過去20日間のイベント
- 25日 - 過去25日間のイベント
- 30日 - 過去30日間のイベント
- 日付範囲 - 指定した日付範囲内(指定した日付を含む)のイベント

4. レポートを表示するには、「レポートの表示」をクリックします。
5. レポートをCSVファイル・フォーマットで表示または保存するには、「エクスポート」をクリックします。
6. レポートを閉じるには「閉じる」をクリックします。

アーティファクトの変更レポート

アーティファクトの変更レポートでは、EPM System内のアーティファクトに対して行われた変更を識別します。このレポートには、アプリケーション・グループ、アプリケーション、アーティファクト名、アーティファクト・タイプ、変更されたユーザー、変更日、およびアーティファクト・パスが表示されます。アーティファクト変更レポートを作成する場合は、アーティファクト名、アーティファクト・タイプ、変更ユーザー、開始日、終了日の各属性に基づいて結果をフィルタ処理できます。

▶ アーティファクトの変更レポートを生成するには:

1. Shared Services Consoleを起動します。

[33ページのShared Services Consoleの起動](#)を参照してください。

2. 「管理」から、アーティファクトの変更レポートを選択します。
3. レポート・パラメータを入力します:

- **アーティファクト名** - アーティファクトの名前。特定のアーティファクト名、または名前の一部を入力できます。たとえば、Cost*と入力して、Costで始まるすべてのデータ・フォームを検索できます。

これはオプションのパラメータです。アーティファクト名を入力しない場合は、すべてのアーティファクトが含まれます。

- **アーティファクト・タイプ** - アーティファクトのタイプ。

これはオプションのパラメータです。アーティファクト・タイプを入力しない場合は、すべてのアーティファクト・タイプが含まれます。

- **変更者** - アーティファクトを変更した人のユーザーID。

これはオプションのパラメータです。ユーザーIDを入力しない場合は、アーティファクトを変更したすべてのユーザーが含まれます。

- **開始日** - レポートの開始日。デフォルトの日付は昨日の日付です。
- **終了日** - レポートの終了日。デフォルトの日付は今日の日付です。



ヒント:

開始日と終了日を変更して、異なる日付範囲を指定できます。たとえば、2年前の開始日を設定して、過去2年間に変更されたアーティファクトを検索できます。

4. レポートに含めるアプリケーションを選択します。

すべてのアプリケーションを選択するには、「すべて」の横にあるチェック・ボックスを選択します。



注:

特定のアプリケーションを検索するには、アプリケーションの検索テキスト・ボックスにアプリケーションの名前を入力します。たとえば、アプリケーションが複数あり、Essbaseアプリケーションのみを参照する場合は、Essbaseと入力して、表示されるアプリケーションをEssbaseアプリケーションのみに絞り込むことができます。

5. 「レポート作成」をクリックします。
6. レポートが生成された後、次のいずれかのオプションを選択します。
 - 戻る: アーティファクトの変更レポートの入力画面に戻り、別のレポート・パラメータを入力します。
 - 印刷プレビュー: 印刷する前に、レポートをプレビューします。レポートをプレビューした後、「印刷」をクリックして、レポートを印刷できます。
 - CSVにエクスポート: レポートをカンマ区切り値ファイルにエクスポートします。
 - 閉じる: アーティファクトの変更レポートを終了します。



注:

アーティファクトの変更を追跡するためのライフサイクル管理ユーティリティの使用については、[86ページのアクティビティの変更レポート](#)を参照してください。

7

ライフサイクル管理ユーティリティの使用法

この項の内容:

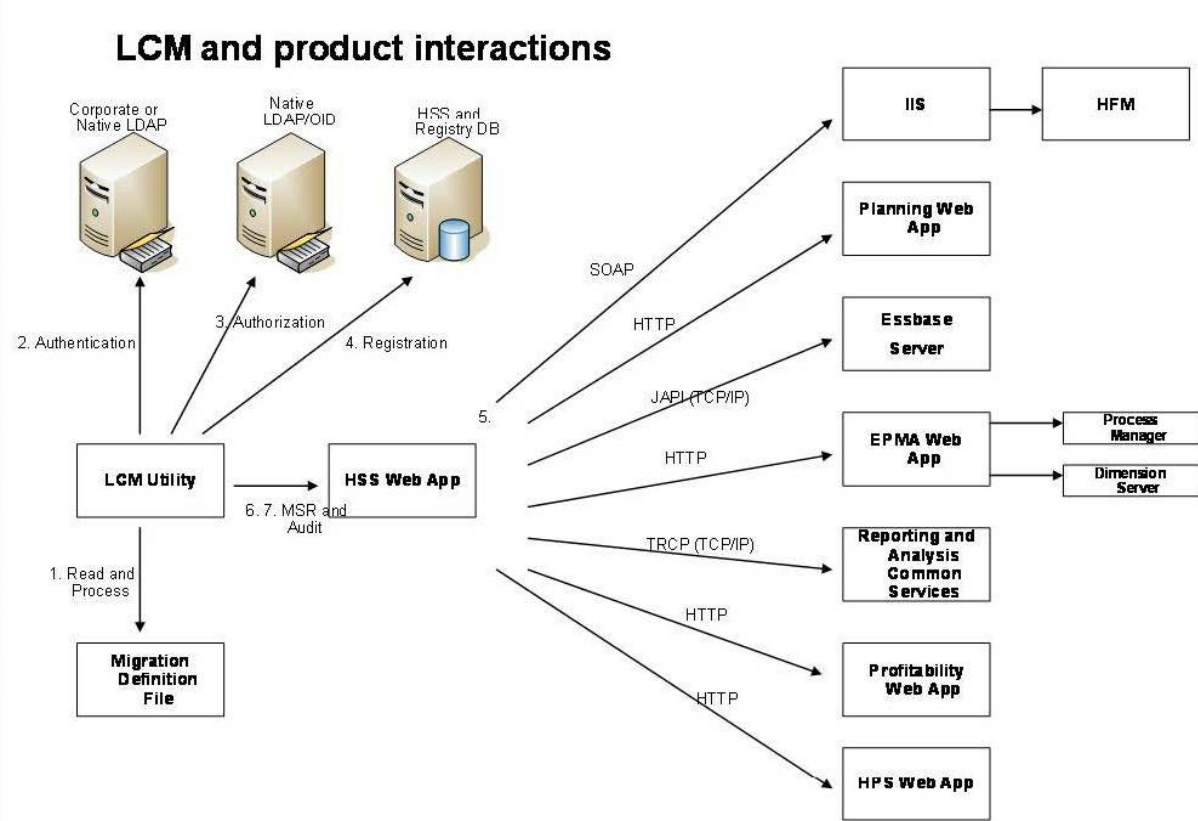
ライフサイクル管理ユーティリティのプロセス	71
ライフサイクル管理ユーティリティの機能	72
ライフサイクル管理ユーティリティのインストール	73
移行定義の使用	73
ライフサイクル管理ユーティリティの使用法	79
追加のコマンドライン・ユーティリティ	85

ライフサイクル管理ユーティリティのプロセス

ライフサイクル管理ユーティリティは、製品環境およびオペレーティング・システム間でのアーティファクトの移行をサポートするコマンドライン・ユーティリティです。このユーティリティにより、アプリケーション全体または個別のアーティファクトを、ソースから宛先に移行する代替手段が提供されます。

72ページの図 4は、サービスとライフサイクル管理ユーティリティの間の通信フローを示しています:

図4 ライフサイクル管理と製品のやりとり



1. **移行定義ファイルの処理:** ライフサイクル管理ユーティリティは、最初に移行定義ファイルを読み取り、処理します。
2. **認証:** 次に、ライフサイクル管理ユーティリティは、Shared Servicesとともに使用するために構成された、企業LDAPディレクトリまたは他のプロバイダいずれかのユーザーを認証します。Shared Servicesレジストリ・データベースは、初期化中は実行されている必要があります。
3. **許可:** 認証後、ライフサイクル管理ユーティリティは、Shared Servicesのネイティブ・ディレクトリに問い合せて、ユーザーの役割が要求された操作の実行を許可しているかを確認します。
4. **登録情報:** ライフサイクル管理ユーティリティは、Shared ServicesレジストリおよびShared Servicesデータベースと通信し、EPM Systemアプリケーションの登録情報を取得します。
5. **各アプリケーション移行要求の処理:** ライフサイクル管理ユーティリティは、適切なEPM Systemアプリケーションに問い合せて各インポートまたはエクスポート操作を処理します。
6. **監査:** ライフサイクル管理ユーティリティは、監査が有効な場合、HTTPを介してShared Services Java Webアプリケーションに問い合せて、各ライフサイクル管理アクションを監査します。
7. **ステータス・レポートのバブリッシュ:** ライフサイクル管理ユーティリティは、HTTPを介してShared Services Java Webアプリケーションに問い合せて、移行ステータス・レポートをバブリッシュします。

ライフサイクル管理ユーティリティの機能

- 1つ以上のEPM Systemアプリケーションまたはアプリケーションのアーティファクトを、ある環境から他の環境に移行する

- ユーザーはWindowsタスク スケジューラまたはOracle Enterprise Managerなどのサード・パーティのスケジューリング・サービスを使用して、スケジュールされた移行を実行できる
- ユーティリティへの保護されたアクセスを保証する

ライフサイクル管理の操作を行えるのは、LCM管理者の役割を割り当てられたユーザーのみです。

- 国際データの移行をサポート
- トラブルシューティングを容易にするためのエラーの記録



注:

ライフサイクル管理ユーティリティの要件は、[17ページのライフサイクル管理の要件](#)を参照してください。

ライフサイクル管理ユーティリティのインストール

ライフサイクル管理ユーティリティはShared Servicesのインストール時にインストールされます。Shared Servicesのインストールとアプリケーション・サーバーへのデプロイについては、『*Oracle Enterprise Performance Management System*インストールおよび構成ガイド』を参照してください。

ライフサイクル管理ユーティリティのコンポーネントはEPM_ORACLE_HOME/common/utilities/LCM/11.1.2.0にインストールされます。コンポーネントはここにインストールされますが、ユーティリティはMIDDLEWARE_HOME/user_projects/epmsystem1/binから実行する必要があります。

移行定義の使用

サブトピック

- [移行定義の作成](#)
- [移行定義ファイルのXMLスキーマ](#)
- [移行定義ファイルの要素](#)
- [サンプルの移行定義ファイル](#)

移行定義の作成

移行するアーティファクトは、移行定義で定義されている必要があります。移行定義について次のことに注意してください:

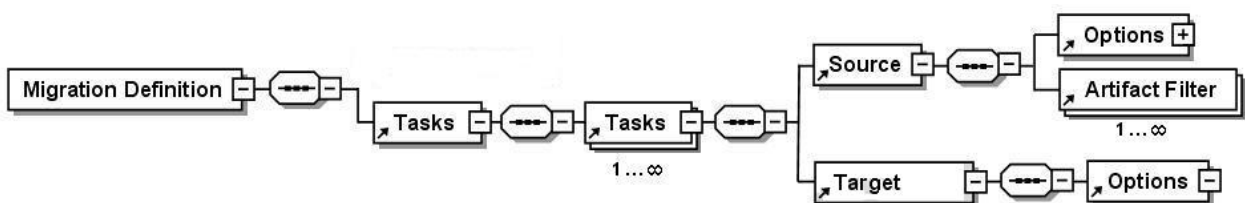
- インポート操作またはエクスポートの実行時に、移行定義がShared Services Consoleで作成されます。
- アーティファクトをエクスポートすると、ライフサイクル管理によって、エクスポート用とインポート用の2つのXMLファイルが作成されます。これらのXMLファイルは、ライフサイクル管理ユーティリティの移行定義ファイルに使用できます。
- エクスポート操作を実行するときに、そのエクスポートおよび対応するインポート用のMDFファイルが、ルート・フォルダの下のファイル・システム・フォルダに自動的に作成されます。

移行定義ファイルのXMLスキーマ

移行定義のひな型となるサンプル・ファイルはEPM_ORACLE_HOME/common/utilities/LCM/11.1.2.0/Sampleにあります。

74ページの図 5で、移行定義のXMLスキーマのアウトラインを説明しています。

図5 移行定義ファイルのXMLスキーマのアウトライン



移行定義ファイルの要素

サブトピック

- [ロケール](#)
- [ユーザーおよびパスワード](#)
- [タスク](#)

ここでは、移行定義ファイルのXMLスキーマで使用される要素および属性について説明します。

ロケール

移行定義ファイルの作成時に、サーバーのロケールを定義します。このロケールには、すべてのエラー・メッセージとコンソール・メッセージが含まれます。

ユーザーおよびパスワード

移行定義ファイルを実行するユーザーのユーザー名と暗号化されたパスワードを定義します。

タスク

移行中に完了するタスクを定義します。移行定義ファイルに定義されているタスクは、ソース、宛先、移行するアーティファクトによって異なります。各タスクには、少なくともソース、宛先およびアーティファクト・タグが含まれます。

複数のソースと宛先がある場合は、ソースと宛先の組合せごとに少なくともタスクを1つずつ定義する必要があります。たとえば、ファイル・システムへのアーティファクトの抽出はタスク1として定義されます。ファイル・システムからアプリケーションへのアーティファクトのロードは、タスク2として定義されます。



注:

デフォルトでは、タスクが失敗しても、ライフサイクル管理ユーティリティは次のタスクを続行します。タスクのソースとターゲットの接続の検証は、タスクが実行されている場合にのみ行われ、タスクの実行開始前には行われません。

タスクには次の要素が含まれます:

- [76ページのソース](#)
- [77ページのターゲット](#)
- [78ページのアーティファクト](#)
- [78ページのオプション](#)

ソース

移行するソースを定義します。タスクごとにソースと宛先をそれぞれ1つずつ定義する必要があります。

表6 ソース属性

属性	説明
application	アプリケーションが登録される名前。アプリケーションの名前はShared Services Consoleに表示されます。 例: HAVAAPP1
filePath	アーティファクトが格納されるファイル・システム上のディレクトリ。 例: filePath="/Essbase.Sample.Basic" 注意: MDFファイルがUIから生成される場合、パスは作業フォルダへの相対パスです。mdfファイルが作業フォルダに存在しない場合、-bコマンドライン引数を使用して、ファイル・システム・パスが設定されている場所に相対するベース・パスを使用します。
product	Shared Servicesに登録するアプリケーションの製品コード。例: <ul style="list-style-type: none">• HUB (Shared Services)• CALC (Calculation Manager)• ESBAPP (Essbase)• BPM (Essbase Studio)

属性	説明
	<ul style="list-style-type: none"> • AIF (FDMEE) • HFM (Financial Management) • FCC (Financial Close Management) • BPMA (Performance Management Architect) • HP (Planning) • HPM (Profitability and Cost Management) • HAVA (Reporting and Analysis)
project	<p>アプリケーションが属するShared Servicesアプリケーション・グループの名前。プロジェクト名はShared Services Consoleに表示されます。</p> <p>例: DevBIPlus_Proj</p>
type	<p>接続タイプ:</p> <ul style="list-style-type: none"> • FileSystem(ファイル・システムの接続用) • Application(Shared Servicesで登録されているアプリケーションの接続用)

ターゲット

移行の宛先を定義します。タスクごとに1つの宛先を定義する必要があります。

表7 ターゲット属性

属性	説明
application	<p>アプリケーションが登録される名前。アプリケーションの名前はShared Services Consoleに表示されます。</p> <p>例: HAVAAPP1</p>
filePath	<p>アーティファクトが格納されるファイル・システム上のディレクトリ。</p> <p>例: filePath="/Essbase.Sample.Basic"</p> <p>注意: MDFファイルがUIから生成される場合、パスは作業フォルダへの相対パスです。MDFファイルが作業フォルダに存在しない場合、-bコマンドライン引数を使用して、ファイル・システム・パスが設定されている場所に相対するベース・パスを使用します。</p>
product	<p>Shared Servicesに登録するアプリケーションの製品コード。例:</p> <ul style="list-style-type: none"> • HUB (Shared Services) • HAVA (Reporting and Analysis) • ESBAPP (Essbase) • HFM (Financial Management) • HP (Planning) • BPMA (Performance Management Architect) • CALC (Calculation Manager) • HPM (Profitability and Cost Management)

属性	説明
project	アプリケーションが属するShared Servicesアプリケーション・グループの名前。プロジェクト名はShared Services Consoleに表示されます。 例: DevBIPlus_Proj

アーティファクト

現行の移行に使用されるフィルタです。

表8 アーティファクト属性

属性	説明
parentPath	移行するアーティファクトまたはデータが保管されている最上位のディレクトリ。製品ディレクトリ構造については、このガイドの巻末付録を参照してください。例: /Data Analysis & Report Creation 注意 親のパス・ディレクトリにアンパサンド(&)文字が含まれている場合は、移行定義ファイルでは&に置き換えます(次の例を参照)。 注: recursive="true"である場合は、このディレクトリ内のサブディレクトリに含まれているすべてのアーティファクトがインポートされます。 注: pattern属性は、すべての製品に必要です。
pattern	アーティファクトの選択基準。インポートするアーティファクトの名前を指定するか、* (アスタリスク)を使用してフィルタ条件に一致するすべてのアーティファクトをインポートします。例: * 注: pattern属性は、すべての製品に必要です。
recursive	サブディレクトリに保管されているアーティファクトで移行を行う必要があるかどうか。例: true 注: recursive属性はオプションです。

オプション

オプションは製品に固有です。設定可能なインポートとエクスポートのオプションについては、このガイドの巻末付録を参照してください。ソースまたは宛先でオプションを解釈することによって、移行対象のアーティファクトが把握されます。

オプションが設定されていない場合は、Shared Servicesレジストリに設定されているデフォルトのオプションが使用されます。

表9 オプション属性

属性	説明
option	Shared Servicesレジストリに定義されているオプション名のオーバーライドに使用する名前。 例: ExportJobOutput
value	Shared Servicesレジストリに定義されているオプション値のオーバーライドに使用する値。 例: true

サンプルの移行定義ファイル

次にサンプル移行定義ファイルを示します。構造または構文が変更されると、移行中にエラーが発生します。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<Package>
<LOCALE>en_US</LOCALE>
<User name="admin" password="" />
  <Task>
    <Source type="Application" product="HUB" project="Foundation"
application="Shared Services"/>
    <Target type="FileSystem" filePath="/folder/HUB.Shared Services" />
    <Options option="GroupFilter" Value= "*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Native Directory" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Taskflows" pattern="*" />
  </Task>
  <Task>
    <Source type="FileSystem" filePath="/folder/HUB.Shared Services" />
    <Target type="Application" product="HUB" project="Foundation"
application="Shared Services" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Native Directory" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Taskflows" pattern="*" />
  </Task>
</Package>
```

ライフサイクル管理ユーティリティの使用方法

サブトピック

- [概要](#)
- [移行を開始する前に](#)
- [ライフサイクル管理ユーティリティの実行](#)
- [Foundation Services以外のマシンからライフサイクル管理ユーティリティを実行](#)
- [コマンドライン引数](#)

概要

ライフサイクル管理ユーティリティには次のオプションがあります:

- ファイル・システムを対象としたアーティファクトの移行
- 最後のエクスポート時刻以降に変更されたアーティファクトのリスト
- エクスポートされたコンテンツで変更されたアーティファクトのリスト
- EPM System環境での変更内容のリスト



注:

移行時に発生するエラーは、`logging.xml`(`MIDDLEWARE_HOME/user_projects/epmsystem1/Config/FoundationServices`ディレクトリ内)および`log.directory`プロパティで定義されます。移行プロセス中に発生した問題は、エラー・ログをモニターして把握します。

移行を開始する前に

ライフサイクル管理ユーティリティを使用して移行を開始する前に、次を行います:

- Shared Servicesが実行していることを確認します。
- 宛先環境をバックアップします。
- 移行定義を作成します。
- オプション: 移行に使用するプロパティ・ファイルを変更します。

ライフサイクル管理ユーティリティの実行

▶ ライフサイクル管理ユーティリティを実行するには:

1. 移行する場合は、宛先環境をバックアップしてください。

『Oracle Enterprise Performance Management Systemバックアップおよびリカバリガイド』を参照してください。

2. コマンド・プロンプト・ウィンドウを開きます。
3. ディレクトリを`Utility.bat` (Windows)または`Utility.sh` (UNIX)の場所に変更します。たとえば、`MIDDLEWARE_HOME/user_projects/epmsystem1/bin`です。
4. コマンド・プロンプトで次のテキストを入力して、ライフサイクル管理ユーティリティを実行します。


```
Utility.bat c:/lcm/lcmdefinition.xml
```

c:/lcm/lcmdefinition.xmlは、移行定義ファイルがある場所です

Foundation Services以外のマシンからライフサイクル管理ユーティリティを実行

EPM Systemで、Oracle Hyperion Foundation Servicesが構成されているマシン以外で、ライフサイクル管理ユーティリティの移行を実行できるのは、EPM System製品が分散EPM System構成の一部として構成されているマシンのみです。ライフサイクル管理ユーティリティを使用した移行は、EPM System製品がインストールされていないスタンドアロンのクライアント・マシンからは実行できません。

- ▶ Foundation Services以外のマシンからライフサイクル管理ユーティリティを実行するには:
- 1. Utility.bat (Windows)またはUtility.sh (UNIX)をEPM_ORACLE_HOME/common/utilities/LCM/11.1.2.0/binからMIDDLEWARE_HOME/user_projects/epmsystem1/binにコピーします。
- 2. MIDDLEWARE_HOME/user_projects/epmsystem1/binに移動し、Utility.batまたはUtility.shを実行します。

コマンドライン引数

サブトピック

- [-b]: ベース・パスを指定します
- [-ls]: EPM Systemのコンテンツのリスト
- [-ls -ms]: 最終エクスポート時間以降に変更されたアーティファクトのリスト
- [-ls -lmu ユーザー名]: エクスポートされたコンテンツでユーザーによって変更されたアーティファクトのリスト

[-b]: ベース・パスを指定します

[-b]引数は、ファイル・システム・パスが設定されている場所に相対するベース・パスを使用するようライフサイクル管理ユーティリティに指示します(ファイル・システムは、すべてのエクスポートとインポートが保管される場所です)。

```
utility.bat c:/lcm/lcmdefinition.xml [-b path]
```

指定されるパスは、現在の作業ディレクトリに対する絶対パスまたは相対パスです(また、絶対パスに対して“.”および“..”も含まれます)。ベース・パスが指定されていない場合は、MDFファイルのディレクトリの場所が使用されます(このディレクトリは、ライフサイクル管理ユーティリティが存在するディレクトリとはかぎりません)。

次に例を示します:

```
utility.bat c:\import_export\HPFullApplicationSuite\Import.xml
```

```
utility.bat c:\import.xml -b c:\Oracle\Middleware\user_projects  
\epmsystem1\import_export\HPFullApplicationSuite
```



注:

指定されたパスが存在しない場合、ライフサイクル管理でエラーが表示されます。

次に、エクスポートされたzipコンテンツ内に存在するMDFファイルを指定する例を示します:

```
utility.bat c:\Oracle\Middleware\user_projects\epmsystem1\import_export\SS1.zip  
\Export.xml
```

```
utility.bat c:\Oracle\Middleware\user_projects\epmsystem1\import_export\SS1.zip\HSS-  
Shared Services\Import.xml
```

[-ls]: EPM Systemのコンテンツのリスト

[-ls]引数は、移行定義ファイルによって定義された移行のアーティファクトをリストします。ソース・システムとターゲット・システム両方のアーティファクトをリストします。たとえばエクスポートMDFでは、ソースがEPM Systemアプリケーションで、ターゲットがファイル・システムです。

Windows:

```
utility.bat importMDF.xml -ls
```

```
utility.bat exportMDF.xml -ls
```

UNIX:

```
utility.sh importMDF.xml -ls
```

```
utility.sh exportMDF.xml -ls
```

結果の出力は2つのファイルで、1つはソース、もう1つは宛先に関するものです:

- <mdf name>_application name.txt
- <mdf name>_file system folder name.txt

サード・パーティのファイル比較ユーティリティを使用して出力を比較できます。これにより、移行の成功を確認できます。

出力ファイルの詳細:

- アーティファクト名
- アーティファクト・タイプ
- パス
- コンテンツ・サマリーのサマリー

コンテンツ・サマリーの例:

```
                CONNECTION NAME = AppConnection2
CONNECTION TYPE = Application

APPLICATION RESOURCE DETAILS -
APPLICATION ID - 1111
PRODUCT NAME - Hyperion Shared Services
PRODUCT CODE - HUB
PRODUCT VERSION - 11.1.2.2
PROJECT NAME - Foundation

TOTAL ARTIFACT: 48
Aggregated Roles    1      (artifact count by type)
Assigned Roles     15
Groups              1
Process Definition 15
Taskflow ACL       15
Users               1
```

出力ファイルは、MDFファイルと同じパスに作成され、同じ名前の既存のファイルを置換します。出力ファイルのパスは次のように指定できます:

```
utility.sh c:\importMDF.xml -ls -p c:\compare\
```

複数のタスクがあるMDFの場合、タスクごとに異なるリスト構造セットが作成され、ファイルの先頭にタスク番号が付きます:

- <mdf name>_application name_<tasknumber>.txt
- <mdf name>_file system folder name_<tasknumber>.txt

1. -ls -ms : 最後のエクスポート時刻以降に変更されたアーティファクトをリストする場合 2. -ls -lmu "ユーザー名" : エクスポートされたコンテンツでユーザーによって変更されたすべてのアーティファクトをリストする場合。

[-ls -ms]: 最終エクスポート時間以降に変更されたアーティファクトのリスト

[-ls -ms]引数は、移行定義ファイルによって定義された最終移行後にシステムで変更されたアーティファクトをリストします。これらのアーティファクトは、Shared Services Consoleにリストされます。

エクスポートMDFファイル(ソース = アプリケーション、ターゲット = ファイル・システム・コンテンツ)の場合、[-ls -ms]によって、最終変更日がファイル・システム・コンテンツのアーティファクトの日付と異なっているアプリケーション内のアーティファクトがリストされます。

インポートMDFファイル(ソース = ファイル・システム・コンテンツ、ターゲット = アプリケーション)では、[-ls -ms]によって、最終変更日がアプリケーションのアーティファクトの日付とファイル・システム内で異なっているアーティファクトがリストされます。



注:

アーティファクトの変更日を使用できない場合、そのアーティファクトはリストされます。

Windows:

```
utility.bat c:\exportMDF.xml -ls -ms
```

UNIX:

```
utility.sh /importMDF.xml -ls -ms
```

コンソールの出力フォーマット:

アーティファクト・タイプ アーティファクト 最終変更日

[-ls -lmu ユーザー名]: エクスポートされたコンテンツでユーザーによって変更されたアーティファクトのリスト

[-ls -lmu]引数は、特定のユーザーによって変更されたアーティファクトをリストします。

エクスポートMDFファイル(ソース = アプリケーション、ターゲット = ファイル・システム・コンテンツ)では、ライフサイクル管理ユーティリティによって、変更者名がファイル・システム・リストのアーティファクトと照合されます。

インポートMDFファイル(ソース = ファイル・システム・コンテンツ、ターゲット = アプリケーション)では、ライフサイクル管理ユーティリティによって、変更者名が製品リストのアーティファクトと照合されます。

Windows:

```
utility.bat c:\exportMDF.xml -ls -lmu "ユーザー"
```

UNIX:

```
utility.sh /importMDF.xml -ls -lmu "ユーザー"
```

コンソールの出力フォーマット:

アーティファクト・タイプ アーティファクト 変更者



注:

ユーザー名を指定しない場合、エラーが表示されます。ユーザー名は引用符で囲まれている必要があります。

追加のコマンドライン・ユーティリティ

サブトピック

- [アクティビティの変更レポート](#)
- [EPMExportAll](#)
- [EPMImportAll](#)

アクティビティの変更レポート

アクティビティの変更レポート・ユーティリティは、特定の期間または特定のアプリケーションについてEPM System環境で機能的に変更されたアーティファクトを追跡するレポートを生成します。

Windows:

```
acr.bat input.properties -<日数> -app<アプリケーション名>
```

UNIX:

```
acr.sh input.properties file -d<日数> -app<アプリケーション名>
```

パラメータ:

- **input.properties**: ユーザー名とパスワードを含むプロパティ・ファイル。**input.properties**の内容は次のとおりです:

```
User=admin  
Password=password
```

- **-d**: 日数。値は次のとおりです:

○-X = xより少ない日数

たとえば、-1では、最終日に変更されたアーティファクトのレポートが生成されます。

○+X = xより多い日数

たとえば、+3では、3日より前に変更されたアーティファクトのレポートが生成されます。

- **-app**: アプリケーション名

○アプリケーション表示名 = このアプリケーションのみ

○*またはALL = すべてのアプリケーション。

[-acr]コマンドからの出力は、**Reports**という名前のフォルダの、ライフサイクル管理のデフォルトのファイル・システムの場所に生成されます。レポート名のフォーマットは、acr_mm_dd_yyyy_hh_mm_ss.htmlです。



注:

Shared Services Consoleを使用してEPM System環境でアーティファクトの変更を追跡する方法の詳細は、[68ページのアーティファクトの変更レポート](#)を参照してください。

EPMExportAll

EPMExportAllユーティリティは、環境内のすべてのアプリケーションをクローニングします。

EPMExportAllを使用する場合は、次のことに注意してください:

- すべてのアプリケーションが、1つのフォルダにエクスポートされます。
- LCM対応のアプリケーションのみがエクスポートされます。
- 環境のバックアップまたはスナップショットとして使用するこのタスクは、自動化できます。

EPMExportAllでは、入力としてプロパティファイル(input.properties)を使用します。input.propertiesファイルには、ユーザー名とパスワードが含まれます。

例:

```
user=admin
password=
password
```

Windows:

```
epm_cloneexport.bat input.properties
```

UNIX:

```
epm_cloneexport.sh input.properties
```

epm_cloneexport.bat/shコマンドからの出力は、ライフサイクル管理のデフォルトのファイル・システムの場所に生成されます。エクスポートMDFファイルとともにEPM_CloneExportフォルダが作成されます。

EPMImportAll

EPMImportAllユーティリティは、EPMExportAllでクローニングされたすべてのアプリケーションを別の環境にインポートします。

EPMImportAllを使用する場合、次の点を考慮してください。

- EPMImportAllは、Planning、Financial ManagementおよびProfitability and Cost Managementのアプリケーションが存在しない環境でのみ実行できます。
- EPMExportAllフォルダ内のクローニングされたエクスポート・コンテンツを、ソース環境からターゲット環境の同じファイル・システム・フォルダの場所にコピーする必要があります。
- デフォルトでは、EPMImportAllは、EPMExportAllフォルダのimport.xmlを使用してインポートを実行します。

EPMImportAllでは、入力としてプロパティファイル(input.properties)を使用します。input.propertiesファイルには、ユーザー名とパスワードが含まれます。

例:

```
user=admin
password=
password
```

Windows:

```
epm_cloneimport.bat input.properties
```

UNIX:

```
epm_cloneimport.sh input.properties
```

epm_cloneimport.bat/shコマンドからの出力は、ライフサイクル管理のデフォルトのファイル・システムの場所に生成されます。インポートMDFファイルとともにEPM_CloneExportフォルダが作成されます。



デプロイメント・メタデー タとライフサイクル管理

この項の内容:

デプロイメント・メタデータのアーティファクトについて	89
デプロイメント・メタデータの役割の要件	90
デプロイメント・メタデータのエクスポートおよびインポートの前提条件	90
デプロイメント・メタデータのアーティファクト・リスト	90
デプロイメント・メタデータの移行に関する考慮事項	92
デプロイメント・メタデータのエクスポートおよびインポートのオプション	92
ライフサイクル管理のログ・ファイル	92

デプロイメント・メタデータのアーティファクトについて

デプロイメント・メタデータのアーティファクトには、デプロイメントの物理サーバー名と構成情報が含まれます。この情報は、ある環境から別の環境(たとえば、DevからTest)に移行しないでください。このデータを移行すると、宛先環境の構成情報が破損し、システムが使用できなくなります。デプロイメント・メタデータのアーティファクトのエクスポートおよびインポートの使用事例は、構成の変更をモニターするためのバージョン・コントロール・システムへの構成情報のアーカイブのみです。

ライフサイクル管理は、次のデプロイメント・メタデータのアーティファクト・タイプを編集する場合に使用できます:

- 登録: 任意の環境でアプリケーションの構成情報を編集できるようにする登録アーティファクト(たとえば、製品を非SSLからSSLに更新する場合は、登録インスタンス・ファイルでコールバックURLを編集する必要があります)。
- Shared Servicesレジストリ: Oracle Hyperion Shared Servicesレジストリのアーティファクトにより、レジストリのコンテンツを表示したり、レジストリ・データを編集が可能なファイル・システムにエクスポートして再びインポートしたりできます。



注意

ある環境から他の環境にデプロイメント・メタデータのアーティファクトを移行するのにライフサイクル管理を使用しないでください。ライフサイクル管理は、デプロイメント・メタデータのアーティファクトをファイル・システムにエクスポートする場合に使用します。エクスポート後にテキスト・エディタを使用してアーティファクトを編集したら、ライフサイクル管理を使用して編集済のアーティファクトをShared Servicesにインポートし直します。

デプロイメント・メタデータのアーティファクトについては、[90ページのデプロイメント・メタデータのアーティファクト・リスト](#)を参照してください。

デプロイメント・メタデータの役割の要件

デプロイメント・メタデータのライフサイクル管理の操作を行うユーザーには、次の役割が割り当てられている必要があります:

- LCM管理者
- Shared Services管理者

『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemユーザーおよび役割セキュリティガイド』を参照してください。

デプロイメント・メタデータのエクスポートおよびインポートの前提条件

- Shared ServicesおよびEPM System製品をインストールして構成し、これらが実行中であることを確認します。『Oracle Enterprise Performance Management Systemインストールおよび構成ガイド』を参照してください。
- ライフサイクル管理の操作を行っているユーザーに、LCM管理者およびShared Services管理者の役割が割り当てられていることを確認します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemユーザーおよび役割セキュリティガイド』を参照してください。

デプロイメント・メタデータのアーティファクト・リスト

サブトピック

- [登録アーティファクト・リストについて](#)
- [登録アーティファクト](#)
- [Shared Servicesレジストリのアーティファクト](#)

デプロイメント・メタデータのアーティファクトは、Shared Services Console内のFoundationアプリケーション・グループに一覧表示されます。デプロイメント・メタデータのアーティファクトを表示するユーザーには、次の役割が割り当てられている必要があります：

- LCM管理者
- Shared Services管理者



注：

Shared Services Consoleに表示されるアーティファクトは、実装ごとに異なります。

登録アーティファクト・リストについて

アーティファクト・リストについて次のことに注意してください：

- **アーティファクト - アーティファクト名**
- **説明 - アーティファクトの説明**
- **最終変更時間** - このパラメータがサポートされている場合は、アーティファクトがインポートされた時間を反映します。アーティファクトの中には、最終変更時間のパラメータをサポートしないものがあります。
- **最終変更ユーザー** - このパラメータがサポートされている場合は、アーティファクトを最後に変更したユーザーを反映します。アーティファクトの中には、最終変更ユーザーのパラメータをサポートしないものがあります。
- **ファイル・システムで編集可能** - 「はい」の場合、アーティファクトはテキスト・エディタを使用してファイル・システム上で編集できます。「いいえ」の場合、アーティファクトは製品内でのみ編集できます。
- **依存** - アーティファクトの依存関係を一覧表示します

登録アーティファクト

「登録」ディレクトリには、製品、アプリケーションおよびアプリケーション・グループのアーティファクトが含まれます。

表10 登録アーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
製品	EPM Systemでは、PlanningやEssbaseなどのア	はい	いいえ	はい - XML	なし

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
	アプリケーション・タイプ				
アプリケーション	Shared Servicesに登録されているEPM System製品のインスタンス	はい	いいえ	はい - XML	なし

Shared Servicesレジストリのアーティファクト

Shared Servicesレジストリ・ディレクトリには、Shared Servicesレジストリのプロパティと以前のリリースからの製品レジストリのアーティファクトが含まれます。

デプロイメント・メタデータの移行に関する考慮事項

- デプロイメント・メタデータの編集されたデータベース・パスワードをインポートする場合、プロパティ名の前に"ENCR"を付けてパスワードが暗号化された形式で格納されるようにします。

たとえば、`component.Properties`の対応する行を次のように編集します:

```
ENCR:key1=plaintext
```

- LCM管理者およびLCMデザイナーは、デプロイメント・メタデータ情報をエクスポートまたはインポートできません。

デプロイメント・メタデータのエクスポートおよびインポートのオプション

Shared Servicesレジストリのアーティファクトにはエクスポートまたはインポートのオプションはありません。デプロイメント・メタデータ・アーティファクトはすべて、ファイル・システムにエクスポート、またはファイル・システムからインポートする必要があります。デフォルトでは、デプロイメント・メタデータのアーティファクトは更新またはマージされません。

ライフサイクル管理のログ・ファイル

デプロイメント・メタデータのライフサイクル管理のログ・ファイルについては、『Oracle Enterprise Performance Management Systemインストールおよび構成トラブルシューティング・ガイド』に記載されています。



Calculation Manager とライフサイクル管理

この項の内容:

Calculation Managerのアーティファクトについて	93
Calculation Managerの役割の要件	93
Calculation Managerの移行の前提条件	94
Calculation Managerのアーティファクト・リスト	94
Calculation Managerアプリケーションの移行および製品間のアーティファクトの依存関係	97
移行におけるエクスポートとインポートのオプション	97
サンプルの移行定義ファイル	97
ライフサイクル管理のログ・ファイル	98

Calculation Managerのアーティファクトについて

ライフサイクル管理は、次のCalculation Managerのアーティファクト・タイプを移行する場合に使用します:

- ルール
- ルール・セット
- 式
- スクリプト
- テンプレート

Calculation Managerのアーティファクトについては、[94ページのCalculation Managerのアーティファクト・リスト](#)を参照してください。

Calculation Managerの役割の要件

Calculation Managerのライフサイクル管理の操作を行うユーザーには、次の役割が割り当てられている必要があります:

- LCM管理者
- Calculation Manager管理者
- アプリケーション・レベルの役割

『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。

Calculation Managerの移行の前提条件

- Shared ServicesおよびCalculation Managerをインストールして構成し、これらが実行中であることを確認します。『Oracle Enterprise Performance Management Systemインストールおよび構成ガイド』を参照してください。
- ライフサイクル管理の操作を行っているユーザーにLCM管理者の役割、Calculation Manager管理者の役割およびアプリケーション・レベルの役割が割り当てられていることを確認します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemユーザーおよび役割セキュリティガイド』を参照してください。
- 製品固有のアーティファクトを移行する前に、Shared Servicesのネイティブ・ディレクトリ(ユーザー、グループおよびプロビジョニング)を移行します。60ページのネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)の移行を参照してください。Shared Servicesネイティブ・ディレクトリのアーティファクト・リストについては、211ページの付録L「Shared Servicesとライフサイクル管理」を参照してください。
- Financial Management Performance Management ArchitectまたはPlanning Performance Management Architectアプリケーションのビュー(およびプラン・タイプ)を移行し、アプリケーション名がソースのアプリケーション名と同じであることを確認します。Performance Management Architectのアーティファクトの詳細は、151ページの付録H「Performance Management Architectとライフサイクル管理」を参照してください。
- Planning、Financial ManagementおよびEssbaseアプリケーションは、そのアーティファクトをCalculation Managerにインポートする前に、ソースでの名前と同じ名前で作成される必要があります。

Calculation Managerのアーティファクト・リスト

サブトピック

- [アーティファクト・リストについて](#)
- [ルールのアーティファクト](#)
- [ルール・セットのアーティファクト](#)
- [式 of アーティファクト](#)
- [スクリプトのアーティファクト](#)
- [テンプレートのアーティファクト](#)

Calculation Managerアーティファクトは、Shared Services Console内のFoundationアプリケーション・グループの「Calculation Manager」ノードにリストされます。

アーティファクト・リストについて

アーティファクト・リストについて次のことに注意してください:

- **アーティファクト** - アーティファクト名
- **説明** - アーティファクトの説明
- **最終変更時間** - このパラメータがサポートされている場合は、アーティファクトがインポートされた時間を反映します。アーティファクトの中には、最終変更時間のパラメータをサポートしないものがあります。
- **最終変更ユーザー** - このパラメータがサポートされている場合は、アーティファクトを最後に変更したユーザーを反映します。アーティファクトの中には、最終変更ユーザーのパラメータをサポートしないものがあります。
- **ファイル・システムで編集可能** - 「はい」の場合、アーティファクトはテキスト・エディタを使用してファイル・システム上で編集できます。「いいえ」の場合、アーティファクトは製品内でのみ編集できます。
- **依存** - アーティファクトの依存関係を一覧表示します

ルールのアーティファクト

表11 ルールのアーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
ルール	コンポーネントでグループ化されたテンプレートと計算を含めることのできるオブジェクト	はい	はい	はい - XML	なし

ルール・セットのアーティファクト

表12 ルール・セットのアーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
ルール・セット	同時または連続の計算が可能なルールおよびその他のルール・セットを含むオブジェクト	はい	はい	はい - XML	なし

式のアーティファクト

表13 式のアーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
式	ビジネス・ルールおよびテンプレート内で使用でき、メンバー、関数および条件文(オプション)を使用してユーザーが記述または設計できる計算文を含むコンポーネント	はい	はい	はい - XML	なし

スクリプトのアーティファクト

表14 スクリプトのアーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
スクリプト	ビジネス・ルールおよびテンプレート内で使用でき、Visual Basic(Financial Managementの場合)またはEssbase(PlanningおよびEssbaseの場合)の計算スクリプト	はい	はい	はい - XML	なし

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
	リプト文のみを含むコンポーネント				

テンプレートのアーティファクト

表15 テンプレートのアーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
テンプレート	1回または複数回の計算を実行する、ユーザーが作成したコンポーネント	はい	はい	はい - XML	なし

Calculation Managerアプリケーションの移行および製品間のアーティファクトの依存関係

Calculation Managerアプリケーションをある環境から他の環境(開発からテストまたはテストから本番環境)に移行する場合は、製品間のアーティファクトの依存関係が存在します。

Calculation Managerには、Calculation Manager固有のアーティファクトに加え、次に示す、移行する他の製品からのアーティファクトも必要です。

- Performance Management Architect
- Shared Servicesのネイティブ・ディレクトリ(ユーザー、グループおよびプロビジョニング)
- Essbase
- クラシックPlanning
- クラシックFinancial Management

移行におけるエクスポートとインポートのオプション

インポート時に、Calculation Managerアーティファクトは、宛先環境で既存のアーティファクトを置換します。アーティファクトをマージするオプションはありません。

Calculation Managerには、製品固有のエクスポート・オプションおよびインポート・オプションはありません。

サンプルの移行定義ファイル

Calculation Managerの移行定義ファイルで使用される製品コードはCALCです。



注:

移行定義ファイルで正しい構文が使用されていない場合、「MDFファイルのフォーマットが正しくありません」というエラーが表示されます。

ファイル・システムへのエクスポート

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
<Package>
  <LOCALE>en_US</LOCALE>
  <User name="" password="" />
  <Task>
    <Source type="Application" product="CALC" project="Foundation"
application="Calculation Manager" />
    <Target type="FileSystem" filePath="/CALC-Calculation Manager" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Consolidation" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Essbase" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Planning" pattern="*" />
  ...</Task>
</Package>
```

ファイル・システムからのインポート

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
<Package>
  <LOCALE>en_US</LOCALE>
  <User name="" password="" />
  <Task>
    <Source type="FileSystem" filePath="/CALC-Calculation Manager" />
    <Target type="Application" product="CALC" project="Foundation"
application="Calculation Manager" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Consolidation" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Essbase" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Planning" pattern="*" />
  ...</Task>
</Package>
```

ライフサイクル管理のログ・ファイル

Calculation Managerのライフサイクル管理のログ・ファイルについては、『Oracle Enterprise Performance Management Systemインストールおよび構成トラブルシューティング・ガイド』に記載されています。



Essbaseとライフサイクル管理

この項の内容:

Essbaseアーティファクトについて	99
Essbaseの役割の要件	100
Essbaseの移行の前提条件	100
Essbaseのアーティファクト・リスト	100
Essbaseの移行に関する考慮事項	105
Essbaseアプリケーションの移行と製品間アーティファクトの依存関係	106
移行におけるエクスポートとインポートのオプション	106
サンプルの移行定義ファイル	107
ライフサイクル管理のログ・ファイル	108

Essbaseアーティファクトについて

次のタイプのEssbaseアーティファクトを移行するには、ライフサイクル管理を使用します:

- 計算スクリプト
- カスタム定義マクロおよび関数
- データ
- データベース・プロパティ
- データベース・アウトライン
- ディスク・ボリューム
- ドリルスルー定義
- Excelファイル
- ロケーション別名
- レポート・スクリプト
- 規則ファイル
- セキュリティ・フィルタ
- 代替変数
- テーブルスペース
- テキスト・ファイル

Essbaseアーティファクトのリストおよび説明については、[100ページのEssbaseのアーティファクト・リスト](#)を参照してください。

Essbaseの役割の要件

Essbaseのライフサイクル管理の操作を行うユーザーには、次の役割が割り当てられている必要があります:

- LCM管理者
- サーバー・アクセス
- 計算
- データベース・マネージャ



注:

Essbaseのサーバー・レベルでは、サーバー・アクセスの役割が必要になります。アプリケーション・レベルでは、ソース・アプリケーション・アーティファクトをエクスポートするために計算の役割が必要で、宛先のアプリケーションにインポートするためにデータベース・マネージャの役割が必要になります。

『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。

Essbaseの移行の前提条件

- Shared ServicesとEssbaseをインストールして構成し、これらが実行されていることを確認します。『Oracle Enterprise Performance Management Systemインストールおよび構成ガイド』を参照してください。
- ライフサイクル管理の操作を行っているユーザーに、LCM管理者、サーバー・アクセス、計算およびデータベース・マネージャの役割が割り当てられていることを確認します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。
- Essbaseクラシック・アプリケーションの場合は、セキュリティ・フィルタを移行する前に、Shared Servicesネイティブ・ディレクトリ(ユーザー、グループ、およびプロビジョニング)を移行する必要があります。60ページの[ネイティブ・ディレクトリ\(セキュリティ\)の移行](#)を参照してください。Shared Servicesネイティブ・ディレクトリのアーティファクト・リストについては、211ページの[付録L「Shared Servicesとライフサイクル管理」](#)を参照してください。



注:

PlanningまたはEssbaseのライフサイクル管理を使用するには、Essbaseで従来のセキュリティ・モードではなく、Shared Servicesネイティブ・ディレクトリを使用する必要があります。

- Essbaseデータをエクスポートする前に、エクスポート・プロセスが完了するまで更新できないようにするため、データベースが読み取り専用モードに設定されていることを確認します。
- データ・アーティファクトをエクスポートする前に、必ずデータベースにデータをロードしてください。それ以外の場合、アーティファクトに値がないため、データの移行が失敗します。

Essbaseのアーティファクト・リスト

サブトピック

- [アーティファクト・リストについて](#)
- [Essbase Serverアーティファクト](#)
- [Essbaseアプリケーション・アーティファクト](#)
- [Essbaseデータベース・アーティファクト](#)

Essbaseアーティファクト・リストはShared Services ConsoleのEssbaseアプリケーション・グループにリストされます。



注:

Shared Services Consoleに表示されるアーティファクトは、実装ごとに異なります。

アーティファクト・リストについて

アーティファクト・リストについて次のことに注意してください:

- **アーティファクト** - アーティファクト名
- **説明** - アーティファクトの説明
- **最終変更時間** - このパラメータがサポートされている場合は、アーティファクトがインポートされた時間を反映します。アーティファクトの中には、最終変更時間のパラメータをサポートしないものがあります。
- **最終変更ユーザー** - このパラメータがサポートされている場合は、アーティファクトを最後に変更したユーザーを反映します。アーティファクトの中には、最終変更ユーザーのパラメータをサポートしないものがあります。
- **ファイル・システムで編集可能** - 「はい」の場合、アーティファクトはテキスト・エディタを使用してファイル・システム上で編集できます。「いいえ」の場合、アーティファクトは製品内でのみ編集できます。
- **依存** - アーティファクトの依存関係を一覧表示します。たとえば、Essbaseのセキュリティ・フィルタ・アーティファクトを移行する場合は、Shared Servicesのセキュリティ・アーティファクトも移行する必要があります。

Essbase Serverアーティファクト

Essbase Serverディレクトリには、代替変数アーティファクトが含まれています。

表16 Essbase Serverアーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
カスタム定義マクロおよび関数	計算関数	いいえ	いいえ	はい - XML	なし

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
代替変数	定期的に変更される情報のグローバル・プレースホルダ	いいえ	いいえ	はい - XML	なし

Essbaseアプリケーション・アーティファクト

各アプリケーション・ディレクトリ(Demoなど)には、アプリケーション固有の代替変数アーティファクトが含まれています。

表17 Essbaseアプリケーション・アーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
カスタム定義マクロおよび関数	計算関数	いいえ	いいえ	はい - XML	なし
代替変数	定期的に変更される情報のグローバル・プレースホルダ	いいえ	いいえ	はい - XML	なし
テーブルスペース *ASOアプリケーションにのみ適用可能 **エクスポートおよびインポートは、同じ動作環境内でのみサポートされます。たとえば、Windows環境からエクスポートする場合、Windows環境にインポートする必要があります。UNIX環境からエクスポートする場合、UNIX環境にインポートする必要があります。	データ・ストレージの最適化	いいえ	いいえ	はい - XML	なし

Essbaseデータベース・アーティファクト

各Essbaseアプリケーションには、1つ以上のデータベース・ディレクトリ(Sample.Basicなど)があります。これらのディレクトリには、データベース固有のアーティファクトが含まれています。

表18 Essbaseデータベース・アーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
計算スクリプト	データベースの集計方法や集約方法を定義する一連のコマンドです。集計プロセスとは別に、割当てや他の計算ルールを指定するコマンドが計算スクリプトに含まれることもあります。	はい	いいえ	はい - テキスト	なし
データ	入力メンバー・レベルに存在する場合、および親レベルで集約/集計されている場合のすべての保管済データ(たとえば、保管済データ、動的計算および保管)	いいえ	いいえ	はい - テキスト	データベース・アウトライン
データベース・プロパティ	bufferSize、dataCacheSetting、dataFileCacheSetting、IndexCacheSetting、sortBufferSizeなどのプロパティ。				なし
データベース・アウトライン	キューブのアウトライン・ファイル	はい	いいえ	いいえ	なし
ディスク・ボリューム	データ・ストレージの割当て *BSOアプリケーションにのみ適用可能 **エクスポートおよびインポートは、同じ動作環境内でのみサポートされます。たとえば、Windows環境からエクスポートする場合、Windows環境にインポートする必要があります。UNIX環境からエクスポートする場合、UNIX環境にインポートする必要があります。	いいえ	いいえ	はい - XML	なし

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
ドリルスルー定義	Oracle Hyperion Financial Data Quality ManagementおよびFDMEE情報	いいえ	いいえ	はい - XML	なし
Excelファイル	Essbaseのセルに関連付けられる外部スプレッドシート・ファイル	はい	いいえ	はい - テキスト、XML	なし
ロケーション別名	データ・ソースを特定する記述子です。ロケーション別名により、サーバー、アプリケーション、データベース、ユーザー名、およびパスワードが指定されます。ロケーション別名は、DBAのデータベース・レベルでOracle Essbase Administration Services、ESSCMD、またはAPIを使用して設定されます。	いいえ	いいえ	はい - XML	なし
レポート・スクリプト	プロダクション・レポートを生成する、Essbaseレポート・ライター・コマンドを格納したテキスト・ファイル	はい	いいえ	はい - テキスト、XML	なし
規則ファイル	Essbaseがデータ・ソースを処理するときにデータ値またはディメンションとメンバー上で行う一連の操作	はい	いいえ	いいえ	なし

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
セキュリティ・フィルタ	データ値またはセルに対するセキュリティ・アクセスをコントロールする制限	いいえ	いいえ	はい - CSV	Shared Services セキュリティ・アーティファクト
代替変数	定期的に変更される情報のグローバル・プレースホルダ	いいえ	いいえ	はい - XML	なし
テキスト・ファイル	Essbaseキューブにデータをロードするためのテキスト・ファイル	はい	いいえ	はい - テキスト	なし

Essbaseの移行に関する考慮事項

- MaxLスクリプト*.mxl、MaxL*.mshおよびMDXスクリプト*.mdxなどの特定のテキスト・ファイルは、ライフサイクル管理を使用して移行できません。
- トリガーはライフサイクル管理を使用して移行できません。かわりにMaxLを使用して移行できます。
- パーティション定義はライフサイクル管理を使用して移行できません。かわりにMaxLを使用して移行できます。
- カスタム定義マクロおよび関数はライフサイクル管理を使用して移行できません。かわりにMaxLを使用して移行できます。
- ライフサイクル管理では、移行する際に宛先で新しいデータベースを作成する必要がないかぎり、BSOアーティファクトからASOアプリケーションへの移行およびASOアプリケーション・アーティファクトからBSOデータベースへの移行は抑制されません。アウトラインにはこの制限があります。したがって、アウトラインに依存するデータ移行も移行できません。
- Oracle Essbase Spreadsheet Add-inでは、サーバー・レベルの代替変数がサポートされています。
- Essbase用のライフサイクル管理を使用するには、EssbaseがShared Servicesモードになっている必要があります。

Essbaseでは、宛先アプリケーションに関して次の点を考慮する必要があります。

- Administration Servicesでアプリケーションを事前に定義することも、import.xmlファイルでアプリケーション名を指定して、CLUから移行を実行することも可能です。
- データベースが存在しない場合、自動的に作成されます
- データ・ソースと宛先の名前が同じである必要があります。
- キューブが存在せず自動的に作成される場合は、上書きフラグが選択されていなくても、アウトラインは強制的に上書きされます。
- 空のアウトラインが存在する場合は、計算スクリプト・ディレクトリの下にあるアーティファクトのリストには、「デフォルトの計算」アーティファクトは表示されません。

- Essbaseがターゲット環境にない場合、ライフサイクル管理によってアプリケーション・シェルが作成されます。

Essbaseアプリケーションの移行と製品間アーティファクトの依存関係

Essbaseアプリケーションをある環境から他の環境(開発からテストまたはテストから本番環境)に移行する場合は、製品間のアーティファクトの依存関係が存在します。Essbaseでは、Essbase固有のアーティファクトとともに、他の製品からアーティファクトを移行する必要があります。

- Essbaseクラシック製品間アーティファクト
 - Shared Servicesセキュリティ(ユーザー、グループ、およびプロビジョニング)
 - オプション: Reporting and Analysis (Financial Reporting、Web Analysis、およびInteractive Reporting)
- Essbase Performance Management Architectの製品間アーティファクトには、次があります。
 - Performance Management Architect
 - Shared Servicesセキュリティ(ユーザー、グループ、およびプロビジョニング)
 - オプション: Reporting and Analysis (Financial Reporting、Web Analysis、およびInteractive Reporting)

移行におけるエクスポートとインポートのオプション

サブトピック

- ・ [移行のエクスポート・オプション](#)
- ・ [移行のインポート・オプション](#)

移行のエクスポート・オプション

Essbaseには、製品固有のエクスポート・オプションはありません。

移行のインポート・オプション

インポート時に、Essbaseアーティファクトは、宛先環境で既存のアーティファクトを置換します。アーティファクトをマージするオプションはありません。

Essbaseには、次のインポート・オプションがあります：

- ・ 「**アーティファクトを上書き**」：宛先の場所にあるすべてのアーティファクトを上書きします。
- ・ 「**キューブを再構築**」：次のオプションから選択します。
 - 「**キューブ・データを保持**」 - キューブのアウトラインを再構築するときにキューブのデータを保持します。
 - 「**キューブ・データを破棄**」 - キューブのアウトラインを再構築するときにキューブのデータを破棄します。
 - 「**入力データのみ保持**」 - キューブのアウトラインを再構築するときに入力データのみを保持します。
 - 「**レベル0データのみ保持**」 - キューブのアウトラインを再構築するときにレベル0のデータのみを保持します。



注：

エクスポートおよびインポートのオプションにアクセスするには、Shared Services Consoleを起動し、「**管理**」、**移行オプション**を選択します。

サンプルの移行定義ファイル

Essbaseの移行定義ファイルに使用される製品コードは、ESBAPPです。



注：

移行定義ファイルで正しい構文が使用されていない場合、「**MDFファイルのフォーマットが正しくありません**」というエラーが表示されます。

ファイル・システムへのエクスポート

```
<xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
<Package>
  <LOCALE>en_US</LOCALE>
  <User name="" password="" />
  <Task>
    <Source type="Application" product="ESBAPP" project="EssbaseCluster-1"
application="Sample" />
    <Target type="FileSystem" filePath="/ESB-Sample" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Configuration" pattern="" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Databases" pattern="" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Substitution Variables" pattern="" />
  </Task>
</Package>
```

ファイル・システムからのインポート

```
<xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
<Package>
  <LOCALE>en_US</LOCALE>
  <User name="" password="" />
  <Task>
    <Source type="FileSystem" filePath="/ESB-Sample" />
    <Target type="Application" product="ESBAPP" project="EssbaseCluster-1"
application="Sample" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Configuration" pattern="" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Databases" pattern="" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Substitution Variables" pattern="" />
  </Task>
</Package>
```

ライフサイクル管理のログ・ファイル

Essbaseのライフサイクル管理のログ・ファイルについては、『*Oracle Enterprise Performance Management System*インストールおよび構成トラブルシューティング・ガイド』に記載されています。



Essbase Studioと ライフサイクル管理

この項の内容:

Essbase Studioアーティファクトについて	109
Essbase Studioの役割の要件	109
Essbase Studioの移行の前提条件	109
Essbase Studioのアーティファクト・リスト	110
Essbase Studioの移行に関する考慮事項	111
Essbase Studioアプリケーションの移行と製品間アーティファクトの依存関係	112
移行におけるエクスポートとインポートのオプション	112
サンプルの移行定義ファイル	113
ライフサイクル管理のログ・ファイル	114

Essbase Studioアーティファクトについて

Essbase Studioカタログ・アーティファクトを移行するには、ライフサイクル管理を使用します。カタログ・アーティファクトには、ディメンションナリティ、階層、データ・ソース、フォルダ、およびEssbase Studio内のすべてのアーティファクトが含まれます。カタログ・アーティファクトはShared Services Consoleのリポジトリ・フォルダの下に一覧表示されます。111ページのEssbase Studioアーティファクトを参照してください。

Essbase Studioの役割の要件

Essbase Studioのライフサイクル管理の操作を行うユーザーには、次の役割が割り当てられている必要があります。

- LCM管理者
- Essbase Studio管理者

『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemユーザーおよび役割セキュリティガイド』を参照してください。

Essbase Studioの移行の前提条件

- Shared ServicesとEssbase Studioをインストールして構成し、これらが実行されていることを確認します。『Oracle Enterprise Performance Management Systemインストールおよび構成ガイド』を参照してください。

- ライフサイクル管理の操作を行っているユーザーに、LCM管理者およびEssbase Studio管理者の役割が割り当てられていることを確認します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemユーザーおよび役割セキュリティガイド』を参照してください。
- Essbase Studio製品固有のアーティファクトを移行する前に、Shared Servicesネイティブ・ディレクトリ・アーティファクト(ユーザー、グループ、およびプロビジョニング)を移行します。60ページのネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)の移行を参照してください。Shared Servicesネイティブ・ディレクトリのアーティファクト・リストについては、211ページの付録L「Shared Servicesとライフサイクル管理」を参照してください。

Essbase Studioのアーティファクト・リスト

サブトピック

- [アーティファクト・リストについて](#)
- [Essbase Studioアーティファクト](#)



注:

Shared Services Consoleに表示されるアーティファクトは、実装ごとに異なります。

アーティファクト・リストについて

アーティファクト・リストについて次のことに注意してください:

- **アーティファクト** - アーティファクト名
- **説明** - アーティファクトの説明
- **最終変更時間** - このパラメータがサポートされている場合は、アーティファクトがインポートされた時間を反映します。アーティファクトの中には、最終変更時間のパラメータをサポートしないものがあります。
- **最終変更ユーザー** - このパラメータがサポートされている場合は、アーティファクトを最後に変更したユーザーを反映します。アーティファクトの中には、最終変更ユーザーのパラメータをサポートしないものがあります。
- **ファイル・システムで編集可能** - 「はい」の場合、アーティファクトはテキスト・エディタを使用してファイル・システム上で編集できます。「いいえ」の場合、アーティファクトは製品内でのみ編集できます。

Essbase Studioアーティファクト

Essbase Studioアーティファクトは、Shared Services Consoleのリポジトリ・フォルダの下の**カタログ**と呼ばれる1つのアーティファクトにパッケージ化されます。

表19 Essbase Studioアーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
カタログ	ディメンショナルリティ、階層、データ・ソース、フォルダ、およびEssbase Studio内のすべてのアーティファクトが含まれます。	はい	はい	いいえ	なし

Essbase Studioの移行に関する考慮事項

Essbase Studioの移行に関する特定の考慮事項はありません。

Essbase Studioアプリケーションの移行と製品間アーティファクトの依存関係

Essbase Studioには、Essbase Studioアーティファクトとともに移行されるShared Servicesセキュリティ(ユーザー、グループおよびプロビジョニング)が必要です。

移行におけるエクスポートとインポートのオプション

サブトピック

- [移行のエクスポート・オプション](#)
- [移行のインポート・オプション](#)

移行のエクスポート・オプション

Essbase Studioには、製品固有のエクスポート・オプションはありません。

移行のインポート・オプション

Essbase Studioには、次のインポート・オプションがあります。

インポート・モード

- **置換:** 要素がカタログ・データベースにすでに存在する場合は、カタログ・ファイルの新しい要素で上書きされます。
- **マージ:** 要素がカタログ・データベースにすでに存在する場合は、その要素が保持され、XMLファイルの重複する要素は使用されません。XMLファイルを使用して、カタログ・データベースが作成されます。少なくとも1つのインポートされたオブジェクトがカタログに存在する場合、インポート・プロセスは終了します。
- **要素が存在する場合は中止:** XMLファイルを使用してカタログ・データベースが作成されます。少なくとも1つのインポートされたオブジェクトがカタログに存在する場合、インポート・プロセスは終了します。



注:

エクスポートおよびインポートのオプションにアクセスするには、Shared Services Consoleを起動し、「管理」、移行オプションを選択します。

サンプルの移行定義ファイル

Essbase Studioの移行定義ファイルに使用される製品コードは、BPMです。



注:

移行定義ファイルで正しい構文が使用されていない場合、「MDFファイルのフォーマットが正しくありません」というエラーが表示されます。

ファイル・システムへのエクスポート

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
```

```
<Package>
  <LOCALE>en_US</LOCALE>
  <User name="" password=""/>
  <Task>
    <Source type="Application" product="BPM" project="Essbase Studio Server 11.1.2 Servers" application="Essbase Studio Server1"/>
    <Target type="FileSystem" filePath="/BPM-Essbase Studio Server1"/>
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Repository" pattern="*" />>
  </Task>
</Package>
```

ファイル・システムからのインポート

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<Package>
  <LOCALE>en_US</LOCALE>
  <User name="" password=""/>
  <Task>
    <Source type="FileSystem" filePath="/BPM-Essbase Studio Server1"/>
    <Target type="Application" product="BPM" project="Essbase Studio Server 11.1.2 Servers" application="Essbase Studio Server1"/>
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Repository" pattern="*" />
  </Task>
</Package>
```

ライフサイクル管理のログ・ファイル

Oracle Essbase Studioのライフサイクル管理のログ・ファイルについては、『*Oracle Enterprise Performance Management System*インストールおよび構成トラブルシューティング・ガイド』に記載されています。



FDMEEおよびライフサイクル管理

この項の内容:

FDMEEアーティファクトについて	115
FDMEEの役割の要件	116
FDMEEの移行の前提条件	116
FDMEEのアーティファクト・リスト	116
FDMEEの移行に関する考慮事項	121
FDMEEアプリケーションの移行と製品間アーティファクトの依存関係	122
移行におけるエクスポートとインポートのオプション	122
サンプルの移行定義ファイル	122
ライフサイクル管理のログ・ファイル	123

FDMEEアーティファクトについて

次のタイプのFDMEEアーティファクトを移行するには、ライフサイクル管理を使用します。

アプリケーション・データ・アーティファクト

- アプリケーション・カテゴリのマッピング
- アプリケーション定義
- アプリケーション期間マッピング
- バッチ定義
- エンティティ・グループのチェック
- ルール・グループのチェック
- データ・ロード・マッピング
- データ・ロード・ルール
- HRデータ・ロード・ルール
- インポート・フォーマット
- 場所
- 論理グループ
- メタデータ・ルール
- ライトバック・マッピング
- ライトバック・ルール

グローバル設定アーティファクト

- アプリケーション設定
- カテゴリ・マッピング
- 期間マッピング
- 問合せ定義
- レポート定義
- レポート・グループ
- セキュリティ設定
- ソース会計エンティティ
- ソース・アダプタ
- ソース期間マッピング
- システム設定
- ユーザー設定

これらのFDMEEアーティファクトの詳細は、[116ページのFDMEEのアーティファクト・リスト](#)を参照してください。

FDMEEの役割の要件

FDMEEのライフサイクル管理の操作を行うユーザーには、次の役割が割り当てられている必要があります。

- FDMEE管理者
- LCM管理者

『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemユーザーおよび役割セキュリティガイド』を参照してください。

FDMEEの移行の前提条件

- Shared ServicesとFDMEEをインストールして構成し、これらが実行されていることを確認します。『Oracle Enterprise Performance Management Systemインストールおよび構成ガイド』を参照してください。
- ライフサイクル管理の操作を行っているユーザーに、LCM管理者およびFDMEEアプリケーション管理者の役割が割り当てられていることを確認します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemユーザーおよび役割セキュリティガイド』を参照してください。
- FDMEE製品固有のアーティファクトを移行する前に、Shared Servicesのネイティブ・ディレクトリのアーティファクト(ユーザー、グループおよびプロビジョニング)を移行します。[60ページのネイティブ・ディレクトリ\(セキュリティ\)の移行](#)を参照してください。Shared Servicesネイティブ・ディレクトリのアーティファクト・リストについては、[211ページの付録L「Shared Servicesとライフサイクル管理」](#)を参照してください。
- FDMEE製品固有のアーティファクトを移行する前に、ターゲット環境のすべてのソース・システムの登録を手動で作成し、初期化します。

FDMEEのアーティファクト・リスト

サブトピック

- [アーティファクト・リストについて](#)
- [アプリケーション・データ・アーティファクト](#)
- [グローバル設定アーティファクト](#)

FDMEEのアーティファクトは、Shared Services ConsoleのFDMアプリケーション・グループのFDMEEノードにリストされています。



注:

Shared Services Consoleに表示されるアーティファクトは、実装ごとに異なります。

アーティファクト・リストについて

アーティファクト・リストについて次のことに注意してください:

- **アーティファクト - アーティファクト名**
- **説明** - アーティファクトの説明
- **最終変更時間** - このパラメータがサポートされている場合は、アーティファクトが最後に変更された時間を反映します。アーティファクトの中には、最終変更時間のパラメータをサポートしないものがあります。
- **最終変更ユーザー** - このパラメータがサポートされている場合は、アーティファクトを最後に変更したユーザーを反映します。アーティファクトの中には、最終変更ユーザーのパラメータをサポートしないものがあります。
- **ファイル・システムで編集可能** - 「はい」の場合、アーティファクトはテキスト・エディタを使用してファイル・システム上で編集できます。「いいえ」の場合、アーティファクトは製品内でのみ編集できます。
- **依存** - アーティファクトの依存関係を一覧表示します。たとえば、ユーザー・プリファレンス・アーティファクトを移行する場合は、ユーザー変数アーティファクトも移行する必要があります。

アプリケーション・データ・アーティファクト

アプリケーション・データ・ディレクトリには、連結アプリケーションとPlanningアプリケーションのアーティファクトが含まれます。

表20 アプリケーション・データ

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
アプリケーション・カテゴリのマッピング	ソース・システムのデータを分類し、アプリケーションごとの特定のターゲット・シナリオ・ディメンションにマッピングします。この	いいえ	いいえ	はい	アプリケーション定義、カテゴリ・マッピング

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
	マッピングにより、グローバル・カテゴリ・マッピングはオーバーライドされます。				
アプリケーション定義	ターゲット・アプリケーションの定義	いいえ	いいえ	はい	なし
アプリケーション期間マッピング	ソースFDMEESystemアプリケーション期間の間の期間マッピング。このマッピングにより、グローバル期間マッピングはオーバーライドされます。	いいえ	いいえ	はい	アプリケーション定義、期間マッピング
バッチ定義	FDMEEBatch処理の定義およびパラメータ	いいえ	いいえ	はい	データ・ロード・ルール、HRデータ・ロード・ルール、ライトバック・ルール、メタデータ・ルール
エンティティ・グループのチェック	場所ごとに検証レポートに表示されるターゲット・システム・エンティティを分類します	いいえ	いいえ	はい	アプリケーション定義
ルール・グループのチェック	検証レポート・プロセスの一部である詳細な検証ロジックを定義します	いいえ	いいえ	はい	アプリケーション定義
データ・ロード・マッピング	単一ディメンション内のソース・ディメンション・メンバーとターゲット・ディメンション・メンバー間の関係	いいえ	いいえ	はい	場所
データ・ロード・ルール	FDMEESystemからデータを抽出するルール	いいえ	いいえ	はい	場所

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
HRデータ・ロード・ルール	Oracle Hyperion Public Sector Planning and Budgetingアプリケーションにデータおよびメタデータを移入するルール	いいえ	いいえ	はい	場所
インポート・フォーマット	ソースのセグメントまたはチャート・フィールドからターゲットのアプリケーション・ディメンションまたはフラット・ファイルのフィールドへのマッピング	いいえ	いいえ	はい	アプリケーション定義、ソース・アダプタ、ソース会計エンティティ
場所	ソース会計エンティティおよびターゲット・アプリケーションのマッピング	いいえ	いいえ	はい	インポート・フォーマット
論理グループ	ロジック勘定科目を分類します	いいえ	いいえ	はい	アプリケーション定義
メタデータ・ルール	ソース・システム・ディメンション・メンバーをターゲット EPM Systemアプリケーションにロードするルール	いいえ	いいえ	はい	場所
ライトバック・マッピング	ソースFDMEシステムへのライトバック中に、送信中のEPM Systemのディメンション・メンバーをソース・セグメント・メンバーで置き換えるためのマッピング	いいえ	いいえ	はい	場所
ライトバック・ルール	アプリケーションから一般会計インス	いいえ	いいえ	はい	場所

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
	タンスまたは元帳ソースに予算データを抽出するルール				

グローバル設定アーティファクト

グローバル設定ディレクトリには、ソース会計エンティティ、ソース期間マッピング、カテゴリ・マッピング、期間マッピングおよびソース・アダプタのアーティファクトが含まれます。

表21 グローバル設定アーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
アプリケーション設定	EPMアプリケーション・レベルで設定された構成設定	いいえ	いいえ	はい	アプリケーション定義
カテゴリ・マッピング	ソース・システムのデータをグローバルに分類し、特定のターゲットEPM Systemシナリオ・ディメンション・メンバーにマッピングします。	いいえ	いいえ	はい	なし
期間マッピング	ソースFDMEESystem期間と、ターゲットEPM Systemアプリケーション期間の間のグローバル期間マッピング	いいえ	いいえ	はい	なし
問合せ定義	FDMEEReportの問合せ定義。これらの問合せ定義エントリは、FDMEEに付属しているBI Publisherテンプレートにより使用されます	いいえ	いいえ	はい	なし

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
レポート定義	FDMEEReport・テンプレート。これらのテンプレートは、問合せ定義セクションに定義されている問合せを使用します。	いいえ	いいえ	はい	クエリ定義、レポート・グループ
レポート・グループ	レポートを分類し、ユーザー・インタフェース内のレポートのリストをフィルタします	いいえ	いいえ	はい	なし
セキュリティ設定	システム機能または場所ごとにセキュリティを定義します	いいえ	いいえ	はい	なし
ソース会計エンティティ	統合で使用されるソース元帳または事業部門	いいえ	いいえ	はい	なし
ソース・アダプタ	外部システムからデータをプルするアダプタ。	いいえ	いいえ	はい	なし
ソース期間マッピング	ソースFDMEEReportシステム期間と、ソース・システム別に編成されたターゲットEPM Systemアプリケーション期間の間の期間マッピング	いいえ	いいえ	はい	期間マッピング
システム設定	FDMEEReportに対してシステム・レベルで有効になっている構成設定	いいえ	いいえ	はい	なし
ユーザー設定	特定のユーザーに対して有効になっている構成設定	いいえ	いいえ	はい	なし

FDMEEReportの移行に関する考慮事項

- ソース・システムはソース・システムおよびFDMEEReportの両方で初期化される必要があります。

- ターゲット・アプリケーションは、それぞれのターゲット製品すべてに存在する必要があります。

FDMEEアプリケーションの移行と製品間アーティファクトの依存関係

FDMEEのアーティファクトをある環境から別の環境へ移行する場合(開発からテストまたはテストから本番環境)、FDMEEには、FDMEEに固有のアーティファクトとともに移行される他の製品からのアーティファクトが必要です。

FDMEEクラシック製品間アーティファクトには、Shared Servicesネイティブ・ディレクトリ(ユーザー、グループおよびプロビジョニング)が含まれます。

移行におけるエクスポートとインポートのオプション

インポート時に、FDMEEアーティファクトは、宛先環境での既存のアーティファクトを検証します。

FDMEEインポート・オプションは次のとおりです。

検証のスキップ — インポート中に宛先の場所でのターゲット・ディメンション・メンバーの検証をスキップします。



注:

エクスポートおよびインポートのオプションにアクセスするには、Shared Services Consoleを起動し、「管理」、移行オプションを選択します。

サンプルの移行定義ファイル

ここで提供されているサンプル移行定義ファイルは、FDMEEアプリケーションの移行用です。FDMEEの移行定義ファイルに使用される製品コードは、AIFです。



注:

移行定義ファイルで正しい構文が使用されていない場合、「MDFファイルのフォーマットが正しくありません」というエラーが表示されます。

ファイル・システムへのエクスポート

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
<Package>
  <LOCALE>en</LOCALE>
  <User name="" password="" />
  <Task>
    <Source type="Application" product="AIF" project="FDM" application="FDMEE" />
  </Task>
</Package>
```

```
<Target type="FileSystem" filePath="/FDME" />
<Artifact recursive="true" parentPath="/Global Setup Artifacts" pattern="*" />
</Task>
</Package>
```

ファイル・システムへのインポート

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
<Package>
  <LOCALE>en</LOCALE>
  <User name="" password="" />
  <Task>
    <Source type="FileSystem" filePath="/FDME" />
    <Target type="Application" product="AIF" project="FDM" application="FDME" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Global Setup Artifacts" pattern="*" />
  </Task>
</Package>
```

ライフサイクル管理のログ・ファイル

FDMEのライフサイクル管理のログ・ファイルについては、『*Oracle Enterprise Performance Management System*インストールおよび構成トラブルシューティング・ガイド』に記載されています。



Financial Close Management とライフサイクル管理

この項の内容:

Financial Close Managementアーティファクト	125
Financial Close Management役割の要件	126
Financial Close Management移行の前提条件	126
Financial Close Managementのアーティファクト・リスト	127
Financial Close Management移行の考慮事項	133
Financial Close Managementアプリケーションの移行と製品間アーティファクトの依存関係	133
移行におけるエクスポートとインポートのオプション	133
サンプルの移行定義ファイル	134
ライフサイクル管理のログ・ファイル	135

Financial Close Managementアーティファクト

次のタイプのFinancial Close Managementアーティファクトのリポジトリ・コンテンツを移行するには、ライフサイクル管理を使用します:

Close Managerアーティファクト

- ・ アラート・タイプ
- ・ カスタム属性
- ・ フィルタ
- ・ グローバル統合トークン
- ・ 統合アプリケーション
- ・ 統合タイプ
- ・ 期間
- ・ タスク・タイプ
- ・ テンプレート
- ・ ユーザー・プリファレンス
- ・ 年

Account Reconciliation Managerアーティファクト

- ・ 勘定科目タイプ

- 経過期間プロファイル
- 通貨
- カスタム属性
- カスタム通貨
- ダッシュボード定義
- フィルタ
- フォーマット
- 頻度
- グローバル統合トークン
- グローバル設定
- 期間
- パワー・ユーザーのセキュリティ
- プロセス
- プロファイル・セグメント
- プロファイル
- レート・タイプ
- リスク評価
- チーム
- ユーザー・プリファレンス

これらのアーティファクトの説明については、[127ページのFinancial Close Managementのアーティファクト・リスト](#)を参照してください。

Financial Close Management役割の要件

Financial Close Managementのライフサイクル管理の操作を行うユーザーには、次の役割が割り当てられている必要があります:

- FCM管理者
- LCM管理者

『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。

Financial Close Management移行の前提条件

- Shared ServicesとFinancial Close Managementをインストールおよび構成し、稼働していることを確認します。『Oracle Enterprise Performance Management Systemインストールおよび構成ガイド』を参照してください。
- ライフサイクル管理の操作を行っているユーザーに、LCM管理者およびFCM管理者の役割が割り当てられていることを確認します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。

- Financial Close Management製品に固有のアーティファクトを移行する前に、Shared Servicesネイティブ・ディレクトリのアーティファクト(ユーザー、グループ、およびプロビジョニング)を移行してください。60ページの[ネイティブ・ディレクトリ\(セキュリティ\)の移行](#)を参照してください。Shared Servicesネイティブ・ディレクトリのアーティファクト・リストについては、211ページの[付録L「Shared Servicesとライフサイクル管理」](#)を参照してください。
- Close Managerの場合、統合タイプを移行する前に、次のプログラムが稼働していることを確認します。
 - 移行されるシステムで自動化された統合タイプの外部非同期Webサービス
 - 管理サーバー
 - Oracle SOA Suiteサーバー
- Account Reconciliation Managerの場合、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Editionが稼働してデータが入力されている必要があります。
- Account Reconciliation Managerの場合、ユーザーや役割などのShared Servicesデータを、Account Reconciliation Managerデータのインポート前にインポートする必要があります。

Financial Close Managementのアーティファクト・リスト

サブトピック

- [アーティファクト・リストについて](#)
- [Close Managerアーティファクト](#)
- [Account Reconciliation Managerアーティファクト](#)

Financial Close Managementアーティファクトは、Shared Services ConsoleのFinancial Close Managementアプリケーション・グループにリストされます。



注:

Shared Services Consoleに表示されるアーティファクトは、実装ごとに異なります。

アーティファクト・リストについて

アーティファクト・リストについて次のことに注意してください:

- **アーティファクト** - アーティファクト名
- **説明** - アーティファクトの説明
- **最終変更時間** - このパラメータがサポートされている場合は、アーティファクトがインポートされた時間を反映します。アーティファクトの中には、最終変更時間のパラメータをサポートしないものがあります。
- **最終変更ユーザー** - このパラメータがサポートされている場合は、アーティファクトを最後に変更したユーザーを反映します。アーティファクトの中には、最終変更ユーザーのパラメータをサポートしないものがあります。
- **ファイル・システムで編集可能** - 「はい」の場合、アーティファクトはテキスト・エディタを使用してファイル・システム上で編集できます。「いいえ」の場合、アーティファクトは製品内でのみ編集できます。
- **依存** - アーティファクトの依存関係を一覧表示します。たとえば、Financial Close Management統合タイプのアーティファクトを移行する場合は、Financial Close Management統合アプリケーションのアーティファクトも移行する必要があります。

Close Managerアーティファクト

表22 Financial Close Management Close Managerアーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
アラート・タイプ	アラートをハードウェア障害、ソフトウェアの問題、システム障害などのタイプに分類します	はい	いいえ	はい - XML	なし
カスタム属性	テンプレート、スケジュール、タスク・	はい	いいえ	はい - XML	なし

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
	タイプおよびタスクを分類します				
フィルタ	リスト・ビュー、ダッシュボードおよびレポート・バイндаに表示されるレコードを制御します。	はい	いいえ	はい - XML	テンプレート
グローバル統合トークン	パラメータ化されたURLの作成を有効にします	はい	いいえ	はい - XML	カスタム属性 注: グローバル統合トークンはカスタム属性に依存している可能性があります、常にそうとはかぎりません。
統合アプリケーション	Financial Close Managementが統合される外部アプリケーションを表します	はい	いいえ	はい - XML	なし
統合タイプ	Financial Close Managementと統合されるアプリケーションによって提供されるサービスの定義。	はい	いいえ	はい - XML	統合アプリケーション
期間	月や四半期など、決算アクティビティが適用される期間を指定する階層ディメンション	はい	いいえ	はい - XML	なし
タスク・タイプ	データ入力やG/L抽出など、決算期間によく行われるタスクを識別し、分類します	はい	いいえ	はい - Zip 注意: アーティファクトは抽出される必要があり、圧縮されたコンテンツの形式は保持される必要があるため、編集は推奨されません。	期間、年、アラート・タイプ、カスタム属性、統合アプリケーション、統合タイプ

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
テンプレート	複数の決算期間で反復できるタスクのセット。管理者は、月次や四半期など、様々なタイプの決算期間のテンプレートを作成できます。	はい	いいえ	はい - Zip 注意: アーティファクトは抽出される必要があり、圧縮されたコンテンツの形式は保持される必要があるため、編集は推奨されません。	期間、年、アラート・タイプ、カスタム属性、統合アプリケーション、統合タイプ、タスク・タイプ
ユーザー・プリファレンス	Financial Close Managementアプリケーションに使用される、タイムゾーンに固有のプリファレンス	はい	いいえ	はい - XML	なし
年	2009、2010、FY09やFY10など、決算アクティビティが適用される年を指定するフラット・リスト。	はい	いいえ	はい - XML	なし

Account Reconciliation Managerアーティファクト

表23 Financial Close Management Account Reconciliation Managerアーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
勘定科目タイプ	階層構造に従って、プロファイルおよび調整を分類します	はい	いいえ	はい - XML	なし
経過期間プロファイル	経過期間バケットのコレクション	はい	いいえ	はい - XML	なし
通貨	一般的に受け入れられる換算の手段。Financial Close Managementは、ISOに準拠している通貨コードおよび記号などの通貨の詳細をシードします。	はい	いいえ	はい - XML	なし
カスタム属性	フィルタ処理や検索を容易にするために情報を分類します。カスタム属性は、テンプレート、スケジュール、タスク・タイプおよびタ	はい	いいえ	はい - XML	なし

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
	スクに割り当てられます。たとえば、特定のカスタム属性を持つタスクのみが含まれるように、タスク・リストをフィルタ処理できます。				
カスタム通貨	ISOに準拠していない通貨	はい	いいえ	はい - XML	なし
ダッシュボード定義	スケジュールおよびタスク・リストのビュー、詳細にドリルダウンできる概要	はい	いいえ	はい - XML	フィルタ、CSSユーザー、経過期間のプロファイル
フィルタ	リスト・ビュー、ダッシュボードおよびレポート・バイндаに表示されるレコードを制御します。	はい	いいえ	はい - XML	カスタム属性
フォーマット	調整の方法と、調整をレビュー用に送信する前に提供する必要がある情報を決定します	はい	いいえ	はい - Zip 注意: アーティファクトは抽出される必要があり、圧縮されたコンテンツの形式は保持される必要があるため、編集は推奨されません。	カスタム属性
頻度	調整を準備および更新する頻度。頻度は、システム設定で定義され、プロファイルと期間に関連付けられます。	はい	いいえ	はい - XML	なし
グローバル統合トークン	パラメータ化されたURLの作成を有効にします	はい	いいえ	はい - XML	カスタム属性 注: グローバル統合トークンはカスタム属性に依存している可能性があります、常にそうとはかぎりません。
グローバル設定	アップロード・ファイルの最大サイズ、データロード・コンテキ	はい	いいえ	はい - XML	なし

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
	ストおよび「期限までの日数」システム設定を含みます。これらの設定は、管理者によって確立され、Financial Close Managementユーザー・ベース全体に適用されます。				
期間	勘定科目調整が完了する時間の単位(2013年1月、2013年2月など)	はい	いいえ	はい - XML	頻度
パワー・ユーザーのセキュリティ	パワー・ユーザーによりアクセスされる勘定科目セグメントのセキュリティ・フィルタ	はい	いいえ	はい - XML	プロファイル・セグメント、CSSロール
プロセス	プロファイルを特定の調整プロセス(貸借対照表調整プロセスやローカルGAAP調整プロセスなど)に関連付けます	はい	いいえ	はい - XML	なし
プロファイル・セグメント	値のフィルタ処理およびレポートを容易にするための、セグメントに格納されたプロファイル勘定科目ID	はい	いいえ	はい - XML	なし
プロファイル	調整が発生する方法と時期を決定する構成設定が含まれます	はい	いいえ	はい - Zip 注意: アーティファクトは抽出される必要があり、圧縮されたコンテンツの形式は保持される必要があるため、編集は推奨されません。	カスタム属性、フォーマット、期間、勘定科目タイプ、レートタイプ、プロファイル・セグメント
レートタイプ	プロファイルまたは調整で使用するために、外国為替レートに関連付けられます	はい	いいえ	はい - XML	なし
リスク評価	リスク・レベルに従ったプロファイルと調整の分類を可能にします。リスク評価を使用して、レポート用の勘定科目を選択することや、策定者、頻度または他の属性を簡単に割り当てることができます。	はい	いいえ	はい - XML	なし

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
チーム	策定者、レビュー担当者、参照者、およびコメント作成者の役割を使用して定義およびプロビジョニングされます。次に、プロフィールまたは調整のこれらの役割を名前付きユーザーに割り当てる代わりに、役割がチームに割り当てられます。	はい	いいえ	はい - XML	なし
ユーザー・プリファレンス	Financial Close Managementアプリケーションに使用される、タイムゾーンに固有のプリファレンス	はい	いいえ	はい - XML	なし

Financial Close Management移行の考慮事項

- すべてのFinancial Close ManagementユーザーはShared Servicesの一部として移行されます。
- Close Managerで、次のアーティファクトは移行できません。
 - フィルタ
 - ユーザー・プリファレンス
 - スケジュール
 - アラート
- Account Reconciliation Managerで、次のアーティファクトは移行できません。
 - 調整
 - トランザクション
 - 通貨レート

Financial Close Managementアプリケーションの移行と製品間アーティファクトの依存関係

Financial Close Managementには、製品間アーティファクトの依存関係はありません。

移行におけるエクスポートとインポートのオプション

サブトピック

- [移行のエクスポート・オプション](#)
- [移行のインポート・オプション](#)

移行のエクスポート・オプション

Financial Close Managementには、製品固有のエクスポート・オプションはありません。

移行のインポート・オプション

Financial Close Managementには、次のインポート・オプションがあります：

インポート・モード

- **置換** - インポートしたアーティファクトで選択したアーティファクトを上書きします
- **すべて置換** - インポートしたアーティファクトで既存のアーティファクトをすべて上書きします



注：

エクスポートおよびインポートのオプションにアクセスするには、Shared Services Consoleを起動し、「管理」、移行オプションを選択します。

サンプルの移行定義ファイル

Financial Close Managementの移行定義ファイルで使用される製品コードはFCCです。



注：

移行定義ファイルで正しい構文が使用されていない場合、「MDFファイルのフォーマットが正しくありません」というエラーが表示されます。

ファイル・システムへのエクスポート

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
<Package>
  <LOCALE>en</LOCALE>
  <User name="" password="" />
  <Task>
    <Source type="Application" product="FCC" project="Financial Close"
application="Financial Close Management" />
    <Target type="FileSystem" filePath="/FCM-Financial Close Management" />
  </Task>
</Package>
```

```

<Artifact recursive="true" parentPath="/Alert Types" pattern="*" />
<Artifact recursive="true" parentPath="/Custom Attributes" pattern="*" />
<Artifact recursive="true" parentPath="/Integration Applications" pattern="*" />
<Artifact recursive="true" parentPath="/Integration Types" pattern="*" />
<Artifact recursive="true" parentPath="/Periods" pattern="*" />
<Artifact recursive="true" parentPath="/Task Types" pattern="*" />
<Artifact recursive="true" parentPath="/Templates" pattern="*" />
<Artifact recursive="true" parentPath="/Years" pattern="*" />
</Task>
</Package>

```

ファイル・システムからのインポート

```

<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
<Package>
  <LOCALE>en</LOCALE>
  <User name="" password="" />
  <Task>
    <Source type="FileSystem" filePath="/FCM-Financial Close Management" />
    <Target type="Application" product="FCC" project="Financial Close"
application="Financial Close Management" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Alert Types" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Custom Attributes" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Integration Applications" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Integration Types" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Periods" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Task Types" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Templates" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Years" pattern="*" />
  </Task>
</Package>

```

ライフサイクル管理のログ・ファイル

Oracle Hyperion Financial Close Managementのライフサイクル管理のログ・ファイルについては、『Oracle Enterprise Performance Management Systemインストールおよび構成トラブルシューティング・ガイド』に記載されています



Financial Management とライフサイクル管理

この項の内容:

Financial Managementアーティファクトについて	137
Financial Managementの役割の要件	138
Financial Management移行の前提条件	138
Financial Managementのアーティファクト・リスト	139
Financial Managementの移行に関する考慮事項	147
Financial Managementアプリケーションの移行と製品間アーティファクトの依存関係	147
移行におけるエクスポートとインポートのオプション	147
サンプルの移行定義ファイル	149
ライフサイクル管理のログ・ファイル	150

Financial Managementアーティファクトについて

次のタイプのFinancial Managementアーティファクトのリポジトリのコンテンツを移行するには、ライフサイクル管理を使用します。

- アプリケーションのベース・レベル・データ
- アプリケーションのスナップショット
- 構成
- ドキュメント
- デイメンション
- フォーム
- 内部取引
- 仕訳
- メンバー・リスト
- フェーズ送信
- ルール
- セキュリティ

Financial Managementアーティファクトのリストについては、[139ページのFinancial Managementのアーティファクト・リスト](#)を参照してください。

Financial Managementの役割の要件

Financial Managementのライフサイクル管理の操作を行うユーザーには、次の役割が割り当てられている必要があります：

- LCM管理者
- アプリケーション管理者

『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemユーザーおよび役割セキュリティガイド』を参照してください。

Financial Management移行の前提条件

- Shared ServicesとFinancial Managementをインストールして構成し、実行されていることを確認します。『Oracle Enterprise Performance Management Systemインストールおよび構成ガイド』を参照してください。
- ライフサイクル管理の操作を行っているユーザーに、LCM管理者およびアプリケーション管理者の役割が割り当てられていることを確認します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemユーザーおよび役割セキュリティガイド』を参照してください。
- Financial Management製品固有のアーティファクトを移行する前に、Shared Servicesネイティブ・ディレクトリ・アーティファクト(ユーザー、グループ、およびプロビジョニング)を移行します。60ページのネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)の移行を参照してください。Shared Servicesアーティファクトのリストについては、211ページの付録L「Shared Servicesとライフサイクル管理」を参照してください。
- 次のセクションのFinancial Managementアーティファクト移行情報を確認します。
 - 139ページのFinancial Managementクラシック・アプリケーションの移行
 - 139ページのFinancial Management Performance Management Architectアプリケーションの移行

Financial Managementクラシック・アプリケーションの移行

- 移行する前に、アプリケーションをネイティブFinancial Managementに作成する必要があります。
- Financial Managementクラシックでは、Financial Management固有のアーティファクトとともに、他の製品から次のアーティファクトを移行する必要があります。
 - Shared Servicesネイティブ・ディレクトリ(ユーザー、グループ、およびプロビジョニング)とタスクフロー
 - Reporting and Analysis (Financial ReportingとWeb Analysis)

Financial Management Performance Management Architectアプリケーションの移行

- 最初に移行の場合は、まずPerformance Management Architectディメンションを移行してデプロイする必要があります。その後、非ディメンショナル・アーティファクトを移行できます。
- Financial Management Performance Management Architectでは、Financial Management固有のアーティファクトとともに、他の製品から次のアーティファクトを移行する必要があります。
 - Performance Management Architect
 - Shared Servicesネイティブ・ディレクトリ(ユーザー、グループ、およびプロビジョニング)とタスクフロー
 - Calculation Manager
 - Reporting and Analysis (Financial ReportingとWeb Analysis)

Financial Managementのアーティファクト・リスト

サブトピック

- [アーティファクト・リストについて](#)
- [アプリケーションのベース・レベル・データ・アーティファクト](#)
- [構成アーティファクト](#)
- [ドキュメント・アーティファクト](#)
- [ディメンション・アーティファクト](#)
- [フォーム・アーティファクト](#)
- [内部取引アーティファクト](#)
- [仕訳アーティファクト](#)
- [メンバー・リストのアーティファクト](#)
- [フェーズ送信アーティファクト](#)
- [ルールのアーティファクト](#)
- [セキュリティのアーティファクト](#)

Financial Managementアーティファクトは、Shared Services ConsoleのFinancial Managementアプリケーション・グループにリストされます。

Performance Management Architectが使用可能になったアプリケーションは、Foundationアプリケーション・グループのEPMAノードの下にディメンションをリストします。その他の非ディメンショナル・アーティファクトはすべて、Financial Managementアプリケーション・グループの下にリストされます。



注:

Shared Services Consoleに表示されるアーティファクトは、実装ごとに異なります。

アーティファクト・リストについて

アーティファクト・リストについて次のことに注意してください:

- **アーティファクト** - アーティファクト名
- **説明** - アーティファクトの説明
- **最終変更時間** - このパラメータがサポートされている場合は、アーティファクトがインポートされた時間を反映します。アーティファクトの中には、最終変更時間のパラメータをサポートしないものがあります。
- **最終変更ユーザー** - このパラメータがサポートされている場合は、アーティファクトを最後に変更したユーザーを反映します。アーティファクトの中には、最終変更ユーザーのパラメータをサポートしないものがあります。
- **ファイル・システムで編集可能** - 「はい」の場合、アーティファクトはテキスト・エディタを使用してファイル・システム上で編集できます。「いいえ」の場合、アーティファクトは製品内でのみ編集できます。
- **依存** - アーティファクトの依存関係を一覧表示します。たとえば、Financial Managementイベントのアーティファクトを移行する場合は、Financial Managementカレンダーのアーティファクトも移行する必要があります。

アプリケーションのベース・レベル・データ・アーティファクト

表24 ベース・レベル・データ・アーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
データ	所有者情報や為替レートなどを含むベース・レベル・データ。	いいえ	いいえ	はい	セキュリティ・クラス、ディメンション



注:

分散EPMインストールのFinancial Managementのデータ・アーティファクトをエクスポートまたはインポートするには、ライフサイクル管理に共有ファイル・システム・パスが必要です。この共有/ディスク・フォルダへのアクセス権を持つドメイン・アカウントを使用して、サービスを起動する必要があります。このドメイン・アカウントでhfmLcmServiceAppPool(IIS)を構成します。

構成アーティファクト

表25 構成アーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
アプリケーション定義	クラシック・アプリケーションのアプリケーション・シエルを作成するために使用します	いいえ	いいえ	はい	なし
アプリケーション・モジュール構成	システム管理者は、アプリケーションのすべてのユーザーに対してFinancial Managementモジュールを使用不可にできます	はい	はい	はい	なし

ドキュメント・アーティファクト

表26 ドキュメント・アーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
カスタム文書	Microsoft WordやExcelドキュメント	はい	いいえ	いいえ	セキュリティ・クラス

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
	トなどの、ユーザー定義ドキュメント				
データ・エクスポーラ・レポート	データ・グリッドに含まれている情報を示します	はい	いいえ	はい - テキスト、XML	セキュリティ・クラス、ディメンション、メンバー・リスト
フォルダ	他のファイルを含んで階層を形成するファイル	はい	いいえ	はい - テキスト、XML	セキュリティ・クラス
リンク	リポジトリ・オブジェクトへの参照です。リンクはフォルダ、ファイル、ショートカット、および他のリンクなどの参照に使用できます。	はい	いいえ	はい - テキスト、XML	セキュリティ・クラス
関連コンテンツ	レポートなどの別のOracle製品のコンテンツへのリンク	はい	いいえ	はい - テキスト、XML	セキュリティ・クラス
タスク・リスト	特定のユーザーについて、タスクの詳細ステータスを示すリスト	はい	いいえ	はい - テキスト、XML	セキュリティ・クラス

ディメンション・アーティファクト

表27 ディメンション・アーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
Account	高機能の会計を可能にするディメンション・タイプ。勘定科目として定義可能なディメンションは1つのみです。	はい	いいえ	はい - XML	セキュリティ・クラス
Appsettings	メタデータの属性	はい	いいえ	はい - XML	セキュリティ・クラス
ConsolMethod	メタデータの属性	はい	いいえ	はい - XML	セキュリティ・クラス

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
Currency	メタデータの属性	はい	いいえ	はい - XML	セキュリティ・クラス
Custom (1 - 4)	ユーザーが作成および定義するディメンションです。チャンネル、製品、部署、プロジェクト、または地域がカスタム・ディメンションになることがあります。	はい	いいえ	はい - XML	セキュリティ・クラス
エンティティ	組織単位を表すディメンションです。例: 部門、子会社、工場、地域、製品など、組織での財務報告単位。	はい	いいえ	はい - XML	セキュリティ・クラス
ICP	勘定科目に存在するすべての内部取引残高を表すディメンションです。このディメンションは、勘定科目ディメンションと任意のカスタム・ディメンションを組み合わせて使用する予約ディメンションです。	はい	いいえ	はい - XML	セキュリティ・クラス
Period	四半期や月などの期間を示すディメンション	はい	いいえ	はい - XML	セキュリティ・クラス
Scenario	データを分類するためのディメンション (Actuals, Budget, Forecast1, Forecast2 など)	はい	いいえ	はい - XML	セキュリティ・クラス
Value	アプリケーションに保管されている様々なタイプの値を表し、入力通貨、親通貨、調整、お	はい	いいえ	はい - XML	セキュリティ・クラス

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
	よび連結の詳細(比例、消去、および貢献の詳細など)を含められるディメンション				
View	期別、年次累計および四半期累計の期間単位など、カレンダーに関する機能の様々なモードを示すディメンション	はい	いいえ	はい - XML	セキュリティ・クラス
Year	データの会計年度や暦年を示すディメンション	はい	いいえ	はい - XML	セキュリティ・クラス

フォーム・アーティファクト

表28 フォーム・アーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
Webフォーム	ユーザーがデータベースにデータを入力できるようにする、Web上のグリッド表示	はい	いいえ	はい - テキスト、XML	セキュリティ・クラス、ディメンション、メンバー・リスト
Webグリッド	データを入力および表示するためのオブジェクト	はい	いいえ	はい - テキスト、XML	セキュリティ・クラス、ディメンション、メンバー・リスト

内部取引アーティファクト

表29 内部取引アーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
内部取引照合テンプレート	内部取引照合プロセスの一連の事	はい	いいえ	はい - テキスト、XML	セキュリティ・クラス、ディメンション、メンバー・リスト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
	前定義コンポーネント				
内部取引理由コード	内部取引のステータスの説明	はい	いいえ	はい - テキスト、XML	なし
内部取引システム・レポート	内部取引照合プロセスの情報	はい	いいえ	はい - テキスト、XML	セキュリティ・クラス、ディメンション、メンバー・リスト
内部取引システム・レポート	内部取引の情報	はい	いいえ	はい - テキスト、XML	セキュリティ・クラス、ディメンション、メンバー・リスト
勘定科目別に内部取引照合	選択した勘定科目別の内部取引照合レポート	はい	いいえ	はい - テキスト、XML	セキュリティ・クラス、ディメンション、メンバー・リスト
取引ID別に内部取引照合	取引ID別の内部取引照合レポート	はい	いいえ	はい - テキスト、XML	セキュリティ・クラス、ディメンション、メンバー・リスト

仕訳アーティファクト

表30 仕訳アーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
仕訳グループ	ユーザー定義の要素の1つ	いいえ	いいえ	はい - テキスト、XML	なし
仕訳システム・レポート	仕訳の情報を表示します	はい	いいえ	はい - テキスト、XML	セキュリティ・クラス、ディメンション、メンバー・リスト
仕訳テンプレート	各期間に共通する調整情報を転記するために使用する仕訳の機能です。たとえば、共通する勘定科目ID、エンティティID、または金額を含む標準テンプレートを作成すると、これを多数の通常仕訳の基準として使用できます。	はい	いいえ	はい - テキスト、XML	セキュリティ・クラス、ディメンション、メンバー・リスト、仕訳グループ

メンバー・リストのアーティファクト

表31 メンバー・リストのアーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
メンバー・リスト	ディメンションのメンバー、関数、他のメンバー・リストを示す名前付きのグループです。システムまたはユーザーにより定義されます	はい	いいえ	はい - XML	ディメンション

フェーズ送信アーティファクト



注:

フェーズ送信アーティファクトを移行するには、ソースと宛先の両方でフェーズ送信を使用可能にしておく必要があります。

表32 フェーズ送信アーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
フェーズ送信	プロセス管理単位のステージ	はい	いいえ	はい - XML	なし

ルールのアーティファクト

表33 ルールのアーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
ルール	アプリケーション内のデータの計算を自動化します	はい	いいえ	はい - XML	ディメンション

セキュリティのアーティファクト

表34 セキュリティのアーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
セキュリティ・クラス	ユーザーのアクセス権を指定する	はい	いいえ	はい - テキスト、XML	なし

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
	ディメンション・メンバーの属性				
セキュリティ・クラス・アクセス	セキュリティ・クラスのユーザーに割り当てられた権限	いいえ	いいえ	はい - テキスト、XML	セキュリティ・クラス

Financial Managementの移行に関する考慮事項

- 必要な依存関係を手動で選択する必要があります。
- Financial Managementがターゲット環境にない場合、ライフサイクル管理によってアプリケーション・シエルが作成されます。アプリケーション・シエルを作成するには、アプリケーション定義アーティファクトを選択する必要があります。
- 分散Financial Management環境では、その環境内のすべてのFinancial Managementアプリケーション・サーバーに、読取り/書込みアクセス権のあるUNCパスのインポート/エクスポート・フォルダを構成します。

Financial Managementアプリケーションの移行と製品間アーティファクトの依存関係

Financial Managementには、製品間アーティファクトの依存関係はありません。

移行におけるエクスポートとインポートのオプション

サブトピック

- [移行のエクスポート・オプション](#)
- [移行のインポート・オプション](#)



注:

以前のリリースでは、Shared Services Consoleにおいて、Financial Management用に「依存アーティファクトを含む」オプションが提供されていました。このオプションは使用できなくなりました。かわりに、必要な依存関係を手動で選択する必要があります。

移行のエクスポート・オプション

Financial Managementには、製品固有のエクスポート・オプションはありません。

移行のインポート・オプション

インポート時に、ディメンション・アーティファクトとフェーズ送信アーティファクトには、宛先環境で既存のアーティファクトを置換またはマージするオプションがあります。その他のFinancial Managementアーティファクトはいずれも、インポート時に既存のアーティファクトを置換します。

Financial Managementのインポート・オプションは次のとおりです:

- **ディメンションのインポート・モード**
 - 置換 - アーティファクトをインポートしたアーティファクトで上書きします。
 - マージ - アーティファクトをインポートしたアーティファクトとマージします。



注:

このオプションは、移行で定義されたすべてのディメンションに適用できます。

- **フェーズ送信割当てインポート・モード**
 - 置換 - アーティファクトをインポートしたアーティファクトで上書きします。
 - マージ - アーティファクトをインポートしたアーティファクトとマージします。



注:

エクスポートおよびインポートのオプションにアクセスするには、Shared Services Consoleを起動し、「管理」、移行オプションを選択します。

サンプルの移行定義ファイル

提供されているサンプル定義ファイルは、Financial Managementクラシック・アプリケーションの移行用です。Financial Managementの移行定義ファイルで使用されている製品コードはHFMで、サンプル・アプリケーションはCOMMAです。



注:

移行定義ファイルで正しい構文が使用されていない場合、「MDFファイルのフォーマットが正しくありません」というエラーが表示されます。

ファイル・システムへのエクスポート

```
<Package>
<LOCALE>en</LOCALE>
<User name="" password="" />
<Task>
  <Target type="FileSystem" filePath="/HFM-LINSCRIPT" />
  <Source type="Application" product="HFM" project="Default Application Group"
application="LINSCRIPT" />
  <Artifact recursive="true" parentPath="/Forms" pattern="" />
  <Artifact recursive="true" parentPath="/Configuration" pattern="" />
  <Artifact recursive="true" parentPath="/Rules" pattern="" />
  <Artifact recursive="true" parentPath="/Documents" pattern="" />
  <Artifact recursive="true" parentPath="/Dimensions" pattern="" />
  <Artifact recursive="true" parentPath="/InterCompany" pattern="" />
  <Artifact recursive="true" parentPath="/Member Lists" pattern="" />
  <Artifact recursive="true" parentPath="/Journals" pattern="" />
  <Artifact recursive="true" parentPath="/Security" pattern="" />
  <Artifact recursive="true" parentPath="/Phased Submission" pattern="" />
</Task>
</Package>
```

ファイル・システムからのインポート

```
<Package>
<LOCALE>en</LOCALE>
<User name="" password="" />
<Task>
  <Target type="Application" product="HFM" project="Default Application Group"
application="LINSCRIPT" />
  <Source type="FileSystem" filePath="/HFM-LINSCRIPT" />
  <Artifact recursive="true" parentPath="/Security" pattern="" />
  <Artifact recursive="true" parentPath="/Configuration" pattern="" />
  <Artifact recursive="true" parentPath="/Forms" pattern="" />
  <Artifact recursive="true" parentPath="/Rules" pattern="" />
  <Artifact recursive="true" parentPath="/Documents" pattern="" />
  <Artifact recursive="true" parentPath="/Dimensions" pattern="" />
  <Artifact recursive="true" parentPath="/InterCompany" pattern="" />
  <Artifact recursive="true" parentPath="/Member Lists" pattern="" />
  <Artifact recursive="true" parentPath="/Journals" pattern="" />
  <Artifact recursive="true" parentPath="/Phased Submission" pattern="" />
</Task>
</Package>
```

ライフサイクル管理のログ・ファイル

Financial Managementのライフサイクル管理のログ・ファイルについては、『*Oracle Enterprise Performance Management System*インストールおよび構成トラブルシューティング・ガイド』に記載されています。



Performance Management Architectとライフサイクル管理

この項の内容:

Performance Management Architectのアーティファクトについて	151
Performance Management Architectの役割の要件	151
Performance Management Architectの移行の前提条件	152
Performance Management Architectのアーティファクト・リスト	152
Performance Management Architectの移行に関する考慮事項	160
Performance Management Architectアプリケーションの移行および製品間のアーティファクトの依存関係	160
移行におけるエクスポートとインポートのオプション	161
サンプルの移行定義ファイル	162
ライフサイクル管理のログ・ファイル	163

Performance Management Architectのアーティファクトについて

ライフサイクル管理は、次のPerformance Management Architectアーティファクト・タイプのリポジトリのコンテンツを移行する場合に使用します:

- アプリケーション・メタデータ
- 共有ライブラリ・ディメンション
- ディメンション・アクセス
- データの同期

Performance Management Architectのアーティファクトについては、[152ページのPerformance Management Architectのアーティファクト・リスト](#)を参照してください。

Performance Management Architectの役割の要件

Performance Management Architectのライフサイクル管理操作を行うユーザーには、LCM管理者の役割が割り当てられている必要があります。

『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemユーザーおよび役割セキュリティガイド』を参照してください。

Performance Management Architectの移行の前提条件

- Shared ServicesおよびPerformance Management Architectをインストールして構成し、これらが実行中であることを確認します。『Oracle Enterprise Performance Management Systemインストールおよび構成ガイド』を参照してください。
- ライフサイクル管理の操作を行っているユーザーにLCM管理者の役割が割り当てられていることを確認します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemユーザーおよび役割セキュリティガイド』を参照してください。
- Performance Management Architectに固有のアーティファクトを移行する前に、Shared Servicesのネイティブ・ディレクトリ(ユーザー、グループおよびプロビジョニング)を移行する必要があります。60ページの[ネイティブ・ディレクトリ\(セキュリティ\)の移行](#)を参照してください。Shared Servicesネイティブ・ディレクトリのアーティファクト・リストについては、211ページの[付録L「Shared Servicesとライフサイクル管理」](#)を参照してください。

Performance Management Architectのアーティファクト・リスト

サブトピック

- [アーティファクト・リストについて](#)
- [アプリケーション・メタデータのアーティファクト](#)
- [共有ライブラリ・ディメンションのアーティファクト](#)
- [ディメンション・アクセスのアーティファクト](#)
- [データ同期のアーティファクト](#)

次のことに注意してください。

- Performance Management ArchitectアーティファクトはShared Services ConsoleのFoundationアプリケーション・グループにリストされます。
- Shared Services Consoleに表示されるアーティファクトは、実装ごとに異なります。
- インタフェース・データ・ソース・アーティファクトはエクスポートまたはインポートがサポートされていないアーティファクトです。

アーティファクト・リストについて

アーティファクト・リストについて次のことに注意してください：

- **アーティファクト** - アーティファクト名
- **説明** - アーティファクトの説明
- **最終変更時間** - このパラメータがサポートされている場合は、アーティファクトがインポートされた時間を反映します。アーティファクトの中には、最終変更時間のパラメータをサポートしないものがあります。
- **最終変更ユーザー** - このパラメータがサポートされている場合は、アーティファクトを最後に変更したユーザーを反映します。アーティファクトの中には、最終変更ユーザーのパラメータをサポートしないものがあります。
- **ファイル・システムで編集可能** - 「はい」の場合、アーティファクトはテキスト・エディタを使用してファイル・システム上で編集できます。「いいえ」の場合、アーティファクトは製品内でのみ編集できます。
- **依存** - アーティファクトの依存関係を一覧表示します

アプリケーション・メタデータのアーティファクト

「アプリケーション・メタデータ」ディレクトリには、集計アプリケーション、Planningアプリケーション、Essbaseアプリケーション、収益性アプリケーションおよび汎用アプリケーションのアーティファクトが含まれています。

表35 アプリケーション・メタデータのアーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
集計アプリケーション: ローカル・ディメンション: Entity	組織単位を示すディメンション。たとえば、部門、子会社、工場、地域、製	はい	はい	はい - XML	なし

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
	品、またはその他の財務報告単位				
集計アプリケーション: ローカル・ディメンション: Account	高機能の会計を可能にするディメンション・タイプです。勘定科目として定義可能なディメンションは1つのみです。	はい	はい	はい - XML	なし
集計アプリケーション: アプリケーション・プロパティ	アプリケーションが作成されると、デフォルトのプロパティとプロパティ値のセットが投入されます。プロパティ値は、文字列、整数、ブールなどです。	はい	はい	はい - XML	なし
集計アプリケーション: インポート・プロファイル	新しいディメンション、既存のディメンションをマージまたは置換するかどうか、およびディメンションのプロパティなどのインポートするディメンションに関する重要情報が含まれます。	はい	はい	はい - XML	なし
Planningアプリケーション: ローカル・ディメンション: Entity	部門、子会社、工場、地域、製品など、組織での財務報告単位となる組織単位を示すディメンションです	はい	はい	はい - XML	なし
Planningアプリケーション: ローカル・ディメンション: Account	高機能の会計を可能にするディメンション・タイプです。勘定科目として定義可能なディメンションは1つのみです。	はい	はい	はい - XML	なし

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
Planningアプリケーション: アプリケーション・プロパティ	アプリケーションが作成されると、デフォルトのプロパティとプロパティ値のセットが投入されます。プロパティ値は、文字列、整数、ブールなどです	はい	はい	はい - XML	なし
Planningアプリケーション: インポート・プロファイル	新しいディメンション、既存のディメンションをマージまたは置換するかどうか、およびディメンションのプロパティなどのインポートするディメンションに関する重要情報	はい	はい	はい - XML	なし
Essbaseアプリケーション: ローカル・ディメンション: Entity	部門、子会社、工場、地域、製品など、組織での財務報告単位となる組織単位を示すディメンションです	はい	はい	はい - XML	なし
Essbaseアプリケーション: ローカル・ディメンション: Account	高機能の会計を可能にするディメンション・タイプです。勘定科目として定義可能なディメンションは1つのみです	はい	はい	はい - XML	なし
Essbaseアプリケーション: アプリケーション・プロパティ	アプリケーションが作成されると、デフォルトのプロパティとプロパティ値のセットが投入されます。プロパティ値は、文字列、整数、ブールなどです	はい	はい	はい - XML	なし

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
Essbaseアプリケーション: インポート・プロファイル	新しいディメンション、既存のディメンションをマージまたは置換するかどうか、およびディメンションのプロパティなどのインポートするディメンションに関する重要情報	はい	はい	はい - XML	なし
収益性アプリケーション: インポート・プロファイル	新しいディメンション、既存のディメンションをマージまたは置換するかどうか、およびディメンションのプロパティなどのインポートするディメンションに関する重要情報	はい	はい	はい - XML	なし
収益性アプリケーション: ローカル・ディメンション	アプリケーションに対してローカルなすべてのディメンションのメンバー	はい	はい	はい	共有ライブラリ・ディメンション、アプリケーション設定
収益性アプリケーション: 収益性設定	アプリケーション・レベル・プロパティ、共有ディメンション、フィルタ、およびプロパティのオーバーライドなどのアプリケーション設定	はい	はい	はい - XML	共有ライブラリ・ディメンション
汎用アプリケーション: ローカル・ディメンション: Entity	部門、子会社、工場、地域、製品など、組織での財務報告単位となる組織単位を示すディメンションです	はい	はい	はい - XML	なし
汎用アプリケーション: ローカル・ディメンション: Account	高機能の会計を可能にするディメンション・タイプです。勘定科目とし	はい	はい	はい - XML	なし

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
	て定義可能なディメンションは1つのみです。				
汎用アプリケーション: アプリケーション・プロパティ	アプリケーションが作成されると、デフォルトのプロパティとプロパティ値のセットが投入されます。プロパティ値は、文字列、整数、ブールなどです。	はい	はい	はい - XML	なし
汎用アプリケーション: インポート・プロファイル	新しいディメンション、既存のディメンションをマージまたは置換するかどうか、およびディメンションのプロパティなどのインポートするディメンションに関する重要情報	はい	はい	はい - XML	なし

共有ライブラリ・ディメンションのアーティファクト

共有ライブラリ・ディメンションディレクトリには、次のような共有ライブラリ・ディメンションのアーティファクトが含まれます; Entity、AccountおよびProductなど。

表36 共有ライブラリ・ディメンションのアーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
エンティティ	部門、子会社、工場、地域、製品など、組織での財務報告単位となる組織単位を示すディメンションです	はい	はい	はい - XML	なし
Account	高機能の会計を可能にするディメンション・タイプで	はい	はい	はい - XML	なし

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
	す。勘定科目として定義可能なディメンションは1つのみです。				
Product	企業によって作られる製品またはサービスを表すディメンション。製品は、一般に「汎用」タイプのディメンションとして表示されます。	はい	はい	はい - XML	なし

ディメンション・アクセスのアーティファクト

ディメンション・アクセス・ディレクトリには、共有ライブラリ・ディメンションに関連するインポート・プロファイルが含まれます。

表37 ディメンション・アクセスのアーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
インポート・プロファイル	新規ディメンションなどのインポートされたディメンション、既存のディメンションをマージするか置換するかどうか、およびディメンション・プロパティに関する重要な情報。 インポート・プロファイルは、ソースでのインポート・プロファイルの作成方法に基づき、フラット・ファイル、インタフェース表およびData Relationship	はい	はい	はい - XML	なし

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
	Managementに関連します。				

データ同期のアーティファクト

「データの同期」ディレクトリには、同期、マッピング表、外部のファイル定義およびインタフェース表定義のアーティファクトが含まれています。

表38 データ同期のアーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
外部のファイル定義	データ同期でソースとして使用される外部ファイル	はい	はい	はい - XML	なし
フィルタ定義	ソース・アプリケーションから使用可能なメンバーのセットを制限するために必要です。同期の実行時に、ソース・メンバーにフィルタを適用します。	はい	はい	はい - XML	アプリケーション
マッピング表	データ同期で再利用できるマッピング。マッピング表を作成してある場合は、それらの表を同期に挿入できます。	はい	はい	はい - XML	なし
インタフェース表定義	外部のシステムからPerformance Management Architectにデータおよびメタデータをインポートする際に使用されるデータベース表	はい	はい	はい - XML	インタフェース・データ・ソース
同期	EPM Systemアプリケーション、インタフェース表および外部ファイル	はい	はい	はい - XML	アプリケーション

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
	間でデータを同期およびマップできます				

Performance Management Architectの移行に関する考慮事項

ディメンション状態が共有またはローカルである宛先のインポート結果は、ソースで選択されたアーティファクトによって異なります。考慮事項については、次の表を参照してください。

表39 共有およびローカル・ディメンションの移行に関する考慮事項

ソースの選択	ソース・アプリケーションのディメンションの状態	宛先のアクション	アプリケーション・プロパティが選択されている場合
アプリケーションのメタデータのみ	ローカル	ディメンションは宛先アプリケーション内に「ローカル」としてインポートされます。ディメンションは作成、マージまたは置換されます。共有ディメンション・ライブラリは影響を受けません。	アプリケーション・レベルのプロパティのみが更新される
共有ディメンション・ライブラリのみ	共有	ディメンションは、宛先の共有ディメンション・ライブラリ内で作成、マージまたは置換されます。ディメンションは宛先アプリケーションには含まれません。	<ul style="list-style-type: none"> アプリケーションレベルのプロパティが更新される ディメンションは、選択されたアプリケーション内に「共有」として含まれる アプリケーションに関するディメンションおよびメンバー・レベルのオーバーライドはインポートされます。オーバーライドには、メンバー・フィルタやアプリケーションに固有のプロパティ値が含まれます。

Performance Management Architectアプリケーションの移行および製品間のアーティファクトの依存関係

Performance Management Architectアプリケーションをある環境から他の環境(開発からテストまたはテストから本番環境)に移行する場合は、製品間のアーティファクトの依存関係が存在します。Performance Management Architectでは、Shared Servicesネイティブ・ディレクトリ(ユーザー、グループおよびプロビジョニング

グ)のアーティファクトをPerformance Management Architectに固有のアーティファクトとともに移行する必要があります。60ページのネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)の移行を参照してください。

移行におけるエクスポートとインポートのオプション

サブトピック

- ・ [移行のエクスポート・オプション](#)
- ・ [移行のインポート・オプション](#)



注:

以前のリリースでは、Shared Services Consoleにおいて、Performance Management Architect用に「依存アーティファクトを含む」オプションが提供されていました。このオプションは使用できなくなりました。かわりに、必要な依存関係を手動で選択する必要があります。

移行のエクスポート・オプション

Performance Management Architectには、製品に固有のエクスポート・オプションはありません。

移行のインポート・オプション

インポート時に、Performance Management Architectアーティファクトはすべて、宛先環境で既存のアーティファクトを置換します。ディメンション・アーティファクトのみが例外で、マージまたは置換のオプションがあります。

Performance Management Architectのインポート・オプション:

ディメンションのインポート・モード - 宛先のディメンションとプロパティをソース・インスタンスから抽出されたメタデータに置換します。デフォルト値は「マージ」です。



注:

マージおよび置換のオプションはメンバー階層レベルのみで機能し、アプリケーションまたはディメンション・レベルでは機能しません。プロパティがメンバー・レベルで更新される場合、マージまたは置換ではプロパティがソースに基づいて上書きされます。



注:

エクスポートおよびインポートのオプションにアクセスするには、Shared Services Consoleを起動し、「管理」、移行オプションを選択します。

サンプルの移行定義ファイル

Performance Management Architectの移行定義ファイルで使用される製品コードはBPMAです。



注:

移行定義ファイルで正しい構文が使用されていない場合、「MDFファイルのフォーマットが正しくありません」というエラーが表示されます。

ファイル・システムへのエクスポート

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
<Package>
  <LOCALE>en_US</LOCALE>
  <User name="" password="" />
  <Task>
    <Source type="Application" product="BPMA" project="Foundation" application="EPM
Architect" />
    <Target type="FileSystem" filePath="/EPMA-EPM Architect" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Application Metadata" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Data Synchronization" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Dimension Access" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Shared Library Dimensions" pattern="*" /
>
  </Task>
</Package>
```

ファイル・システムからのインポート

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
<Package>
  <LOCALE>en_US</LOCALE>
  <User name="" password="" />
  <Task>
    <Source type="FileSystem" filePath="/EPMA-EPM Architect" />
    <Target type="Application" product="BPMA" project="Foundation" application="EPM
Architect" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Application Metadata" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Data Synchronization" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Dimension Access" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Shared Library Dimensions" pattern="*" /
>
  </Task>
</Package>
```

ライフサイクル管理のログ・ファイル

Performance Management Architectのライフサイクル管理のログ・ファイルは、『Oracle Enterprise Performance Management Systemインストールおよび構成トラブルシューティング・ガイド』に記載されています。



Planningとライフサイクル管理

この項の内容:

Planningアーティファクトについて	165
Planningの役割の要件	165
Planningの移行の前提条件	166
Planningのアーティファクト・リスト	167
Planningの移行に関する考慮事項	178
Planningアプリケーションの移行と製品間アーティファクトの依存関係	178
移行におけるエクスポートとインポートのオプション	179
サンプルの移行定義ファイル	179
ライフサイクル管理のログ・ファイル	180

Planningアーティファクトについて

次のタイプのPlanningアーティファクトを移行するには、ライフサイクル管理を使用します:

- 構成
- Essbaseデータ
- グローバル
- プラン・タイプ
- リレーショナル・データ
- セキュリティ

Planningのアーティファクト・リストについては、[167ページのPlanningのアーティファクト・リスト](#)を参照してください。

Planningの役割の要件

Planningのライフサイクル管理の操作を行うユーザーには、次の役割が割り当てられている必要があります:

- LCM管理者
- Planning管理者
- アプリケーション作成者



注:

ライフサイクル管理のリスト作成、エクスポートおよびインポート操作を実行するには、Planning管理者の役割が必要です。また、Planningアプリケーションを作成するには、アプリケーション作成者の役割が必要です。

『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemユーザーおよび役割セキュリティガイド』を参照してください。

Planningの移行の前提条件

- Shared ServicesとPlanningをインストールして構成し、これらが実行されていることを確認します。『Oracle Enterprise Performance Management Systemインストールおよび構成ガイド』を参照してください。
- ライフサイクル管理の操作を行っているユーザーに、LCM管理者、Planning管理者およびアプリケーション作成者の役割が割り当てられていることを確認します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemユーザーおよび役割セキュリティガイド』を参照してください。
- タスク・リストのLCM管理者に読取りアクセス権限が割り当てられていることを確認します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemユーザーおよび役割セキュリティガイド』を参照してください。
- Planningアプリケーションを移行する前に、Shared Servicesネイティブ・ディレクトリのアーティファクト(ユーザー、グループ、およびプロビジョニング)を移行してください。60ページのネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)の移行を参照してください。Shared Servicesネイティブ・ディレクトリのアーティファクト・リストについては、60ページのネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)の移行を参照してください。



注:

PlanningまたはEssbaseのライフサイクル管理を使用するには、Essbaseで従来のセキュリティ・モードではなく、Shared Servicesネイティブ・ディレクトリを使用する必要があります。

- Planning Performance Management Architectアプリケーションの移行の場合、非ディメンショナル・アーティファクトを移行する前に、まずPerformance Management Architectディメンションを移行して、「インポートしてからデプロイ」する必要があります。Performance Management Architectアーティファクトのリストについては、151ページの付録H「Performance Management Architectとライフサイクル管理」を参照してください。
- 次のアプリケーション・レベルのカレンダ・プロパティは、ソースと宛先のアプリケーションで一致している必要があります:
 - 開始年
 - 基本期間(12か月、四半期、カスタムなど)
 - 開始月
- 期間ディメンション・メンバーは、ソースと宛先のアプリケーションで一致している必要があります。たとえば、ソースの期間ディメンションにQuarter 1メンバーがある場合、宛先にもQuarter 1メンバーが存在する必要があります。
- ソースと宛先のプラン・タイプは一致する必要があります(たとえば、ソース・アプリケーションにプラン1というプラン・タイプがある場合、宛先アプリケーションにもプラン1というプラン・タイプが存在する必要があります)。

- ソースと宛先のプラン・タイプは、同じ順序で割り当てられる必要があります(たとえば、ソース・アプリケーションにプラン1とプラン2というプラン・タイプがある場合、どちらも宛先アプリケーションでも同じ順序で現れる必要があります)。
- ソースに「単一通貨」アプリケーション・タイプがある場合は、宛先アプリケーションも同じタイプにする必要があります。
- アプリケーション・タイプ(全般、Project Financial Planning、Public Sector Planning and Budgeting)は、ソースと宛先アプリケーションの両方で一致する必要があります。
- Oracle Hyperion Public Sector Planning and Budgetingの場合、構成オプションは、ソースと宛先アプリケーションで一致する必要があります。たとえば、ソース・アプリケーションのタイプが「職階および従業員」の場合、宛先アプリケーションのタイプも「職階および従業員」である必要があります。
- 意思決定パッケージのオプションがソース・アプリケーションに対して有効になっている場合、宛先アプリケーションに対しても有効である必要があります。

Planningのアーティファクト・リスト

サブトピック

- [アーティファクト・リストについて](#)
- [構成アーティファクト](#)
- [Essbaseデータ・アーティファクト](#)
- [グローバル・アーティファクト](#)
- [プラン・タイプのアーティファクト](#)
- [リレーショナル・データのアーティファクト](#)
- [セキュリティのアーティファクト](#)

Planningのアーティファクトは、Shared Services ConsoleのPlanningアプリケーション・グループにリストされています。

Performance Management Architectが使用可能になったアプリケーションは、Foundationアプリケーション・グループのEPMAノードの下にディメンションをリストします。その他のすべての非ディメンショナル・アーティファクトは、Planningアプリケーション・グループの下にリストされます。



注:

Shared Services Consoleに表示されるアーティファクトは、実装ごとに異なります。

アーティファクト・リストについて

アーティファクト・リストについて次のことに注意してください:

- **アーティファクト** - アーティファクト名
- **説明** - アーティファクトの説明
- **最終変更時間** - このパラメータがサポートされている場合は、アーティファクトが最後に変更された時間を反映します。アーティファクトの中には、最終変更時間のパラメータをサポートしないものがあります。
- **最終変更ユーザー** - このパラメータがサポートされている場合は、アーティファクトを最後に変更したユーザーを反映します。アーティファクトの中には、最終変更ユーザーのパラメータをサポートしないものがあります。
- **ファイル・システムで編集可能** - 「はい」の場合、アーティファクトはテキスト・エディタを使用してファイル・システム上で編集できます。「いいえ」の場合、アーティファクトは製品内でのみ編集できます。
- **依存** - アーティファクトの依存関係を一覧表示します。たとえば、ユーザー・プリファレンス・アーティファクトを移行する場合は、ユーザー変数アーティファクトも移行する必要があります。

構成アーティファクト

表40 構成アーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
アドホック・オプション	抑制オプション、精度オプション	いいえ	いいえ	はい - XML	アドホック・フォーム

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
	ン、置換オプション、Webグリッドのデータに影響するその他のオプション				
データ・ロードの設定	データをEssbaseデータベースに直接ロードできるようにするため、ユーザーが設定できるパラメータ	いいえ	いいえ	はい - XML	関連付けられたディメンション
プロパティ: アプリケーションの設定	ユーザーが、電子メール通知、別名表および表示オプションなどのプリファレンスを設定できるようにする機能	いいえ	いいえ	はい - XML	なし
ユーザー・プリファレンス	ユーザーがアプリケーション、表示、印刷およびユーザー変数に設定できるプリファレンス	いいえ	いいえ	はい - XML	ユーザー変数
ユーザー変数	ユーザーのメンバー選択に基づいて、データ・フォームを動的に配置し、指定されたエンティティのみを表示します。たとえば、Departmentというユーザー変数を使用すると、特定の部署および従業員を表示できます。	いいえ	いいえ	はい - XML	関連付けられたディメンション

Essbaseデータ・アーティファクト

表41 Essbaseデータ・アーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
Planning Essbaseキューブ	Planning Essbaseデータ	いいえ	いいえ	いいえ	なし

グローバル・アーティファクト



注:

複数のプラン・タイプに関連付けられた標準的なディメンションが共通ディメンションにリストされます。この項には、関連付けられた属性ディメンションも含まれています。

表42 グローバル・アーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
Calculation Managerルールセット	同時または連続の計算が可能なルールおよびその他のルール・セットを含むオブジェクト	はい	はい	はい - XML	なし
共通ディメンション-属性このアーティファクトはEPM ArchitectベースのアプリケーションのPlanningアプリケーションの下には表示されません。	ディメンションのメンバーの属性や特質に基づいて分析できるディメンション・タイプ。共通の標準ディメンションに関連付けられています。	はい	いいえ	はい - CSV	なし
共通ディメンション(標準-勘定科目)このアーティファクトはEPM ArchitectベースのアプリケーションのPlanningアプリケーションの下には表示されません。	高機能の会計を可能にするディメンション・タイプ。勘定科目として定義可能なディメンションは1つのみです	はい	いいえ	はい - CSV	なし
共通ディメンション(標準-通貨)このアーティファクトはEPM ArchitectベースのアプリケーションのPlanning	通貨を示すディメンション	はい	いいえ	はい - CSV	なし

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
アプリケーションの下には表示されません。					
共通ディメンション(標準-エンティティ)このアーティファクトはEPM ArchitectベースのアプリケーションのPlanningアプリケーションの下には表示されません。	組織単位を示すディメンション。たとえば、部門、子会社、工場、地域、製品、またはその他の財務報告単位	はい	いいえ	はい - CSV	通貨ディメンションは最初にロードされます。
共通ディメンション(標準-期間)このアーティファクトはEPM ArchitectベースのアプリケーションのPlanningアプリケーションの下には表示されません。	四半期や月などの期間を示すディメンション	はい	いいえ	はい - CSV	Year
共通ディメンション(標準-要求ディメンション)このアーティファクトはEPM ArchitectベースのアプリケーションのPlanningアプリケーションの下には表示されません。	予算要求を表す示すディメンション	はい	いいえ	はい - CSV	なし
共通ディメンション(標準-シナリオ)このアーティファクトはEPM ArchitectベースのアプリケーションのPlanningアプリケーションの下には表示されません。	データを分類するためのディメンション。たとえば、Actuals、Budget、Forecast1、Forecast2	はい	いいえ	はい - CSV	期間および年のディメンション、為替レート
共通ディメンション(標準-バージョン)このアーティファクトはEPM ArchitectベースのアプリケーションのPlanningアプリケーションの下には表示されません。	データのシナリオのコンテキスト内で使用される、起こりうる結果。たとえば、Budget - Best Case、Budget - Worst Case (Budgetがシナリオ、Best Caseお	はい	いいえ	はい - CSV	なし

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
	よびWorst Caseがバージョン)など				
共通ディメンション(標準-年)このアーティファクトはEPM ArchitectベースのアプリケーションのPlanningアプリケーションの下には表示されません。	データの会計年度や暦年を示すディメンション	はい	いいえ	はい - CSV	なし
複合フォーム	複数のデータ・フォームのメンバーが同時に表示されるため、たとえば、あるグリッドにデータを入力して、別のグリッドで集約された結果(収益の合計など)を確認できます	はい	いいえ	はい - XML	関連データ・フォーム
カスタム・メニュー	管理者が作成する企業に固有またはアプリケーションに固有のメニューです。ユーザーはメンバーを右クリックして、メニュー・アイテムを選択し、URL、データ・フォームまたはワークフローを開くことができます。	はい	いいえ	はい - XML	メニューのタイプがワークフローの場合は、プランニング・ユニットになります
意思決定パッケージ	新しいサービス、プログラム、ビジネス目標、または結果ベースの管理の結果や結果ベースの予算策定の提案。意思決定パッケージには、意思決定パッケージの実施に含まれる費用を識別し正当化する	はい	はい	はい - XML	意思決定パッケージのタイプ

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
	予算要求が含まれます。				
意思決定パッケージの属性	意思決定パッケージのグループ化、フィルタ、または並べ替えに使用するカスタム属性	はい	はい	はい - XML	スマート・リスト
意思決定パッケージのタイプ	意志決定パッケージや予算策定者が作成可能な予算要求の種類を定義する基本的なデータや動作を指定するテンプレート	いいえ	いいえ	はい - XML	関連付けられたフォーム、マッピング、ディメンション
為替レート	ある通貨から別の通貨に変換する際に使用する数値です。たとえば、1USDをEURに変換する場合、為替レートの0.8936に米ドルを乗じます。これにより、\$1に相当するユーロは0.8936と算出されます。	はい	いいえ	はい - CSV	通貨、期間、および年
プランニング・ユニット階層	予算プロセスの一部とするアプリケーションのプランニング・ユニットおよびメンバーを指定します	はい	はい	はい - XML	エンティティ、シナリオ、バージョンおよびその他の関連付けられたディメンション
レポート・マッピング	Planningアプリケーションとレポート・アプリケーションの間のディメンションをマッピングすると、集計のためにレポート・アプリケーションのPlanningデータに対するレポート、スマート・リストで	はい	はい	はい - XML	関連付けられたディメンションおよびスマート・リスト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
	の集約および問合せ、および複数のレポート・アプリケーションへのPlanningデータのリンクが有効になります				
スマート・リストこのアーティファクトはEPM ArchitectベースのアプリケーションのPlanningアプリケーションの下には表示されません。	ユーザーが、データを入力するかわりにセルのデータからアクセスするカスタム・ドロップダウン・リスト	いいえ	いいえ	はい - CSV	なし
拡散パターン	親から子へのデータを分散する方法を判別するカスタム拡散パターンです。パターンは、「一括割当て」および「グリッド分散」メニューから選択できます。	いいえ	いいえ	はい - XML	なし
代替変数	定期的に変更される情報のグローバル・プレースホルダ	いいえ	いいえ	いいえ	なし
タスク・リスト	特定のユーザーについて、タスクの詳細ステータスを示すリスト	はい	いいえ	はい - XML	タスクのタイプがデータ・フォームの場合は、関連付けられたデータ・フォームになります。タスクのタイプがワークふとの場合は、プランニング・ユニットになります。

プラン・タイプのアーティファクト

プラン・タイプはPlanningアプリケーション情報をEssbaseデータベースに保管するために使用されます。別のデータベースには、アプリケーションの各プラン・タイプのデータが保管されます。また、このデータベースには、アプリケー

ションの設計、サイズおよびパフォーマンスを最適化するためにこのプラン・タイプに関連した情報が含まれています。デフォルトのPlanningプラン・タイプには、Plan1、Plan2、およびPlan3があります。

表43 プラン・タイプのアーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
属性ディメンション	ディメンションのリスト。ディメンションのメンバーの属性や特質に基づいて分析が可能	はい	いいえ	はい - CSV	なし
計算スクリプト	データベースの集計方法や集約方法を定義する一連のコマンドです。集計プロセスとは別に、割当てや他の計算ルールを指定するコマンドが計算スクリプトに含まれることもあります。	はい	いいえ	はい	なし
Calculation Managerルール	コンポーネントでグループ化されたテンプレートと計算を含めることのできるオブジェクト	はい	はい	はい - XML	なし
データ・フォーム	Webブラウザなどのインタフェースからデータベースにデータを入力でき、データまたは関連テキストを表示して分析できるグリッド表示です。一部のディメンション・メンバー値は固定され、データが特定の視点から表示されます。 データ・フォームには、ビジネス・ポリシーおよびプラクティスの実装に役立つ事前定義	はい	いいえ	はい - XML	関連付けられたメニュー、ユーザー変数およびディメンション

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
	されたデータ検証ルールが含まれます。入力したデータが検証ルールに違反した場合は、データ・フォームにエラーまたは警告が生成されます。				
レポート・スクリプト	プロダクション・レポートを生成する、Planningレポート・ライター・コマンドを格納したテキスト・ファイル	はい	いいえ	はい	なし
ルール・ファイル	必要な一連の結果値を生成するためにアプリケーション内に作成される論理式または式	はい	いいえ	いいえ(はい - Oracle Essbase Administration Services)	なし
標準ディメンション	1つのプラン・タイプに関連付けられているディメンションのリスト	はい	いいえ	はい - CSV	属性ディメンション(存在する場合)
代替変数	定期的に変更される情報のグローバル・プレースホルダ	いいえ	いいえ	いいえ	なし

リレーショナル・データのアーティファクト

表44 リレーショナル・データのアーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
勘定科目の注釈	プレーン・テキストまたはURLリンクになっている、勘定科目に関連付けられたコメント	いいえ	いいえ	はい - XML	Account、Entity、Scenario、およびVersionの各ディメンション
通知	システムへのログイン時に、ホーム・	いいえ	いいえ	はい - XML	なし

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
	ページに表示される情報				
セル・テキスト	セルに関連付けられたテキストの注釈	いいえ	いいえ	はい - XML	なし
プランニング・ユニット	シナリオ、バージョン、およびエンティティの交差におけるデータ・スライス。プラン・データの準備、確認、注釈付けおよび承認のための基本単位	いいえ	いいえ	はい - XML	Entity, Scenario, およびVersionの各ディメンション
サポート詳細	セルの値を算出した計算および仮定	いいえ	いいえ	はい - XML	なし
タブレット・アクセス	タブレット・ユーザー・インタフェースで使用可能なアーティファクト (フォーム、タスク、ルールおよびルールセット)。	いいえ	いいえ	はい - XML	フォーム、タスク、ルールおよびルールセット
テキスト値	データ型がテキストのセルにデータを保管するテキスト	いいえ	いいえ	はい - XML	なし

セキュリティのアーティファクト



注:

アクセス権限は、リソースに対してユーザーが実行できる一連の操作です。

表45 セキュリティのアーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
アクセス権限: ユーザー	有効なシステム・ユーザーとしてプロビジョニングされた企業の担当者	いいえ	いいえ	はい - XML	なし

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
アクセス権限: グループ	複数のユーザーに同様のアクセス権限を割り当てるためのコンテナ	はい	いいえ	はい - XML	なし

Planningの移行に関する考慮事項

- ・ ライフサイクル管理でのPlanning間の移行操作は、時間がかかります。
- ・ Planningアーティファクトには、フォームにはディメンションの依存関係があるなど、依存関係があるものもあります。ライフサイクル管理では、フォームに必要なディメンション・メンバーのみが移行されるのではなく、すべてのディメンションが移行されます。必要な依存関係を手動で選択する必要があります。[43ページのアーティファクトの移行](#)を参照してください。
- ・ ソース・アプリケーションと宛先アプリケーションのプラン・タイプ、カレンダー、および単一通貨や複数通貨の設定はすべて同じである必要があります。
- ・ Planningがターゲット環境にない場合、ライフサイクル管理によってアプリケーション・シェルが作成されます。
- ・ ライフサイクル管理を使用するには、EssbaseがShared Servicesモードになっている必要があります。
- ・ EssbaseアーティファクトはPlanningアプリケーション・ノードの下に表示され、データ・アーティファクトはEssbaseデータ・カテゴリの下に表示されます。
- ・ テストから本番環境への最初の移行の場合、Planningノードの下にあるすべてのPlanning関連のアーティファクトを移行することをお勧めします。
- ・ Essbaseデータの移行は、増分の移行ではなく、テストから本番環境への最初の移行の場合のみお勧めします。
- ・ Planningのデータ・アーティファクトをエクスポートまたはインポートするには、ライフサイクル管理に共有ファイル・システム・パスが必要です。
- ・ 分散環境間でデータ移行を可能にするには、`filesystem.artifact.path`が共有パスである必要があります。ライフサイクル管理ファイル・システムの場所は、配布された設定のすべての環境からアクセスできる必要があります。

Planningアプリケーションの移行と製品間アーティファクトの依存関係

Planningアプリケーションをある環境から他の環境(開発からテストまたはテストから本番環境)に移行する場合は、製品間のアーティファクトの依存関係が存在します。Planningでは、Planning固有のアーティファクトとともに、他の製品からアーティファクトを移行する必要があります。

- ・ Planningの製品間アーティファクトには、次があります:
 - Shared Servicesのネイティブ・ディレクトリ(ユーザー、グループおよびプロビジョニング)
 - Essbase



注:

Planningアーティファクトとともに表示されるEssbaseアーティファクトは、ルール・ファイル、計算スクリプト、および代替変数です。

○オプション: Reporting and Analysis (Financial ReportingとWeb Analysis)

- Planning Performance Management Architectには、次の製品間アーティファクトが必要です。

○Performance Management Architect

○Shared Servicesのネイティブ・ディレクトリ(ユーザー、グループおよびプロビジョニング)

○Oracle Hyperion Calculation Manager

○Reporting and Analysis (Financial ReportingとWeb Analysis)



注:

EssbaseアーティファクトはPlanningアーティファクトと一緒に表示されます。

移行におけるエクスポートとインポートのオプション

インポート時に、Planningアーティファクトは、宛先環境で既存のアーティファクトを置換します。インポート時にアーティファクトをマージまたは削除できません。

Planningには、製品固有のエクスポート・オプションおよびインポート・オプションはありません。



注:

以前のリリースでは、Shared Services Consoleにおいて、Planning用に「依存アーティファクトを含む」オプションが提供されていました。このオプションは存在しません。かわりに、必要な依存関係を手動で選択する必要があります。

サンプルの移行定義ファイル

ここで提供されているサンプル移行定義ファイルは、Planningアプリケーションの移行用です。Planningの移行定義ファイルで使用されている製品コードはHPで、サンプル・アプリケーションはSampAppです。



注:

移行定義ファイルで正しい構文が使用されていない場合、「MDFファイルのフォーマットが正しくありません」というエラーが表示されます。

ファイル・システムへのエクスポート

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
<Package>
  <LOCALE>en_US</LOCALE>
  <User name="" password="" />
  <Task>
    <Source type="Application" product="HP" project="Default Application Group"
application="HPAuto1" />
    <Target type="FileSystem" filePath="/HP-HPAuto1" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Configuration" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Global Artifacts" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Plan Type" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Relational Data" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Security" pattern="*" />
  </Task>
</Package>
```

ファイル・システムからのインポート

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
<Package>
  <LOCALE>en_US</LOCALE>
  <User name="" password="" />
  <Task>
    <Source type="FileSystem" filePath="/HP-HPAuto1" />
    <Target type="Application" product="HP" project="Default Application Group"
application="HPAuto1" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Configuration" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Global Artifacts" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Plan Type" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Relational Data" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Security" pattern="*" />
  </Task>
</Package>
```

ライフサイクル管理のログ・ファイル

Planningのライフサイクル管理のログ・ファイルについては、『Oracle Enterprise Performance Management Systemインストールおよび構成トラブルシューティング・ガイド』に記載されています。



Profitability and Cost Managementとライフサイクル管理

この項の内容:

Profitability and Cost Managementアーティファクトについて	181
Profitability and Cost Managementの役割の要件	182
Profitability and Cost Managementの移行の要件	183
Profitability and Cost Managementのアーティファクト・リスト	183
Profitability and Cost Managementの移行と製品間アーティファクトの依存関係	189
移行におけるエクスポートとインポートのオプション	189
サンプルの移行定義ファイル	190
ライフサイクル管理のログ・ファイル	191

Profitability and Cost Managementアーティファクトについて

Profitability and Cost Managementには、メタデータまたはディメンショナル・アーティファクトとモデル・アーティファクトの2つのタイプのアーティファクトがあります。

メタデータまたはディメンショナル・アーティファクトは、Performance Management Architect対応です。Profitability and Cost Management Performance Management Architect対応のアーティファクトは、Foundationアプリケーション・グループのEPMAノードの下にリストされます。このアーティファクトについては、[151ページの付録H「Performance Management Architectとライフサイクル管理」](#)を参照してください。

モデル・アーティファクトは、Performance Management ArchitectからのProfitability and Cost Managementのデプロイメントの際にユーザーによって定義されたフォルダにリストされます。

Profitability and Cost Managementアプリケーションには次の2種類があります: 標準Profitability and Cost Managementと詳細Profitability and Cost Managementです。ライフサイクル管理を使用して、これらの両方のアプリケーションのモデル・アーティファクトのリポジトリ・コンテンツを移行します。

標準Profitability and Cost Managementモデル・アーティファクト

- AssignmentRules
- Drivers
- Model
 - AssignmentRuleSelections
 - DriverExceptions
 - DriverRules

- RegularAssignments
- POV
- Preferences
- SmartViewQueries
- Stages

詳細Profitability and Cost Managementモデル・アーティファクト

- AssignmentRules
- CalculationConfig
- Drivers
- Model
 - POV1: ステージ1
 - CalculationRules
 - AssignmentRuleSelections
 - DriverExceptions
 - DriverRules
 - POV2: ステージ1
 - CalculationRules
 - AssignmentRuleSelections
 - DriverExceptions
 - DriverRules
- POV
- Preferences
- Processes
- Scripts
- SQLTemplates
- Stages
- TableRegistration
 - Tables
 - TableJoins
- Tasks

Profitability and Cost Managementのモデル・アーティファクト・リストについては、[183ページのProfitability and Cost Managementのアーティファクト・リスト](#)を参照してください。

Profitability and Cost Managementの役割の要件

Profitability and Cost Managementのライフサイクル管理の操作を行うユーザーには、次の役割が割り当てられている必要があります:

- LCM管理者
- パワー・ユーザー
- 管理者

『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemユーザーおよび役割セキュリティガイド』を参照してください。

Profitability and Cost Managementの移行の要件

- Shared ServicesとProfitability and Cost Managementをインストールして構成し、これらが実行されていることを確認します。『Oracle Enterprise Performance Management Systemインストールおよび構成ガイド』を参照してください。
- ライフサイクル管理の操作を行っているユーザーに、LCM管理者、パワー・ユーザー、およびアプリケーション管理者の役割が割り当てられていることを確認します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemユーザーおよび役割セキュリティガイド』を参照してください。
- Performance Management ArchitectからProfitability and Cost Managementにアプリケーションをデプロイします(すべてのディメンションが使用可能なことを確認してください)。
- Profitability and Cost Management Performance Management Architectアプリケーションの場合、非ディメンショナル・アーティファクトを移行する前に、まずPerformance Management Architectディメンションを移行する必要があります。Performance Management Architectアーティファクトのリストについては、151ページの付録H「Performance Management Architectとライフサイクル管理」を参照してください。

Profitability and Cost Managementのアーティファクト・リスト

サブトピック

- [アーティファクト・リストについて](#)
- [標準Profitability and Cost Managementモデル・アーティファクト](#)
- [詳細Profitability and Cost Managementモデル・アーティファクト](#)
- [計算制御アーティファクト](#)

Profitability and Cost Managementモデル・アーティファクトは、Performance Management ArchitectからのProfitability and Cost Managementのデプロイメントの際にユーザーによって定義されたフォルダにリストされます。



注:

Shared Services Consoleに表示されるアーティファクトは、実装ごとに異なります。

アーティファクト・リストについて

アーティファクト・リストについて次のことに注意してください:

- **アーティファクト** - アーティファクト名
- **説明** - アーティファクトの説明
- **最終変更時間** - このパラメータがサポートされている場合は、アーティファクトがインポートされた時間を反映します。アーティファクトの中には、最終変更時間のパラメータをサポートしないものがあります。
- **最終変更ユーザー** - このパラメータがサポートされている場合は、アーティファクトを最後に変更したユーザーを反映します。アーティファクトの中には、最終変更ユーザーのパラメータをサポートしないものがあります。
- **ファイル・システムで編集可能** - 「はい」の場合、アーティファクトはテキスト・エディタを使用してファイル・システム上で編集できます。「いいえ」の場合、アーティファクトは製品内でのみ編集できます。NAの場合、アーティファクトは編集できません。
- **依存** - アーティファクトの依存関係を一覧表示します。たとえば、Profitability and Cost Managementの割当てルール・アーティファクトを移行する場合はProfitability and Cost Managementのステージ定義アーティファクトも移行する必要があります。

標準Profitability and Cost Managementモデル・アーティファクト

表46 標準Profitability and Cost Managementモデル・アーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
AssignmentRules	単一の宛先ステージのメンバー・セットおよびオプションのフィルタ・セットの集合。これらは、同じパラ	はい	いいえ	N/A	Stages

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
	メータを使用する複数の割当てに対して作成および再利用できます。				
Drivers	Profitability and Cost Managementモデル内で、割当ての値を計算します。ドライバ定義は、ソース交差値を宛先交差に割り当てる式を提供します。	はい	いいえ	N/A	なし
Model	<p>選択したPOVに基づく特定の標準Profitabilityモデルのモデル要素。次のモデル・コンポーネントがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • AssignmentRuleSelections - ソースから宛先へのデータ・フローを定義します。宛先は、ソース交差を1つ以上の宛先割当てルールにマッピングすることで定義します。 • DriverExceptions - ドライバの作成後にドライバに適用されます。ドライバは、適用先の単一交差に関連付ける必要があります。 • DriverRules - ドライバの作成後にドライバに適用されます。ドライバは、適用先のドライバ・ディメンション・メンバーに関連付ける必要があります。 • RegularAssignments - ソースから宛先へのデータ・フローを定義します。宛先は、ソース交差を単一の宛先交差にマッピングすることで定義します。 	N/A	いいえ	N/A	POV, Stages
POV	年、期間、ステータスなど、選択したスナップショット用のモデルのバージョン。	はい	いいえ	N/A	なし
Preferences	モデル全体に適用される設定。プリファレンスには、ステージ内の割当てを許可するか、またはマルチディメンショナル・ステージを持つことができるかどうかなどが含まれます。選択したモデルのEssbase接続情報	はい	いいえ	N/A	なし

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
	報は、アプリケーション・プリファレンスで指定します。				
SmartViewQueries	Profitability and Cost Managementアプリケーションに留まることにより、Essbaseキューブ(ASOおよびBSO)のデータの間合せを実行します。	はい	はい	いいえ	なし
Stages	Profitability and Cost Managementモデルでの、モデル内のプロセスまたはアクティビティ。	はい	いいえ	N/A	なし

詳細Profitability and Cost Managementモデル・アーティファクト

表47 詳細Profitability and Cost Managementモデル・アーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
AssignmentRules	宛先ステージまたはソース・ステージ内のセットを識別するオプションのフィルタ・セットおよびメンバー・セットの集合。	はい	いいえ	N/A	Stages、TableRegistration
CalculationConfig	フィルタ編集拡張、ドライバ操作タイプなど、使用可能な計算処理。 注: CalculationConfigアーティファクトのインポートまたはエクスポートはお勧めしません。管理者にこのタイプのアーティファクトが必要かどうかを確認してください。	はい	いいえ	N/A	Processes
Drivers	詳細Profitabilityモデルで使用可能なドライバ。ドライバは割当ての値を計算し、ソース交差値を宛先交差に割り当てる式を提供します。	はい	いいえ	N/A	Preferences、CalculationConfig
Model	選択したPOVに基づく特定の詳細Profitabilityモデルのモデル要素。次のモデル・コンポーネントがあります。 • 割当てと計算フローの定義に使用されるCalculationRules最上位モデル定義のアーティファクト。CalculationRulesのタイプは、計	N/A	いいえ	N/A	Stages、AssignmentRules、Dri

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
	<p>算済メジャー、単一ソース割当て、複数ソース割当てです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • AssignmentRuleSelections - ソースから宛先へのデータ・フローを定義します。宛先は、ソース交差を1つ以上の宛先割当てルールにマッピングすることで定義します。 • DriverExceptions - ドライバの作成後にドライバに適用されます。ドライバは、適用先の単一交差に関連付ける必要があります。 • DriverRules - ドライバの作成後にドライバに適用されます。ドライバは、適用先のドライバ・ディメンション・メンバーに関連付ける必要があります。 				
POV	年、期間、ステータスなど、選択したスナップショット用の、モデルの特定のバージョン。	はい	いいえ	N/A	なし
Preferences	<p>モデル全体に適用される設定。</p> <p>注:</p> <p>アプリケーションをインポートする前に、model.data.schemaプリファレンスをターゲット・システムでの正しい値に設定することをお勧めします。ターゲット・システムにこのプリファレンスの値が設定されていると、インポート時に上書きされません。</p>	はい	いいえ	N/A	なし
Processes	<p>計算のタイプごとに定義されているプロセスの定義。</p> <p>注:</p> <p>Processesアーティファクトのインポートまたはエクスポートはお勧めしません。管理者にこのタイプのアーティファクトが必要かどうかを確認してください。</p>	はい	いいえ	N/A	Tasks
スクリプト	計算の前後に実行されるHPM_SQL_SCRIPT表のHPM製品スキーマに保存されているカスタムのSQLスクリプト。	N/A	いいえ	N/A	なし

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
SQLTemplates	各計算タイプ内でタスクを実行するように発行されたSQLの定義。 注: SQLTemplatesアーティファクトのインポートまたはエクスポートはお薦めしません。管理者にこのタイプのアーティファクトが必要かどうかを確認します。	はい	いいえ	N/A	なし
Stages	詳細Profitabilityモデルでは、ソース・ステージと宛先ステージがあります。	はい	いいえ	N/A	Preferences、TableRegistration
TableRegistration	ユーザー定義表の詳細Profitabilityアプリケーションへの登録およびマッピング。アプリケーションのソースおよび宛先表の定義、関連する参照表の表結合。	N/A	いいえ	N/A	Preferences
Tasks	計算のタイプごとに実行されるタスクの定義。 注: Tasksアーティファクトのインポートまたはエクスポートはお薦めしません。管理者にこのタイプのアーティファクトが必要かどうかを確認します。	はい	いいえ	N/A	SQLTemplates

計算制御アーティファクト

詳細Profitability and Cost Managementアプリケーションでは、計算プロセスと呼ばれる高度な新しい構成を使用して、モデルの計算方法を定義したり、リレーショナル・データベース内で実行する特定の他の処理操作を定義します。これらの計算制御アーティファクトは、ドライバ操作タイプおよびその他のプロセス・タイプに関連しています。詳細は、『Oracle Hyperion Profitability and Cost Management管理者ガイド』の詳細計算オプションに関する項を参照してください。

次のLifecycle Management計算制御アーティファクトは、計算プロセス定義および管理に関連しています:

- CalculationConfig
- Processes
- SQLTemplates
- Tasks

これらのアーティファクトの変更は、高度でドキュメントに記載されていないアクティビティであり、Oracleサポートの指示がある場合のみ実行できます。そのため、Oracleサポートによる指示があった時にのみ、計算制御アーティファクトをエクスポートまたはインポートすることが適切です。Oracleサポートからそれ以外の指示がないかぎり、Shared

Services Consoleを使用してアプリケーション・アーティファクトをエクスポートまたはインポートする場合には、これらの計算プロセス・アーティファクトは無視してください。

異なるデータベース・プラットフォーム(OracleまたはSQL Serverなど)または異なるバージョンの製品を使用している可能性がある環境でアプリケーションを移行する場合、これらのアーティファクトをエクスポートおよびインポートの対象から除外することが特に重要です。エクスポートする前にこれらのアーティファクトを選択解除してエクスポートファイルから除外します。これらのアーティファクトのいずれかを含む以前のエクスポートからアプリケーション・アーティファクトをインポートしている場合、インポートする前に確実に選択解除してください。

Profitability and Cost Managementの移行と製品間アーティファクトの依存関係

Profitability and Cost Managementアプリケーションをある環境から他の環境(開発からテストまたはテストから本番環境)に移行する場合は、製品間のアーティファクトの依存関係が存在します。Profitability and Cost Managementでは、Profitability and Cost Management固有のアーティファクトとともに、次の他の製品からアーティファクトを移行する必要があります。

- Shared Servicesのネイティブ・ディレクトリ(ユーザー、グループおよびプロビジョニング)
- Essbase(標準Profitability and Cost Managementのみ)

移行におけるエクスポートとインポートのオプション

サブトピック

- [移行のエクスポート・オプション](#)
- [移行のインポート・オプション](#)

移行のエクスポート・オプション

Profitability and Cost Managementには、製品固有のエクスポート・オプションはありません。



注:

標準Profitability and Cost Managementの場合、EssbaseアーティファクトがEssbaseアプリケーションの下にエクスポートされます(アウトライン、データ、計算スクリプト)。

移行のインポート・オプション

Profitability and Cost Managementには、製品固有のエクスポート・オプションはありません。



注:

ライフサイクル管理により、ターゲット・モデルに存在しない場合のみ、アーティファクトがインポートされます。既存のアーティファクトは置換またはマージされません。

サンプルの移行定義ファイル

Profitability and Cost Managementの移行定義ファイルに使用される製品コードはHPMです。



注:

移行定義ファイルで正しい構文が使用されていない場合、「MDFファイルのフォーマットが正しくありません」というエラーが表示されます。

ファイル・システムへのエクスポート

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
<Package>
  <LOCALE>en_US</LOCALE>
  <User name="" password="" />
  <Task>
    <Source type="Application" product="HPM" project="Default Application Group"
    application="Bikes72" />
  </Task>
</Package>
```

```
<Target type="FileSystem" filePath="/HPCM-Bikes72" />
<Artifact recursive="true" parentPath="/AssignmentRules" pattern="*" />
<Artifact recursive="true" parentPath="/Drivers" pattern="*" />
<Artifact recursive="true" parentPath="/Model" pattern="*" />
<Artifact recursive="true" parentPath="/POV" pattern="*" />
<Artifact recursive="true" parentPath="/Preferences" pattern="*" />
<Artifact recursive="true" parentPath="/Stages" pattern="*" />
</Task>
</Package>
```

ファイル・システムからのインポート

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
<Package>
  <LOCALE>en_US</LOCALE>
  <User name="" password="" />
  <Task>
    <Source type="FileSystem" filePath="/HPCM-Bikes72" />
    <Target type="Application" product="HPM" project="Default Application Group"
application="Bikes72" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/AssignmentRules" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Drivers" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Model" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/POV" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Preferences" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Stages" pattern="*" />
  </Task>
</Package>
```

ライフサイクル管理のログ・ファイル

Profitability and Cost Managementのライフサイクル管理のログ・ファイルは、『Oracle Enterprise Performance Management Systemインストールおよび構成トラブルシューティング・ガイド』に記載されています。



注:

詳細は、S9ロギングのロギング・セクションで説明されています。



Reporting and Analysis とライフサイクル管理

この項の内容:

Reporting and Analysisのアーティファクトについて	193
Reporting and Analysisの役割の要件	193
Reporting and Analysisの移行の前提条件	194
Reporting and Analysisのアーティファクト・リスト	196
ファイル・システム上での個別のReporting and Analysisアーティファクトの編集	205
Reporting and Analysisのアーティファクト・タイプ	206
Reporting and Analysisの移行に関する考慮事項	208
Reporting and Analysisアプリケーションの移行および製品間のアーティファクトの依存関係	208
移行におけるエクスポートとインポートのオプション	208
サンプルの移行定義ファイル	209
ライフサイクル管理のログ・ファイル	210

Reporting and Analysisのアーティファクトについて

ライフサイクル管理は、次のReporting and Analysisモジュールのリポジトリのコンテンツを移行する場合に使用します:

- Oracle Hyperion Financial Reporting
- Oracle Hyperion Interactive Reporting
- Oracle Hyperion SQR Production Reporting
- Oracle Hyperion Web Analysis

Reporting and Analysisのアーティファクトについては、[196ページのReporting and Analysisのアーティファクト・リスト](#)を参照してください。

Reporting and Analysisの役割の要件

Reporting and Analysisのライフサイクル管理操作を実行するユーザーには、次の役割が割り当てられている必要があります:

- LCM管理者
- Reporting and Analysisグローバル管理者



注:

Reporting and Analysisグローバル管理者の役割は、Financial Reportingのアーティファクトをリリース9.3.xからエクスポートする場合に必要です。

『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemユーザーおよび役割セキュリティガイド』を参照してください。

Reporting and Analysisの移行の前提条件

- Shared ServicesおよびReporting and Analysisをインストールして構成し、これらが実行中であることを確認します。『Oracle Enterprise Performance Management Systemインストールおよび構成ガイド』を参照してください。
- ライフサイクル管理の操作を行っているユーザーにLCM管理者およびReporting and Analysisグローバル管理者の役割が割り当てられていることを確認します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemユーザーおよび役割セキュリティガイド』を参照してください。
- Shared Servicesネイティブ・ディレクトリのアーティファクト(ユーザー、グループ、役割および割り当てられた役割)を移行します。60ページのネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)の移行を参照してください。
- 宛先ホストのProduction Reportingでのジョブ・サービス・プロパティを構成します。195ページの宛先アプリケーションにおけるProduction Reportingジョブ・サービス・プロパティの構成を参照してください。
- Interactive Reportingのジョブにデータ・アクセス・サービスのデータ・ソースを作成します。195ページの宛先アプリケーションでのInteractive Reportingデータ・アクセス・サービスのデータ・ソースの作成を参照してください。

宛先アプリケーションにおけるProduction Reportingジョブ・サービス・プロパティの構成

Production Reportingのアーティファクトをインポートする前に、Production Reportingの宛先ホストのジョブ・サービス・プロパティを構成する必要があります。

- ▶ Production Reportingのジョブ・サービス・プロパティを構成するには:
 1. EPM WorkspaceにReporting and Analysis管理者としてログインします。
 2. 「ナビゲート」、「管理」、「Reporting and Analysis」、「Production Reportingエンジン」の順に選択します。
 3. PRエンジンが存在しない場合、「Production Reportingエンジン」タブの空の領域を右クリックし、「新規PRエンジンの作成」を選択します。
 4. 「エンジン・タイプ」にSQR製品バイナリの場所を追加し、「OK」をクリックします。

宛先アプリケーションでのInteractive Reportingデータ・アクセス・サービスのデータ・ソースの作成

Interactive Reportingジョブの宛先アプリケーションに、データ・アクセス・サービス(DAS)のデータ・ソースを作成します。

- ▶ Interactive ReportingのDASデータ・ソースを作成するには:
 1. Oracle Hyperion Enterprise Performance Management WorkspaceにReporting and Analysis管理者としてログインします。
 2. 「ナビゲート」、「管理」、「Reporting and Analysis」、「サービス」の順に選択します。
 3. Interactive Reportingのデータ・アクセス・サービスのプロパティを編集します。
 4. 「データ・ソース」タブを選択します。「新規」をクリックして、データ・ソースを作成します。
 5. データ・ソースの詳細を追加します。



注:

DASデータ・ソースの名前は、ソース・アプリケーションでの名前と一致する必要があります。名前が一致しない場合、DASサービスは該当するデータ・ソースを検出できません。これは、その名前がInteractive Reporting接続ファイル(.oce)で使用されているためです。このファイルは、移行時にも変更されません。

Reporting and Analysisのアーティファクト・リスト

サブトピック

- [アーティファクト・リストについて](#)
- [物理リソースのアーティファクト](#)
- [セキュリティのアーティファクト](#)
- [スケジュール・オブジェクトのアーティファクト](#)
- [製品プリファレンスのアーティファクト](#)
- [リポジトリ・オブジェクトのアーティファクト](#)
- [管理オプションのアーティファクト](#)

Reporting and Analysisのアーティファクトは、Shared Services Console内のReporting and Analysisアプリケーション・グループに一覧表示されます。



注:

Shared Services Consoleに表示されるアーティファクトは、実装ごとに異なります。

アーティファクト・リストについて

アーティファクト・リストについて次のことに注意してください:

- **アーティファクト - アーティファクト名**
- **説明 - アーティファクトの説明**
- **最終変更時間** - このパラメータがサポートされている場合は、アーティファクトがインポートされた時間を反映します。アーティファクトの中には、最終変更時間のパラメータをサポートしないものがあります。
- **最終変更ユーザー** - このパラメータがサポートされている場合は、アーティファクトを最後に変更したユーザーを反映します。アーティファクトの中には、最終変更ユーザーのパラメータをサポートしないものがあります。
- **ファイル・システムで編集可能** - 「はい」の場合、アーティファクトはテキスト・エディタを使用してファイル・システム上で編集できます。「いいえ」の場合、アーティファクトは製品内でのみ編集できます。



注:

Reporting and Analysisのアーティファクトを編集する場合の考慮事項があります。[205ページのファイル・システム上での個別のReporting and Analysisアーティファクトの編集](#)を参照してください。

- **依存** - アーティファクトの依存関係を一覧表示します。たとえば、反復タイム・イベントのアーティファクトを移行する場合は、カスタム・カレンダーのアーティファクトも移行する必要があります。

物理リソースのアーティファクト

「物理リソース」ディレクトリには、プリンタや出力ディレクトリなどのシステムによって管理されるオブジェクトを表すアーティファクトが含まれています。

表48 物理リソースのアーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
定義済のプリンタ	ジョブが実行中の場合に印刷サーバーで使用可能なプリンタ	いいえ	いいえ	はい - XML	なし
出力ディレクトリ	エクスポート・ファイルまたは Interactive Reportingのドキュメントを保存するディレクトリ	いいえ	いいえ	はい - XML	なし

セキュリティのアーティファクト

「セキュリティ」ディレクトリには、ユーザー・プリファレンスのアーティファクトが含まれています。

表49 セキュリティのアーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
ユーザー・プリファレンス	デフォルトの起動オプション	いいえ	いいえ	はい - XML	関連するリポジトリ・オブジェクト

スケジュール・オブジェクトのアーティファクト

スケジュール・オブジェクト・ディレクトリには、イベント、カレンダー、ジョブ・スケジュールおよびジョブ・パラメータなどのスケジュール済のオブジェクトを表すアーティファクトが含まれています。

表50 スケジュール・オブジェクトのアーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
外部でトリガーされるイベント	ジョブを実行するトリガー	はい	はい	はい - XML	なし
反復タイム・イベント	ジョブを実行するトリガー	はい	はい	はい - XML	カスタム・カレンダー、外部でトリガーされるイベント
カレンダー	ユーザー定義の期間、およびその関係です。カレンダー会計年度は、Q1、Q2、Q3およびQ4から構成されます。	いいえ	いいえ	はい - XML	なし

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
ジョブのスケジュール	実行するジョブと、ジョブを実行する時刻やジョブ・パラメータ・リストを指定します	はい	はい	はい - XML	イベント、ジョブ・パラメータ、ジョブ
ジョブ・パラメータ	ジョブ・パラメータには「個人」と「パブリック」の2つがあります。個人はその所有者のみがアクセスでき、パブリックはジョブ・パラメータのACLにアクセス権があるすべてのユーザーがアクセスできます。	いいえ	はい	はい - XML	ジョブ、物理リソース

製品プリファレンスのアーティファクト

製品プリファレンスのディレクトリには、お気に入り、個人用ページ、サブスクリプションなどの製品プリファレンスを表すアーティファクトが含まれています。

表51 製品プリファレンスのアーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
お気に入り	ユーザーが頻繁に使用するドキュメントを特別なメニューに追加できる機能	いいえ	いいえ	はい - XML	なし
個人用ページ	リポジトリ情報を参照するための個人用ウィンドウです。表示する情報、およびレイアウトと色を選択します。	いいえ	いいえ	はい - XML	なし
サブスクリプション	新しいコンテンツに登録できるようにするコントロール	いいえ	はい	はい - XML	関連するリポジトリ・オブジェクト

リポジトリ・オブジェクトのアーティファクト

「リポジトリ・オブジェクト」ディレクトリには、フォルダ、サード・パーティのコンテンツ、ショートカット、URLなどの、リポジトリ・オブジェクトを表すアーティファクトと、Financial Reporting、Interactive ReportingおよびWeb Analysisに特有なアーティファクトが含まれています。

表52 リポジトリ・オブジェクトのアーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能? ¹	依存
フォルダ	他のファイルを含んで階層を形成するファイル	はい	はい	はい - XML (メタデータのみ)	なし
サード・パーティのコンテンツ	Microsoft Word やExcelなどの補助的な製品からインポートされたコンテンツ	はい	はい	はい - XML ²	なし
ショートカット	既存のリポジトリ・オブジェクトへのショートカット	はい	はい	はい - XML (メタデータのみ)	対応する既存のリポジトリ・オブジェクト
URL	別のオブジェクトとしてパブリッシュされたWebリンク	はい	はい	はい - XML (メタデータのみ)	なし
Oracle Hyperion Financial Reporting, Fusion Edition の注釈	特定のレポート・オブジェクトおよびデータで共有できるコラボレーション情報	はい	はい	いいえ	次のタイプのFinancial Reportingオブジェクト: <ul style="list-style-type: none"> • データ・ソース • グリッド: データ・ソース(ディメンションPOVなし) • テキスト、チャート、グリッドまたはイメージ • セルまたは部分的なPOV (たとえば、レポートの行または列)
Financial Reportingのブック	同じ種類のFinancial Reportingドキュメントのグループを保持するコンテナ。ブックでは、	はい	はい	はい - XML (メタデータのみ)	レポート、サード・パーティのドキュメント

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能? ¹	依存
	ディメンション・セクションやディメンション変更を指定できます。				
Financial Reportingのバッチ	転送または印刷を目的とした1つのグループにまとめられたファイルの累積	はい	はい	はい - XML (メタデータのみ)	レポート、ブック、関連するFinancial Reportingのリポジット・オブジェクト
Financial Reportingチャート	棒グラフ、折れ線グラフ、複合グラフまたは円グラフを使用してデータをグラフィカルに表示するレポート・オブジェクト	はい	はい	はい - XML (メタデータのみ)	なし
Financial Reportingのグリッド	行、列およびページ軸にデータを取得するレポート・オブジェクト	はい	はい	はい - XML (メタデータのみ)	なし
Financial Reportingのイメージ	グラフィックまたはイメージ・ファイルを含むレポート・オブジェクト	はい	はい	はい - XML (メタデータのみ)	なし
Financial Reportingのレポート	テキスト・ボックス、イメージ、グリッドおよびチャートなどの動作や外観が事前定義されたFinancial Reportingドキュメント	はい	はい	はい - XML (メタデータのみ)	イメージ、グリッド、テキストボックス、グラフ
Financial Reportingの行と列のテンプレート	グリッド内の行や列に基づいたテンプレート	はい	はい	はい - XML (メタデータのみ)	なし
Financial Reportingのスケジュール済バッチ・ジョブ	実行するバッチ・ジョブと、ジョブを実行する時刻やジョブ・パラメータ・リスト	はい	はい	いいえ	財務レポート、Financial Reportingブック

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能? ¹	依存
Financial Reportingスナップショット・ブック	同じ種類のFinancial Reportingドキュメントのグループを保持するコンテナ。すべてのFinancial Reportingドキュメントはその期間の静的データを含んでいるスナップショットに変換されます。	はい	はい	はい - XML (メタデータのみ)	なし
Financial Reportingスナップショット・レポート	ドキュメントに静的データを含むFinancial Reportingドキュメントは、データ・ソースから切断され、データが変更されたときに更新されません。	はい	はい	はい - XML (メタデータのみ)	なし
Financial Reportingのテキスト	Financial Reportingレポートに関連付けることができるテキスト・オブジェクト	はい	はい	はい - XML (メタデータのみ)	なし
Financial ReportingのユーザーPOV	データ・ソースのユーザー固有の視点	はい	はい	いいえ	財務レポート
汎用ジョブ	汎用ジョブ・ファクトリに対して実行中のジョブ	はい	はい	はい - XML (メタデータのみ)	汎用ジョブ、必要なファイル、カスタム・フォーム
汎用ジョブの出力	汎用ジョブからの出力	はい	はい	はい - XML (メタデータのみ)	汎用ジョブ
Interactive Reportingのドキュメント	データベースから情報を取得し、情報を分析し、レポートを構築するために作成および使用するファイル	はい	はい	いいえ ³	OCEファイル

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能? ¹	依存
Interactive Reportingジョブの出力	Interactive Reportingジョブからの出力	はい	はい	はい - XML (メタデータのみ)	Interactive Reportingジョブ
OCEファイル	Interactive Reportingデータベース接続	はい	はい	はい - XML (メタデータのみ)	接続メタデータが含まれるその他のOCEファイル
Production Reportingのジョブ	出力を生成するために起動できる特別なプロパティを持つドキュメント	はい	はい	はい - XML	データソース、必要なファイル(データ・ファイル、イメージなど)
Production Reportingジョブの出力	Production Reportingジョブからの出力	はい	はい	はい - XML (メタデータのみ)	Production Reportingのジョブ
Web Analysis データベース接続	Web Analysis データソースに接続するためのメタデータ・オブジェクト	はい	はい	はい - XML (メタデータのみ)	なし
Web Analysisのドキュメント	データ・オブジェクト内のデータ・ソースから戻されたデータの値を表示するドキュメント。複数のデータ・オブジェクトを複数の表示タイプで1つのドキュメントに表示できます。	はい	はい	はい - XML (メタデータのみ)	なし
Web Analysisリンク	他のWeb AnalysisオブジェクトにリンクされているWeb Analysisオブジェクト	はい	はい	はい - XML (メタデータのみ)	対応するWeb Analysisオブジェクト
Web Analysisプレゼンテーション	Web Analysisレポートの集合	はい	はい	はい - XML (メタデータのみ)	対応するWeb Analysisレポート
Web Analysisユーザー・プリファレンス	Web Analysis固有のユーザー・プリファレンスを示すオブジェクト	はい	はい	はい - XML (メタデータのみ)	なし

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能? ¹	依存
Web Analysis ショートカット	他のWeb AnalysisオブジェクトをポイントするWeb Analysisオブジェクト	はい	はい	はい - XML (メタデータのみ)	対応するWeb Analysisオブジェクト

¹ほとんどのリポジトリ・オブジェクトのアーティファクトの場合、ファイル・システム上で編集できるのは、アーティファクト・メタデータ(それぞれのオブジェクト・メタデータを含むXMLファイル)のみです。詳細は、[205ページのファイル・システム上での個別のReporting and Analysisアーティファクトの編集](#)を参照してください。

²サードパーティ製オブジェクトは、適切なエディタで編集する必要があります。たとえば、.docファイルのコンテンツは、Microsoft Wordで編集できます(ファイル名を変更してから編集し、ファイル名を元の名前に戻します)。

³Interactive Reportingドキュメントのバイナリは、Interactive Reportingクライアントで編集できます(ファイル名を.bqyに変更してから編集し、名前を元に戻す必要があります)が、この方法は使用しないでください。ファイルがそのメタデータと不整合を起こす可能性があるためです。Interactive Reportingドキュメントの編集は、製品内のみで行うことを強くお勧めします。

管理オプションのアーティファクト

管理オプションのディレクトリには、Production Reportingのデータソースおよび汎用ジョブ構成などの管理上のオプションを表すアーティファクトが含まれています。



注:

コンピュータに固有のアーティファクトは移行できません。これらのアーティファクトは移行を開始する前に、宛先環境で手動定義する必要があります。

表53 製品プリファレンスのアーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
Production Reportingデータ・ソース	Reporting and Analysis内のProduction Reportingジョブで使用されるデータ・ソースの定義。データベース接続タイプ(ODBCなど)、データベース接続名(ODBCデータ・ソース名など)およびオプションの環境変数などとして定義されます。	いいえ	いいえ	はい - XML	なし
汎用ジョブの構成 ¹	サード・パーティのアプリケーション	いいえ	いいえ	はい - XML	なし

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
	ンなど、汎用の Reporting and Analysisジョブを実行する場合に使用する汎用アプリケーションの定義				

¹共通の定義は移行できますが、実行可能ファイルは移行できません。実行可能ファイルは、汎用ジョブを移行した後に汎用ジョブの構成ごとに手動で定義する必要があります。

ファイル・システム上での個別のReporting and Analysisアーティファクトの編集

ファイル・システム上で編集するためにReporting and Analysisのアーティファクトをエクスポートする場合、アーティファクトは次のようにエクスポートされます。

- 一般的なオブジェクト(ドキュメント、PDFファイルなど)、BQYファイルとジョブ、OCEファイル、SQRジョブと汎用ジョブ

編集目的のこれらのファイルは、ZIP形式のアーカイブのファイル・セットとしてエクスポートされます。ZIPアーカイブには、オブジェクトのメタデータ含む1つのXMLファイルと、FSリポジトリからの1つ以上のバイナリ・ファイルが含まれます。

これらのファイルを編集するには:

- アーティファクトをエクスポートします。[55ページの編集する個々のアーティファクトのエクスポートとインポート](#)を参照してください。
- コンテンツをunzipします。
- バイナリ・ファイルの名前を書き留めてから名前を変更することで、オペレーティング・システムで適切なアプリケーションを使用してファイルを展開できるようにします(たとえば、拡張子 .BQYを追加します)。
- アーティファクトを編集します。
- バイナリ・ファイルの名前を手順3で書き留めた元の名前に変更します。
- 置換オプションを使用して、編集済のファイルをアーカイブに追加します。
- アーカイブを元のアプリケーションにインポートします。[56ページの編集後の個々のアーティファクトのインポート](#)を参照してください。

- Financial Reportingのオブジェクト

Financial Reportingのオブジェクトは、これまでに示したオブジェクトと同様にエクスポートされます。編集目的でFinancial Reportingオブジェクトをエクスポートすることで生成されたZIPアーカイブには、メタデータを含む1つのXMLファイルとReporting and Analysis内のFinancial Reportingオブジェクトを内部的に表すファイルのセットが含まれます。バイナリ表記は編集できないため、編集できるのはオブジェクトのメタデータのみです。

- Web Analysisのオブジェクト

これらのオブジェクトは、zip形式で圧縮されたXMLファイルとして表示され、Web Analysisアーティファクトのメタデータと実際のコンテンツが含まれます。これらは編集できますが、ファイル・システム上のオブジェクトを操作

するツールは提供されていません。また、ファイルが編集され、アプリケーションに戻された後の整合性の維持は保証されていません。

Reporting and Analysisのアーティファクト・タイプ

ライフサイクル管理ユーティリティでは、アーティファクト・タイプに基づくReporting and Analysisのアーティファクトの移行をサポートしています。次の表に、Reporting and Analysisの有効なアーティファクト・タイプを示します。



注:

アーティファクト・タイプのパラメータは、Shared Services Consoleでも、その他のEPM System製品でもサポートされていません。アーティファクト・タイプは、ライフサイクル管理ユーティリティでのみの機能です。

表54 Reporting and Analysisのアーティファクト・タイプ

アーティファクト	アーティファクト・タイプ
カスタム・カレンダー	Calendar
外部でトリガーされたイベント	ExternallyTriggeredEvent
フォルダ	Folder
汎用製品の構成	GenericProduct
ジョブ・パラメータ	JobParameter
ジョブ・スケジュール	JobSchedule
ユーザーのお気に入りのリスト	Favorites
OCEファイル	OCEFile
出力ディレクトリ定義	OutputDirectory
個人用ページ	PersonalPageContent
プリンタ定義	Printer
反復タイム・イベント	RecurringTimeEvent
サブスクリプション	Subscription
ユーザー・プリファレンス	UserPreferences
汎用ジョブ	ProgramCollection
汎用ジョブの出力	OutputCollection
ショートカット	ショートカット
サード・パーティのコンテンツ	application/pdf, image/gif, image/jpeg(など)
URL	URL
Oracle Hyperion Financial Reporting, Fusion Editionの注釈	application/hyperion-annotation
Financial Reportingバッチ	application/hyperion-reports-batch

アーティファクト	アーティファクト・タイプ
Financial Reportingブック	application/hyperion-reports-book
Financial Reportingのチャート・オブジェクト	application/hyperion-reports-chart
Financial Reportingのデータベース接続	application/hyperion-reports-data_source
Financial Reportingのグリッド・オブジェクト	application/hyperion-reports-grid
Financial Reportingのイメージ・オブジェクト	application/hyperion-reports-image
Financial Reportingレポート	application/hyperion-reports-report
Financial Reportingのスケジュール済バッチ	application/hyperion-reports-batch_job_object
Financial Reportingのテキスト・オブジェクト	application/hyperion-reports-text
Financial Reportingスナップショット・ブック	application/hyperion-reports-snapshot_book
Financial Reportingスナップショット・レポート	application/hyperion-reports-snapshot_report
Financial ReportingのユーザーPOV	application/hyperion-reports-pov
Financial Reportingの行と列のテンプレート・オブジェクト	application/hyperion-reports-row_column
Interactive Reportingドキュメントとジョブ	application/x-brioquery
Oracle Hyperion Interactive Reportingジョブの出力	BrioQueryOutputCollection
Production Reportingのジョブ	application/x-SQR
Production Reportingジョブの出力	SQRProgramOutput
Oracle Hyperion SQR Production Reportingサブサービス	PRSubService
Web Analysis DB接続 - Essbase	application/hyperion-analyzer-db-essbase
Web Analysis DB接続 - Financial Management	application/hyperion-analyzer-db-hfm
Web Analysis DB接続 - Relational	application/hyperion-analyzer-db-sql
Web Analysis DB接続 - SAP - Infocube	application/hyperion-analyzer-db-sap-infocube
Web Analysis DB接続 - SAP - Infoset	application/hyperion-analyzer-db-sap-infoset

アーティファクト	アーティファクト・タイプ
Web Analysis DB接続 - SAP - Multiprovider	application/hyperion-analyzer-db-sap-multiprovider
Web Analysis DB接続 - SAP - ODS	application/hyperion-analyzer-db-sap-ods
Web Analysis DB接続 - SAP - Querycube	application/hyperion-analyzer-db-sap-querycube
Web Analysis DB接続 - SSAS	application/hyperion-analyzer-db-ssas
Web Analysisレポート	application/hyperion-analyzer-report
Web Analysisプレゼンテーション	application/hyperion-analyzer-presentation
Web Analysisユーザー・プリファレンス	application/hyperion-analyzer-preferences
Web Analysisリンク	application/hyperion-analyzer-link
Oracle Hyperion Web Analysisのショートカット	application/hyperion-analyzer-shortcut

Reporting and Analysisの移行に関する考慮事項

Financial Reportingデータ・ソースはOracle Hyperion Financial Reportingレポート定義とともに移行されます。ただし、それらに対応するレポートが最初に開かれたときのみターゲットで作成されます。データ・ソースはレポートが呼び出されたときに作成された後でのみデータベース接続マネージャで表示されます。

Reporting and Analysisアプリケーションの移行および製品間のアーティファクトの依存関係

Reporting and Analysisアプリケーションをある環境から他の環境(開発からテストまたはテストから本番環境)に移行する場合は、製品間のアーティファクトの依存関係が存在します。Reporting and Analysisでは、Shared Servicesネイティブ・ディレクトリ(ユーザー、グループおよびプロビジョニング)のアーティファクトをReporting and Analysis固有のアーティファクトとともに移行する必要があります。

移行におけるエクスポートとインポートのオプション

サブトピック

- [移行のエクスポート・オプション](#)
- [移行のインポート・オプション](#)

エクスポートおよびインポートのオプションにアクセスするには、Shared Services Consoleを起動し、「管理」、移行オプションを選択します。



注:

以前のリリースでは、Shared Services Consoleにおいて、Reporting and Analysis用に「依存アーティファクトを含む」オプションが提供されていました。このオプションは使用できなくなりました。かわりに、必要な依存関係を手動で選択する必要があります(たとえば、以前の移行でインポートされなかった依存オブジェクト)。

移行のエクスポート・オプション

Reporting and Analysisのエクスポート・オプション:

ジョブ出力付きのエクスポート - 「はい」の場合は、ジョブはその出力がエクスポート・フィルタと一致しない場合でも、出力とともにエクスポートされます。デフォルト値は「はい」です。

移行のインポート・オプション

Reporting and Analysisのインポート・オプション

- **インポートでジョブ出力を除外** - 「はい」の場合、インポート・フィルタに一致している場合でもインポートではすべてのジョブ出力がスキップされます。デフォルト値は「いいえ」です。
- **新規アーティファクトのみ置換** - 「はい」の場合、リポジトリ内のアーティファクトと比較してファイル・システムの最終変更のタイムスタンプがより新しいアーティファクトのみがインポートおよび置換されます。デフォルト値は「いいえ」で、最終変更のタイムスタンプに関係なく、宛先環境の既存のアーティファクトが置換されます。

サンプルの移行定義ファイル

Reporting and Analysisの移行定義ファイルで使用される製品コードはHAVAです。



注:

移行定義ファイルで正しい構文が使用されていない場合、「MDFファイルのフォーマットが正しくありません」というエラーが表示されます。

ファイル・システムへのエクスポート

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
<Package>
  <LOCALE>en_US</LOCALE>
  <User name="" password="" />
  <Task>
    <Source type="Application" product="HAVA" project="Reporting and Analysis"
application="Reporting and Analysis" />
    <Target type="FileSystem" filePath="/RnA-Reporting and Analysis" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Admin Options" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Physical Resources" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Product Preferences" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Repository Objects" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Schedule Objects" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Security" pattern="*" />
  </Task>
</Package>
```

ファイル・システムからのインポート

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
<Package>
  <LOCALE>en_US</LOCALE>
  <User name="" password="" />
  <Task>
    <Source type="FileSystem" filePath="/RnA-Reporting and Analysis" />
    <
Target type="Application" product="HAVA" project="Reporting and Analysis"
application="Reporting and Analysis" /
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Admin Options" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Physical Resources" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Product Preferences" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Repository Objects" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Schedule Objects" pattern="*" />
    <Artifact recursive="true" parentPath="/Security" pattern="*" />
  </Task>
</Package>
```

ライフサイクル管理のログ・ファイル

Reporting and Analysisのライフサイクル管理のログ・ファイルは、『Oracle Enterprise Performance Management Systemインストールおよび構成トラブルシューティング・ガイド』に記載されています。



注:

ライフサイクル管理のログ・ファイルは、MIDDLEWARE_HOME/user_projects/epmsystem1/diagnostics/logs/migrationにあります。製品のログ・ファイル(Reporting and Analysisのエクスポート・インポート・エンジン)は、MIDDLEWARE_HOME/user_projects/epmsystem1/diagnostics/logs/ReportingAnalysis/eiengine.logにあります。



Shared Servicesと ライフサイクル管理

この項の内容:

Shared Servicesのアーティファクトについて	211
Shared Servicesの役割の要件	211
Shared Servicesの移行の前提条件	212
Shared Servicesのアーティファクト・リスト	212
Shared Servicesアプリケーションの移行と製品間アーティファクトの依存関係	215
Shared Servicesネイティブ・ディレクトリの移行オプション	215
Shared Servicesタスク・フロー移行のエクスポート・オプションとインポート・オプション	223
サンプルの移行定義ファイル	223
ライフサイクル管理のログ・ファイル	224

Shared Servicesのアーティファクトについて

次のタイプのShared Servicesのアーティファクトを移行するには、ライフサイクル管理を使用します。

- **ネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ):** Shared Servicesネイティブ・ディレクトリのアーティファクトを使用して、ユーザー、グループ、委任リスト、カスタム集約の役割、および割り当てられた役割を移行できます。製品固有のセキュリティ・アーティファクト(Oracle Hyperion Planningアクセス権限やOracle Essbaseフィルタなど)は、Shared Services Consoleの製品アプリケーション・グループに個別にリストされます。製品別のアプリケーションのセキュリティ・アーティファクト・リストについては、このガイドの付録を参照してください。
- **タスク・フロー:** Shared Servicesタスク・フローのアーティファクトを使用して、任意の環境から別の環境へタスク・フローの定義を移行したり、ファイル・システムでタスク・フローを編集したりできます。タスク・フローを使用するEPM System製品は、Financial Management、Performance Management Architect、およびProfitability and Cost Managementです。

Shared Servicesのアーティファクト・リストについては、[212ページのShared Servicesのアーティファクト・リスト](#)を参照してください。

Shared Servicesの役割の要件

Shared Servicesのライフサイクル管理の操作を行うユーザーには、LCM管理者の役割が割り当てられている必要があります。

『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。

Shared Servicesの移行の前提条件

- Shared ServicesおよびEPM System製品をインストールして構成し、これらが実行中であることを確認します。『Oracle Enterprise Performance Management Systemインストールおよび構成ガイド』を参照してください。
- ライフサイクル管理の操作を行っているユーザーにLCM管理者の役割が割り当てられていることを確認します。『Oracle Enterprise Performance Management Systemユーザー・セキュリティ管理ガイド』を参照してください。
- Shared Servicesネイティブ・ディレクトリのアーティファクトを移行するときは、ソース・アプリケーションと宛先アプリケーションの名前が一致していることを確認してください。ソースと宛先の名前が違う場合は、次のアクションを行います:
 1. ソース・アプリケーションのプロビジョニング・アーティファクトをエクスポートし、それらをシステムにダウンロードします。
 2. ソース・アプリケーションのCSVファイル(sourceapp.csvなど)で、ソース・アプリケーション・グループ名を宛先アプリケーション・グループ名に置換した後、ソース・アプリケーション名を宛先アプリケーション名に置換します。
 3. ファイル名を変更して、宛先アプリケーションの名前を使用します(destinationapp.csvなど)。
 4. 更新したLCMファイル・システム・フォルダをアップロードし、宛先アプリケーションにインポートし直します。
- Shared Servicesのネイティブ・ユーザーを環境間で移行するとき、ソース環境のユーザーをターゲット環境に移行できない場合は、エクスポートしたコンテンツを編集してこれらのユーザーを削除してからインポートする必要があります。ファイル・システムで、Users.csvアーティファクトを開き、移行しない行を削除します。(各行は1人のユーザーに対応します。)編集の後、Users.csvアーティファクトをターゲット環境にインポートでき、除外されたユーザーは作成されません。

Shared Servicesのアーティファクト・リスト

サブトピック

- [アーティファクト・リストについて](#)
- [ネイティブ・ディレクトリ\(セキュリティ\)のアーティファクト](#)
- [タスクフローのアーティファクト](#)

Shared Servicesのアーティファクトは、Shared Services ConsoleのFoundationアプリケーション・グループにリストされています。Foundationアプリケーション・グループのShared Servicesアーティファクトを表示できるのは、LCM管理者のみです。



注:

Oracle Hyperion Shared Services Consoleに表示されるアーティファクトは、実装ごとに異なります。

アーティファクト・リストについて

アーティファクト・リストについて次のことに注意してください:

- **アーティファクト - アーティファクト名**
- **説明 - アーティファクトの説明**
- **最終変更時間** - このパラメータがサポートされている場合は、アーティファクトがインポートされた時間を反映します。アーティファクトの中には、最終変更時間のパラメータをサポートしないものがあります。
- **最終変更ユーザー** - このパラメータがサポートされている場合は、アーティファクトを最後に変更したユーザーを反映します。アーティファクトの中には、最終変更ユーザーのパラメータをサポートしないものがあります。
- **ファイル・システムで編集可能** - 「はい」の場合、アーティファクトはテキスト・エディタを使用してファイル・システム上で編集できます。「いいえ」の場合、アーティファクトは製品内でのみ編集できます。
- **依存** - アーティファクトの依存関係を一覧表示します。たとえば、ネイティブ・ディレクトリ・グループのアーティファクトを移行する場合は、ネイティブ・ディレクトリ・ユーザーのアーティファクトも移行する必要があります。

ネイティブ・ディレクトリ(セキュリティ)のアーティファクト



注:

ネイティブ・ディレクトリは、Shared Servicesで使用されるデフォルトのLDAPベースのユーザー・ディレクトリです。

表55 ネイティブ・ディレクトリのアーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
ユーザー	ユーザーを識別するユーザー・ディレクトリ項目	はい	いいえ	はい - CSV	なし
グループ	複数のユーザーに同様のアクセス権限を割り当てるためのコンテナ	はい	いいえ	はい - CSV	ユーザー
役割	システムのアーティファクトおよび機能にアクセス権を与える権限	はい	いいえ	はい - CSV	ユーザー、グループ
委任リスト	委任管理者が管理できるユーザーおよびグループを識別するリスト	はい	いいえ	はい - CSV	ユーザー、グループ
割り当てられた役割(製品およびアプリケーション別)	プロビジョニング・プロセスでユーザーおよびグループに付与された役割	はい	いいえ	はい - CSV	ユーザー、グループ

タスクフローのアーティファクト

表56 タスクフローのアーティファクト

アーティファクト	説明	最終変更時間	最終変更ユーザー	ファイル・システムで編集可能?	依存
プロセス定義	ステージ、リンク、アプリケーション詳細などのタスクフローの全情報	はい	いいえ	はい - XML	ネイティブ・ディレクトリ・ユーザー、ネイティブ・ディレクトリ・グループ
タスクフローACL	タスクフローでのACL情報	はい	いいえ	はい - プロパティ	ネイティブ・ディレクトリ・ユーザー、ネイティブ・ディレクトリ・グループ
タスクフロー・スケジューラ	タスクフローでのスケジューラ情報	はい	いいえ	はい - XML	ネイティブ・ディレクトリ・ユーザー、ネイティブ・ディレクトリ・グループ

Shared Servicesアプリケーションの移行と製品間アーティファクトの依存関係

Shared Servicesには、製品間のアーティファクトの依存関係はありません。

Shared Servicesネイティブ・ディレクトリの移行オプション

サブトピック

- [ネイティブ・ディレクトリの移行インポート・オプション](#)
- [ネイティブ・ディレクトリのCSVファイル](#)

ネイティブ・ディレクトリの移行インポート・オプション

次に、Shared Servicesネイティブ・ディレクトリのインポート・オプションを示します：

- **インポート操作** - オプションを選択します：
 - **作成** - ユーザー、グループおよび役割がターゲットに存在しない場合、作成します。ターゲットに存在する場合、作成操作は失敗します。グループ、役割およびプロビジョニングの関係を強化します。
 - **更新** - ユーザー、グループおよび役割を更新します。グループ、役割およびプロビジョニングの関係を置換します。
 - **作成/更新** - ファイル内のエンティティごとに作成操作を試行します。操作が失敗すると、更新操作が試行されます。
 - **削除** - インポートされるユーザー、グループおよび役割を更新します。グループ、役割およびプロビジョニングの関係を削除します。



注：

非アクティブ化されたネイティブ・ディレクトリのユーザーを削除するには、ユーザーを最初にアクティブ化してから削除する必要があります。

- 「インポートを停止する前の最大エラー数」：インポート・プロセスを停止する前に許可するエラー数を指定します。

ネイティブ・ディレクトリのCSVファイル

ネイティブ・ディレクトリのインポート・ソース・ファイルは、CSVファイルです。

CSVファイル・フォーマットは、カンマで区切られたフィールドを含んだ表データ・フォーマットで、二重引用符で囲まれています。ライフサイクル管理は、Excel対応のCSVファイルのみサポートしています。Excelで出力するCSVファイルは、標準のCSVファイルとは次のように異なります：

- 前後の空白が大きい
- バックスラッシュは特殊文字ではなく、エスケープしません。
- 引用符で囲まれた文字列内の引用符は、バックスラッシュではなく二重引用符でエスケープします。

ExcelはデータをCSVフォーマットにする前に変換する

ExcelはCSVファイルで次のような変換を行います。

- タブはシングル・スペースに変換される
- 改行はUNIXの改行("\n")として常に示される
- 12桁以上の桁数は切り捨てられた科学表記で示される

次のエンティティに対して別々のCSVファイルを使用できます：

- ユーザー
- グループ
- 役割
- プロビジョニング情報
- 委任リスト

CSVファイル内の各セクションは、エンティティとヘッダーの2つの必須の行により識別されます。エンティティ行は、頭に#(シャープ)文字の付いた事前定義エンティティ名により識別されます。ヘッダー行は、エンティティ行に続きます。ヘッダー行は、カンマで区切られたエンティティの事前定義属性のリストです。

ヘッダー行の属性の順序に意味はありません。ただし、ヘッダー行に続くデータ行では、ヘッダー行が属性を提示する順序でデータを提示する必要があります。データが指定されていない場合は、カンマを使用して値が設定されていないことを示します。エンティティ行、ヘッダー行、およびデータ行には、処理に必要な情報が表示されます。

CSVファイルで作成、更新、および削除の操作を行うために、次の境界が適用されます。

- ユーザー、グループおよび役割が処理されるのは、一度に1行のデータ・ラインである
- グループ・メンバーは、1つのヘッダーと1つの親グループの下では複数のデータ・ラインが処理される
- 役割メンバーは、1つのヘッダーと1つの親役割の下では複数のデータ・ラインが処理される
- ユーザー・プロビジョニングは、1つのヘッダーと1つのグループまたはユーザーの下では複数のデータ・ラインが処理される

エラー処理は、プロセスの境界に基づいて行われます。プロセスの境界では、1つのエラーは1回の失敗としてカウントされます。

サンプルのCSVファイルおよび属性情報については、次の項を参照してください：

- 218ページのユーザーのCSVファイル
- 219ページのグループのCSVファイル
- 220ページの役割のCSVファイル
- 221ページのプロビジョニングのCSVファイル
- 222ページの委任リストのCSVファイル

ユーザーのCSVファイル

ユーザーのCSVファイルのサンプル

```
#user
```

```
id,provider,login_name,first_name,last_name,description,email,internal_id,password,active
```

```
admin,Native Directory,admin,administrator,user,hss admin
user,admin@hyperion.com,"native://DN=cn=911,ou=People,dc=css,dc=hyperion,dc=com?
USER",{SHA}W6ph5Mm5Pz8GgiULbPgZG37mj9g=,true
```

このサンプルでは、ユーザーのCSVファイルを使用して、次のようなユーザーadminをネイティブ・ディレクトリに作成します: ログイン名: admin、名前: administrator、姓: user、説明: hss admin user、電子メールID: admin@hyperion.com、内部ID: "native://DN=cn=911,ou=People,dc=css,dc=hyperion,dc=com?USER"、暗号化パスワード: {SHA}W6ph5Mm5Pz8GgiULbPgZG37mj9g=、およびアクティブ: true:



注:

CSVファイルで指定されているプレーン・テキスト・パスワードは、暗号化されています。

表57 ユーザー・エンティティの属性

属性	説明と例
id	ユーザーのID 例: admin
provider	オプション: ソース・ユーザー・ディレクトリの名前 例: ネイティブ・ディレクトリ
login_name	ユーザーのログイン名 例: admin
	オプション: ユーザーの名前

属性	説明と例
first_name	例: administrator
last_name	オプション: ユーザーの姓 例: user
description	オプション: ユーザーの説明 例: hss admin user
email	オプション: ユーザーの電子メール・アドレス 例: admin@hyperion.com
internal_id	ネイティブ・ディレクトリ・ユーザーの自動生成された内部アイデンティティ 例: "native://DN=cn=911,ou=People,dc=css,dc=hyperion,dc=com?USER"
password	ユーザーのパスワード 例: {SHA}W6ph5Mm5Pz8GgiULbPgZG37mj9g=
active	ユーザーがアクティブ(true)か非アクティブ(false)かを示します 例: true

グループのCSVファイル

グループのCSVファイルのサンプル

```
#group
```

```
id,provider,name,description, internal_id
```

```
WORLD,Native Directory,WORLD,Contains all users,611
```

このサンプルのグループのCSVファイルでは、ネイティブ・ディレクトリにグループID: WORLD、説明: Contains all users、および内部ID: 611を持つWORLDグループが作成されます。

表58 グループ・エンティティの属性

属性	説明と例
id	グループの識別子 例: WORLD
provider	オプション: グループのソース・ユーザー・ディレクトリ 例: ネイティブ・ディレクトリ
name	グループ名 例: WORLD
description	オプション: グループの説明 例: Contains all users
internal_id	ネイティブ・ディレクトリ・グループの自動生成された内部アイデンティティ 例: 611 注: エクスポートされたコンテンツの内部ID列データを変更しないでください。

役割のCSVファイル

役割のCSVファイルのサンプル

```
#role
```

```
id,product_type,name,description
```

```
Designer_rep,hava-11.1.1,Designer_rep,Report Designer
```

このサンプルの役割のCSVファイルでは、ネイティブ・ディレクトリに製品hava-11.1.1 (Oracle Hyperion Reporting and Analysis、バージョン 11.1.1)の役割ID: Designer_rep、役割名: Designer_rep、および説明: Report Designerの集約役割が作成されます。製品のタイプは、集約役割が属する製品を示します。

表59 役割エンティティの属性

属性	説明と例
id	役割の識別子 例: Designer_rep

属性	説明と例
product_type	役割が属する製品のタイプ(製品コード-製品のバージョンと指定) 例: hava-11.1.1
name	役割名 例: Designer_rep
description	オプション: 役割の説明 例: Report Designer

プロビジョニングのCSVファイル

プロビジョニングのCSVファイルのサンプル

```
#provisioning
```

```
app_id,product_type,role_id,user_id,group_id
```

```
WebAnalysis,hava-11.1.1,Provisioning Manager,pturner,testgroup
```

このサンプルのプロビジョニングのCSVファイルでは、アプリケーション名: WebAnalysisの役割割当てが作成されます。役割IDは、Provisioning Managerで、この役割は製品タイプ: hava-11.1.1に属します。ユーザー: pturnerおよびグループ: testgroupに、この役割がプロビジョニングされます。

表60 プロビジョニング・エンティティの属性

属性	説明と例
app_id	役割が属するアプリケーション 例: WebAnalysis
product_type	役割が属する製品のタイプ(製品コード-製品のバージョンと指定) 例: hava-11.1.1
role_id	一意の役割ID 例: native:// DN=cn=HUB:2,ou=HUB,ou=Roles,dc=css,dc=hyperion,dc=com?ROLE

属性	説明と例
user_id	この役割にプロビジョニングされたユーザーの一意のID 例: pturner
group_id	この役割にプロビジョニングされたグループの一意のID 例: testgroup

委任リストのCSVファイル

委任リストのCSVファイルのサンプル

```
#delegated list
```

```
id,name,description,manager_id,manager_provider,user_id,user_provider,group_id,group_provider
```

```
testlist,testlist,my_list,admin,Native Directory,,testGroup,NativeDirectory
```

このサンプルの委任リストのCSVファイルでは、リストIDとリスト名: testlist、および説明: my_listを持つ委任リストが作成されます。ネイティブ・ディレクトリで定義されたユーザーadminは、このリストの委任管理者です。このリストにより、adminはネイティブ・ディレクトリで定義されたグループtestGroupを管理できます。

表61 委任リスト・エンティティの属性

属性	説明と例
id	リストID、通常はリスト名と同じ 例: testlist
name	委任リスト名 例: testlist
description	委任リストの説明 例: my_list
	リストを管理するユーザーまたはグループの一意のID。各マネージャは、別の定義で識別されている必要があります。

属性	説明と例
manager_id	例: admin
manager_provider	マネージャの勘定科目を保管するユーザー・ディレクトリ 例: ネイティブ・ディレクトリ
user_id	リストのユーザー・メンバーの一意のID。各メンバーは、別の定義で識別されている必要があります。 例: admin
user_provider	ユーザー・メンバーの勘定科目を保管するユーザー・ディレクトリ 例: ネイティブ・ディレクトリ
group_id	リストのメンバーであるグループの一意のID。各メンバーは、別の定義で識別されている必要があります。 例: myGroup
group_provider	グループの勘定科目を保管するユーザー・ディレクトリ 例: ネイティブ・ディレクトリ

Shared Servicesタスク・フロー移行のエクスポート・オプションとインポート・オプション

Shared Servicesには、タスクフロー固有のエクスポートまたはインポート・オプションはありません。ただし、すべてのインポートは宛先アーティファクトを自動的に上書きします。

タスクフローを使用するOracle Enterprise Performance Management System製品は、Financial Management、Performance Management ArchitectおよびProfitability and Cost Managementです。タスク・フローには、タスク・フローとともにエクスポートされる関連付けられたアプリケーションおよびユーザーがあります。

タスクフローの詳細は、Oracle Hyperion Financial Management、Oracle Hyperion EPM ArchitectおよびOracle Hyperion Profitability and Cost Managementの製品ドキュメントを参照してください。

サンプルの移行定義ファイル

Shared Servicesの移行定義ファイルに使用される製品コードは、HUBです。



注:

移行定義ファイルで正しい構文が使用されていない場合、「MDFファイルのフォーマットが正しくありません」というエラーが表示されます。

ファイル・システムへのエクスポート

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
<Package>
  <LOCALE>en_US</LOCALE>
  <User name="" password="" />
  <Task>
    <Source type="Application" product="HUB" project="Foundation"
application="Shared Services" />
    <Target type="FileSystem" filePath="/HSS-Shared Services" />
    <Artifact recursive="false" parentPath="/Native Directory" pattern="Users" />
  </Task>
  <Task>
    <Source type="Application" product="HUB" project="Foundation"
application="Deployment Metadata" />
    <Target type="FileSystem" filePath="/HSS-Deployment Metadata" />
    <Artifact recursive="false" parentPath="/Shared Services Registry"
pattern="Properties" />
  </Task>
</Package>
```

ファイル・システムからのインポート

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
<Package>
  <LOCALE>en_US</LOCALE>
  <User name="" password="" />
  <Task>
    <Source type="FileSystem" filePath="/HSS-Shared Services" />
    <Target type="Application" product="HUB" project="Foundation"
application="Shared Services" />
    <Artifact recursive="false" parentPath="/Native Directory" pattern="Users" />
  </Task>
  <Task>
    <Source type="FileSystem" filePath="/HSS-Deployment Metadata" />
    <Target type="Application" product="HUB" project="Foundation"
application="Deployment Metadata" />
    <Artifact recursive="false" parentPath="/Shared Services Registry"
pattern="Properties" />
  </Task>
</Package>
```

ライフサイクル管理のログ・ファイル

Oracle Hyperion Shared ServicesのOracle Hyperion Enterprise Performance Management System ライフサイクル管理のログ・ファイルは、『Oracle Enterprise Performance Management Systemインストールおよび構成トラブルシューティング・ガイド』に記載されています。